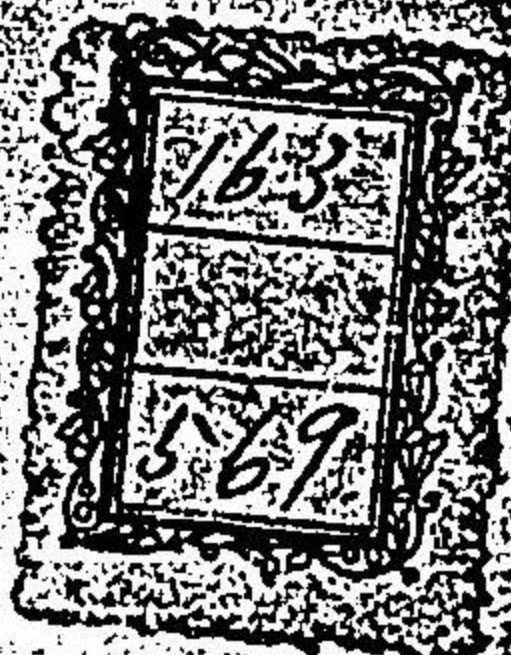


禪門法語全集

第六卷



019647-006-6

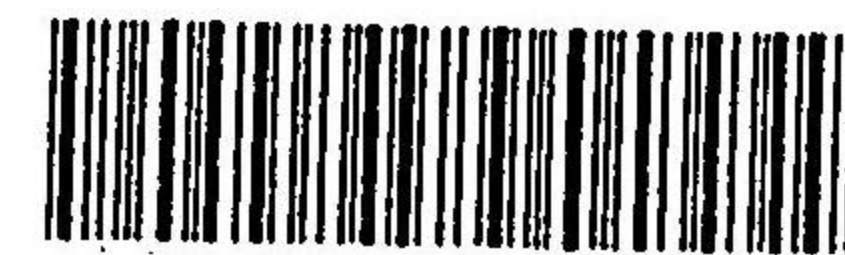
特18-751

禪門法語全集

「禪宗」編輯局／編

M28-29

ABG-0433



前 天龍管長由利滴水師
建仁管長竹田默雷師
建長管長竹田默雷師
東國管長齊門敬冲師
妙心管長綱無學師
大徳川管長菅廣州師

各題字

圓覺管長釋宗演師序文
鴻儒富岡鎮齊居士序文
「禪宗」編輯局編纂

校訂禪門法語全集

全五册洋裝美本一册 正價金貳拾錢
每壹册二百頁以上 特 郵送費金貳錢

第一篇目次	第二篇目次	第三篇目次	第四篇目次	第五篇目次
聖一國師法語 大應國師法語 大燈國師法語 鹽山假名法語 遠羅天釜	遠羅天釜續集 莫反 妄故 想集	正法眼藏隨聞記 蔬草分 快馬鞭	二十三問答 盤山和泥合水集 不助智神妙錄 寶鏡窟之記	枯海指 霧道和尚法語 無難禪師法語

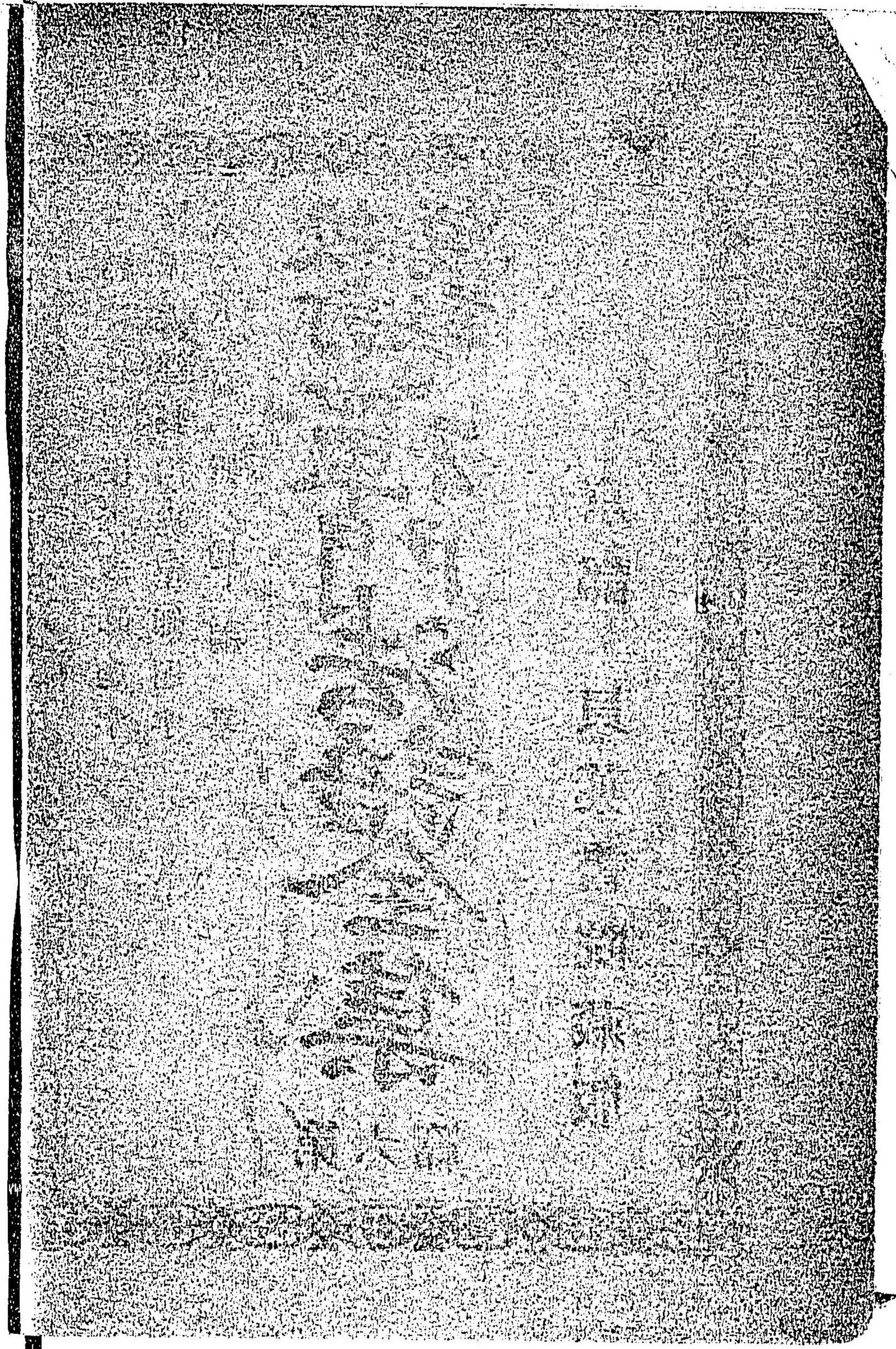
謹告

第六篇以下は「續禪門法語全集」と題し「禪門法語全集」の補遺として發行する筈なりしも載する所皆假名法語に外ならざるを以て更らに前五篇に引續き即ち「禪門法語全集」第六篇乃至第十篇として發行するとし、せり讀者諒焉

發行所

貝葉書院

京都市木屋町二條



印

以法相送

用茲苦白

方厚楚知

印

印



弄珠記
法苑珠林



禪門法語全集

第六編

目次

- 光明藏三昧
- 夢の記
- 月庵和尚法語
- 澤庵和尚法語
- 三身四智辨
- 夜船閑話

施 行 歌
安心ほこりたゝき記
教訓雀轉説

光明藏三昧

解題

この書は曹洞宗永平寺の二祖懷奘禪師がものせられしものにて光明藏三昧の佛祖の玉三昧なることを仔細に説き示されたりされを門外漢には解しがたきふし多かるべけれど參究功を積まば自ら會するの時節あるべしとおもへばこゝに収めつ又懷奘師のことは第四篇の正法眼藏隨聞記の解題に述べおきたればこゝに之を畧しぬ

編 者 職

光明藏三昧序

佛言、智慧光明、如日之照、即是般若觀照、所謂照見五蘊皆空是也、宗門稱之、回光返照、永祖一代、學化未嘗外此、英祖承之、以說此卷、可謂子順於父也、余壯年閱藏於總之山王林、因有上毛、東海老宿、以此一卷、付囑於余、自謂二十年前、得于越之祖山、余喜躍自奉、案登祖法語云、其坐禪者、安樂法門、大解脫妙法也、人人以心傳心之心印、箇箇以法受法之表準、智愚無別、凡聖不隔、盡安住自受用三昧、齊證入光明藏三昧、本離心意識之運轉、更非念想觀之測量、諸人識取也未、良久云、不思量而現、不同互而成、登祖可謂嫡嫡相承、不移易絲毫、豐後州大龍山永慶古刹、寶治年中、英祖之所草創也、現住號大津名玄梁、拾衣資之錢梓、老稱彌喜、卒加贊偈并充序云、時節熟來感妙詮、無量劫外好因緣、金超難繫黃金繳、玉馬尙加白玉鞭、風憂篋音除曉務、水涵月影即秋天、光明三昧堂

堂、露、遍照、紫詞、界三千、

維時明和三年丙戌八月二十三日

第二十八代遠孫八十四翁方面山謹題

光明藏三昧

懷 奘 記

(正法眼藏道元禪師の著す所にして二十冊九十五篇あり) (三昧)は梵語正定又は正受と譯す專思寂相の謂にして即ち正定に住すれば心端直靜寂なるをいふ (三身)法身、報身、化身をいふ (四智)大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智なり (承當)了達領悟といふに同

正法眼藏中に、光明の卷あり、今更に此一篇を示すことは、偏に佛家の面目は、光明藏三昧なることを、脱體ならしめんとなり、これ久參入室の人の自行化他の潛行密用なり、され光明藏とは諸佛の本源、衆生の本有、萬法の全體にて、圓覺の神通大光明藏なり、三身四智普門塵數の諸三昧も、みな此の中より顯現す、
華嚴經第十六、升須彌山頂品、偈云、燃燈如來大光明、諸吉祥中最無上、彼佛曾來入此殿、是故此處最吉祥、云云、この燃燈佛の大光明は、周遍法界にして、凡聖の異同なきが故に、彼佛曾來入此殿なり、如是一開の承當これすなはち入此殿なり、是故此處最吉祥の故に、釋迦如來は燃燈佛より授記を得たまふ時に、無所得とのたまへり、是の故に燃燈佛より授記を得た

(薄伽梵)は梵語にして自在の義なり (六波羅蜜)は即ち佛を稱していへるなり (阿耨多羅三藐三菩提)は正覺といふ



まふ、是れ一段光明且古今の故に、若し縁かも所得あらば二段なるべし、大毘盧遮那成佛神變加持經入眞言門住心品第一云、時薄伽梵、告三金剛手、實知自心、秘密主、是阿耨多羅三藐三菩提、乃至彼法、少分無以有、可得、何以故、虛空相、是菩提、無知解者、亦無開曉、何以故、菩提無相故、秘密主、諸法無相、謂虛空相、
又下、秘密主、大乘行、發無緣樂心、法無我性、何以故、如彼往昔如是修行者、觀三摩蘊阿賴耶、知自性、如幻陽相影響旋火輪乾闥婆城、秘密主、如捨無我、心主自在、覺自心、本不生、何以故、秘密主、心前後際不可得故、如是知自心性、超越二劫、瑜祇行、所謂前後不可得とは、自心本不生なるが故に、是れ毘盧の大智、光明如是なり、
又華嚴經十一卷の偈云、佛身普放大光明、色相無邊極清淨、如雲充滿

（閻浮提）梵語
閻浮提は樹の
名、樹は釋し
て册といふ閻
浮樹ある洲と
いふ義なり四
大部洲の一と
す
（色究竟天）は
色界十八天中
の一なり
（二邊）凡聖眞
俗等の二邊な
り

（三）道信大
師なり

一切土、處處稱揚佛功德、光明所照、咸歡喜、衆生有苦悉除滅、各令恭敬起慈心、此是如來自在用、同經光明覺品第九云、爾時光明過百千世界、偏照東方百萬世界、南西北方、四維上下、亦復如是、彼一一世界中、皆有二百億閻浮提、乃至百億色究竟天、其中所有、悉皆明現、至爾時一切處、文殊師利菩薩、各於佛所、同時發聲說此頌言、如來最自在、超世無所依、具一切功德、度脫於所有、無染無所著、無想無依止、體性不可量、見者咸稱歎、光明偏清淨、塵累悉蠲滌、不助離二邊、此是如來智、しかわれは如來智は光明なり、凡聖眞俗の二邊を離卻する不動智の光明三昧なり、大智文殊の無分別智光なり、是れ只管打坐の無造作に現成し來る、是故に毘盧遮那告秘密主言、大乘行發無緣乘心、法無我性、三聖大師云、不用求眞、唯須息見、あきらかにしる無緣乘の光明藏裡には、我性もなく見解もなし、我と見とは神頭鬼面の異名なり、初め吾我の見より、乃至佛見法見をも立せず、只此光明のみなり、般若波羅蜜、譬如火聚なるを諦聽すべし

り、般若波羅蜜、譬如火聚なるを諦聽すべし
法華經云、爾時佛放眉間白毫相光、照東方萬八千世界、靡不周遍、下至阿鼻地獄、上至阿迦尼吒天、しかわれれば此光瑞は、佛所成就第一希有の靈光なり、文殊大士答彌勒問云、此本光瑞、往昔日月燈明佛說、大乘經時、入於無量義處三昧、まします、今の釋迦牟尼佛說、妙法蓮華教菩薩法佛所護念、ましますならんと、當知此光明無量義を圓滿せる無二無三の大光普照なりと云ふことを、文殊大士は其時妙光菩薩といひき、即爲歸日月燈明佛、入于今其堅固無上道、最後成佛者名曰燃燈佛、此知我門の坐禪は、燃燈釋迦嫡嫡相承の光明藏三昧なり、何更更有餘義耶、是凡聖不二今古一乘の光明なり、内不放出、外不放入、誰か尊卑親疎に於てみだりに退屈せんや、取不得、捨不得、那を取捨憎愛の情識に苦しまんや、しかのみならず安樂行品において告文殊師利言、若菩薩摩訶薩住忍辱地、柔和善順而

不_レ卒暴_{ナラ}、心亦不_レ驚、又復於_レ法_ニ無_レ所_レ行、而_モ觀_ニ諸法如實_ノ相_ヲ、亦不_レ行_セ不_レ分別_セ、是れ只管打坐なり、只管經行なり、亦不行不分別にして、大光明に隨順してもてゆくなり、同品の偈曰、顛倒分_ニ別_セ諸法_ハ有_{ナリ}無_{ナリ}、是實_{ナリ}非實_{ナリ}、是生_{ナリ}、非生_{ナリ}、在_ニ於_ニ開處_ニ、修_ニ攝_ニ其_ノ心_ヲ、安住_メ不_レ動_ナ如_シ須彌山_ノ、觀_レ一切法_ハ皆無所有_ニ、猶如_シ虛空_ニ、無_レ有_ニ堅固_ニ、不_レ生_不出、不_レ動不_レ退、常住一相_{ナリ}、是_ナ名_ニ近處_ニ、是は正真捨方便、但說無上道の直示なり、

震且國にして、達磨大師對_ニ梁帝_ヲ聖諦第一義_ヲ問_ニ言_ク、廓然無聖_ト、是祖師禪の光明大火聚なり、八面玲瓏にして無一物なり、光明の外に無_レ別行_ニ無_レ異法_ニ、況_ナ有_ニ智境_ニ哉、豈_レ有_ニ修證對治_ノ造作_ニ哉、帝云、對_ニ朕_ヲ者_ハ誰_ト、磨云不_レ識_ト、是廓然たる一段の光明のみなり、後來雪竇顯禪師讀して云く、聖諦廓然何_レ當_ニ辨_ニ的_ノ、對_ニ朕_ヲ者_ハ誰_ト、還_テ曰_フ不_レ識_ト、此話に參して脱落せば、通身光明なり、遍界光明なり、

(震且)は唐土なり

世尊三十九世雲門山匡真大師、上堂示衆_ニ云_ク、人人盡有_ニ光明_ノ、在_ニ、看時不_レ見_レ暗昏昏、作麼生_カ是_レ諸人_ノ光明、衆無對、師自代_テ云_ク、僧堂佛殿厨庫山門、いま大師道の盡有光明は、後に出現すべしといはず、過去にありしといはず、傍觀現來といはず、人人盡有_ニ光明_ノと道取するなり、これ大智慧光明の的的の大意なり、皮肉骨髓に聞持すべし、歡喜奉行すべし、佛明は人人なり、釋迦彌勒は他の奴なり、在_ニ諸佛_ニ不_レ増_ナ、在_ニ衆生_ニ不_レ減_セは、這個の靈光なり、故に盡有なり、大地一團火なり、師云、作麼生_カ是_レ諸人_ノ光明、時_ニ大衆無對_{ナリ}、たどひ百千の道得ありとも無對なり、雲門自代_テ云_ク、僧堂佛殿厨庫山門と、此自代は人人に自代し、光明に自代し、暗昏昏に自代し、衆無對に自代して、光明開發する光明藏三昧なり、しかあれば衆生諸佛をとはず、有情非情を分別せず、光明遍照せること久くして、其始めもなく、方處もなし、故に暗昏昏なり、作麼生なり、夜裡行なり、億億萬劫不可思議なり、又僧問、光明寂照徧河沙、問未_レ了_テ師却_テ急_ニ問_ニ、是_レ非_ニ張拙秀才_ノ語_ニ也、僧云

傳大法輪、輪
は摧破の義な
り世尊說法す
る時は能く衆
生一切の惑業
を摧破するを
以て轉法輪と
いふ

是門云話墮也、南無雲門古佛、眼、流星、機、掣電、此、僧此において無語、
たれかははぢをしらざらん、雪峯存禪師示衆云、三世諸佛向火焰裡轉
大法輪、雲門云、火焰爲三世諸佛說法、三世諸佛立地聽、しかあれば火焰
明は三世諸佛の道場なり、諸佛の師なり、是故に一切如來は大寂滅光の
本道場裡にましまして、萬象之中に常恒說法します、貴耳莫賤眼な
り、一堆の火焰、これ前にあらず、これ後にあらず、脱體現成なるのみなり
しかあるを各自に分別を生じて、それがしは本より暗昧の衆生なり、無智の
凡夫なりとのみ卑下し自限し去るは、實に是れ如來の正法輪を謗する無間の
業なり、今雪峯の示衆、雲門道の火焰說法は、正直捨方便なり、但說無上道
なり、一代時教を擧揚するなり、雪峯恁麼の說話、早く是火焰に燒却し了ら
る、汝諸人回避せんと要すや、誦經禮拜、學足下足、悉皆光明の大用現前な
り、誰が恩力によるるか習學する、此の玄旨をしらすして、徒に念辭に勞す
るものあり、亦さはあらじと狐疑して、鬼窟に活計するもあり、入海算沙

沙門は梵語
釋して勤息と
いふ
戒定慧の三學
を勤めて發眼
痴の三毒を息
むるの義にし
て即ち僧のこ
となり

の類もあり、蚊虻の紙窓をやぶるが如くなるあり、話墮、且置、諸大德如何方便
是、さらに泥裡洗土塊にいとまわらすといへども、參禪の徒は、發問に
は先づ話頭を可憐知なり、既に寂照といひ、遍河沙といふ、何んぞ秀才が語
ならんや、何んぞ世尊の語ならんや、何んぞ汝が語ならんや、畢竟何人の語
ならん、僧堂佛殿廚庫山門、誦聽諦聽、
長沙招賢大師上堂示衆云、盡十方界是沙門、眼、盡十方界是沙門家常語、
盡十方界是沙門、全身、盡十方界是自己、光明、盡十方界無一人、不是
自己、
しかあれば佛道の參學かならず勤學すべし、信得すべし、生生佛家に結縁す
るにあらずば、いかでか如是の示衆を聴取せん、かへすくも轉陳轉遠な
るべからず、今長沙道の盡十方界は、參學當人の一雙眼なり、盡虚空界盡全
身心なり、いまだ聖をとらず、凡をすてず、迷人不是といはず、悟人如是と
いはず、是自己、光明と直示す、長沙大師にゆづることなかれ、此、上堂說法

(鼻祖大師)達磨大師をいふ

は、諸人鼻孔裡の横説豎説なり、各各眼睛裡の横拈倒用なり、別に古則公案を拈提して、死に至るまで返照せず、しらざるもあり、個個無視の長者子なり、亦光明の言を聞て愚人思はく、螢光のごとく、燈火のごとく、日月金玉の光りの如く、摸索計較してかゞやきを見んとし、心に縁して、意根下にト度して、空空寂寂の境界に趣向するゆゑに、動を止て止に歸し、或は實有の見有所得の妄見すて難く、或は不思議玄妙の思ひたゆす、只難値難遇とのみ深く思ひすぎたる開眼瞌睡の飯袋子のみ多し、實に不思議玄妙の大事ならば、何ぞ思惟を以て到らんと妄想するや、これ識神の靜慮を佛坐と解了したる魔類なり、このゆゑに鼻祖大師、廓然無聖、不識と開示ししますかたのこころ愚魔の開示にあづかること難値難遇なり、
長沙禪師云、學道之人不知眞、只爲從前認識神無量劫來生死本、痴人喚作本來人、
しかわれれば自心をはかり、所得をたて、修證するは、生死の本をやしなふな

りいま眞といひ本來人と示すは、本有圓成の光明廓然なり、光明廓然の外何物をか貪求せんと擬するや、故に無聖不識、無孔鐵錘、大火聚なるのみなり、

趙州問南泉、如何是道、泉云、平常心是道、州云、如何應趣向、泉云、擬向、便背、州云、不擬、爭知、道、泉云、道不屬知、不屬不知、知、是妄覺、不知、は無記、若眞達、不疑、之道、猶如大虛、廓然洞豁、豈可強、是非哉、

是故に古人以修力造作踏て趣向する者をわはれみて、叮嚀に接引するに云く、道、以有心不可得、以無心不可得、以言語不可通、以寂默不可至、纔涉擬議、隔千萬程、諸人出世間の一切事理、この有心無心の外、修心の想あるべきや、既に有心を以ても無心を以ても不可得といふ、何ぞ早く求心捨心の妄想を放下し來らざる、或は亦此の機にも及ばざる、不信解怠の凡夫は、幻化の我相に貪著し、夢幻泡影の世間をいかめしく

奔走して世智辨聰の鬼につかれぬことを知らず、才覺休むときなく、只つたへ聞たる光明とは、佛の眉間より火星の出るかごとくならんと妄察し、依文解義して、諸聖の眞實を窺明せんと思ひ立つ日なし、久參の達人世に出ることおれども、上參する分なし、況や通身光明、法界光明、蓋天蓋地と決定せんや、おはれむにたらざる著相の賢僧なり、

釋迦牟尼佛言、光光、非青黃赤白黒、非色、非心、非有、非無、非因果、法、諸佛之本原、行菩薩道之根本、是大衆諸佛子之根本也、

しかおれは如來既に體性虚空、華光三昧より出てたまひて、金剛千光王座に坐したまふ、一戒光明を如是演説したまふ、あきらかにしりぬ此光明は青黃赤白黒にあらざること、唯是丙丁童子通身紅なり、泥牛海底走なり、鉄牛無皮骨なり、非色非心なんぞ求心を曾間にさしはさみて、頻りに内心に喘ぐべけんや、又是れ因果の法にあらざ、豈に修證によりて造作せんや、眞に是れ諸佛の本原乃至諸佛子の根本なり、しかのみならず盧遮那佛初發心より受

持しおします一戒光明なり、ゆるぎに心地品と云ふ、一切の名相を離れたり、是を心地戒光と云なり、

釋迦如來曰、若說法之人、獨在三空閑處寂寞、無一人聲、讀誦此經典、我爾時爲現清淨光明身、若忘失章句、爲說令通利、

しかおれば讀誦此經典のとき、我爾時爲現清淨光明身なり、諸佛の身心は光明なり、一切如來の國土は常寂光なり、淨土身心ともに光明にあらざるなし、故に八萬四千乃至無量の光明と云なり、

保寧勇禪師、學火焰說法一話示頌云、一堆猛焰亘天紅、三世如來在以此中、轉大法輪今已了、眉毛之上起清風、

佛家の堂奥に參學するに、おのづから火焰說法を徹見すること如是、しかあれば一堆の猛焰は即ち三世に熾然として、其所生もなく相貌もなく、差別もなし、ゆるぎに所滅もなし、一切無差別なるがゆるぎに、これ森羅萬象衆生諸佛の本地の風光なり、今時の學者何によりてか護念し信解せざる、これを

(四大五蘊) 四大は地水火風をいひ五蘊は色受想行識をいふ此には色身といふに過ぎず

(四生) 卵生胎生濕生化生なり

信解せざるゆゑに下愚の凡夫となり、惡趣輪回をまぬがれず、過いづれの處にかゝると、我にたちかへりて徹見すべし、世諦流市の族らは、幻化無常の諸法を實に常住と計較して、世利の得失にいとまを得ず、明日までもたもちがたく、出るいさ入るいさを待たざる、風前暫時の燈に深く久ぐたのみをかけて、違順に隨て、或は喜び、或は愁ふ、汝か四大五蘊さへ東岱北邙の塵と消へ失せて、我物と執するもの微塵ばかりもなきものを、我れありがほに悠然としてあかしくらす、况や身より外の國城妻子、田宅莊園、金玉衣服にいたるまで、我物と思ひ留るほさあましましきことはあらじ、此のさかひを實と信得せず、ひたすら蓄求し執心する人も、皆殘らずうせはて、あどかたもなくなりゆくぞがなしき、是れ經のをしへをまたず、眼前の道理なり、既に一堆の猛焰なり、故に三世の如來も在此中、四生の群類も在此中、此に生佛の異同あることは如何ぞや、云く、吾我を妄執するものは光明を信ぜずして、我れと生死に浮沉して在此中、示亦光明を徹見するものは平等

(五家七宗) 臨濟、沩仰、曹洞、雲門、法眼を五家といひ之に楊岐、黃龍の二を加へて七宗とす

の無碍の大智現成して在此中、故に永嘉云、不離當處常湛然、覓則知君不可見、取不得捨不得、不可得中只麼得、龍樹祖師讚般若曰、般若波羅蜜譬如火聚、四邊不可取也、大家恁麼の大教を聞くといへども、見るといへども、他の境界とのみ習學して、通身脱落せず、全體に參徹せず、却て云く、我はこれ非器也、初心也、晚學也、或は一惑未斷の凡夫なりとのみ舊見已見を放下せず、竟日竟夜般若の大光明藏中に居して自ら客作の賤人となり、跼蹐辛苦五十餘年の窮子となる、是れ我れと界下慢を起し、元來長者子たる父勅を忘れたる者なり、かなしいかな自ら執除糞之器、常令除糞の賤人となりて、清淨光明身を苦果の穢身と思ひなせる事かなしみの中の悲みこれよりもすぎたることなし、早く已見の私しを可改、たとひ大小權實、顯密の事理、五家七宗の妙旨を談するも、已見を存する時は畢竟生滅に歸す、故に云く、生滅の心を以て實相を解すれば實相却て生滅となる、我見人見衆生見壽者見とは已見なり、身見偏見邪見見取見とは已見

(開山)永平寺
開山道元禪師
をいふ

なり、乃至等覺より妙覺に至るに、塵沙羅縷の無明と云も己見なり、初めは
我見と喚ひ、或は知解習氣、法執悟跡、無事の見、平地上の見と云も、みな
己見の多少輕重によつて喚ひ換へたる異名目なり、カミイカシクシカレハ所以者何は最初大惡邪僻
の見より、羅縷一點の無明に至るまで、己見無き時、何物をか佛見とも法見
とも云べき、誰れわつてか羅縷を存せん、是故に開山曰く、宜く先つ吾我を
盡す可し、吾我を盡んと欲せば、無常を觀す可しと、是極大至誠心の直示な
り、少林大師安心法門曰、問、世間人種々學問ス、云何不_レ得_レ道_ヲ、答、由_レカ
見_レ己_ヲ故_ニ不_レ得_レ道_ヲ、曰者我也、至人_ハ逢_レ苦_ニ不_レ愛、遇_レ樂_ニ不_レ喜、由_レカ不_レ見_レ
己_ヲ故_ニ、又古佛_ハ偈_ニ曰、佛不_レ見_レ身智是佛、若實_ニ有_レ智別_ニ無_レ佛、智者能知_レ
罪障空_ヲ、坦然_{トシテ}不_レ懼_レ於_レ生死、生死を懼れざるは不_レ見_レ身_ヲ故なり、身を見
ざるは己見なきなり、大智光明、如_レ是_ノ無私_ノ故_ニ云智是佛と、しかあるに草
露淨泡の身を愛するとして、汝が本身たる大光明をばわきまの事を批判
をする如く思ひ、是より今ひとつかめしきことのあるべきやうに思ひて、

(四恩)一に國
王の恩、二に
父母の恩、三
に師友の恩、
四に檀越の恩
これなり
(三有)有とは
因果亡せざる
の謂にして善
惡の業に因て
善惡の果を感
ずる義なり欲
界色界無色界
これを三有と
いふ

いたづらに國土の治乱、供養の好惡を談じ、只むなしくすまゆく此身の落居
いかにも思ひ定めたる行李なし、若し此光明藏中に纒も信得行得の分あらば、
何ぞ只我身一つの得脱のみならんや、上報_ニ四恩_ハ、下資_ニ三有_ヲ、山河大地自身
他身皆如如の光明遍照してきはまりなかるべし、
曹山本寂大師頌云、覺性圓明無相_ノ身、莫_レ於_テ知見_ニ強_テ陳_ヒ親_ヒ、念_異、即_於
玄_ニ體_ニ味_シ、心_差、不_ニ興_レ道_相隣_ニ、情_分、萬_法、沉_ニ前_境、識_鑑、多_端、失_ニ本_眞、
如_レ是_ノ句中全_ニ既_會、了_然、無_事、舊_時、人、
是れ即ち光明藏中の直指直説にして、しかも妙修本證を開示したまふ處なり
是僧是俗初心後心を不_レ問、利根鈍根を揀擇せず、多聞多知の差異なく、只
是覺性圓明無相_ノ身と直指して、無_二無_三なり、覺性とは佛性なり、圓明は
一段の大光明なり、汝が即今の幻身無相の寂光なり、故に古德云、通身無_二
影像_ハ、偏_界不_ニ覆_藏、若し汝が未會ならば、更に爲_レ汝_ヲ可_レ問、即今汝が渾身
四大を擊碎し、皮肉骨髓を燒却して、爲_レ我_一物を持し來れ、正當與_レ麼_ノ時、

古今の生佛、三界の凡聖、萬象森羅、都來無相、身にあらざるなし、臨濟義玄和尚云く、四大不_レ解_二說法聽法_一、脾胃肝膽不_レ解_二說法聽法_一、虛空不_レ解_二說法聽法_一、且_レ道何物_カ解_二說法聽法_一、とこれ聽法無依の靈光無相の身なり、古人爲人の故に且_レ立_レ名_ヲ云_フ、聽法無依の道人と、今云覺性圓明無相身と、此一句に分明に説了る、更に老婆心の故に、妙修を示して云、於_二知見_一強て疎親すること莫れとなり、惡知識に親近の者はひたすら見解を習學して、便ち云く、我れ參學の得力に依て、超佛越祖の禪を得たり、他のすべて知見する處にあらす、禪機に親_レ者、外に亦誰れかあらんと、是便ち魔王所著の邪心なり、未得謂得の外道なり、次に計我著相の輩らは、我は是れ鈍器なり、非學性なり、學性に疎遠なりとのみ、退屈してす_レます、是_レ誤起_二知見_一なり此の兩般の知見起て憎愛し是非すること、皆な心念情識の四情慮と變するゆゑに、一刀兩段して云、念_レ異_ハ即於_二玄體_一味_ク、心_レ差_レ不_レ與_レ道成_レ隣、まことにこれ捨_二惡知識_一親_二近善友_一なるべきものをや、邪師の說法によりて見解を習

（大小權實）大乗小乗權教實教なり
 （中滿偏圓）小乘を半字教といひ大乘を滿字教といひ又中道の理にあらずを以て偏といひ大乗の所説は具足圓滿の理なるが故に圓といふ

ひ、親と思ひ疎と思ふ、誤起_二知見_一なり、此の道と玄體とは光明覺性の日月面なり、然るに此の光明中より不覺の一念おこりて、妄心邪想を増長す、これ圓明の心月を障礙する浮雲なり、故に云ふ不_レ成_レ隣となり、情分_二萬法_一沉_二前境_一、如來すでに心佛及衆生是_二無_レ差別_一と説く、亦た云く、唯有_二一乘_一法_一と、恁麼の大教を聞くといへども、見るといへども、汝が分上においては、誤りに人我を起し、貴賤凡聖を分別し、聲色の好醜、貧福損益のために前境に奪ひもち去らる、是れ汝が知見をたのみて、修證に染汚する橋慢不信者の致す處なり、識鑑_二多端_一失_二本真_一、佛法もと萬差の機類に應して、大小權實半滿偏圓、顯密禪教、證道淨土、多端なきにあらす、意根攀緣すればつひに本真を失す、如_レ是_ハ、句中全_レ曉會_ハ、了然無事舊時_レ人、この舊時_レ人は修證用心の造作なく、兀坐不疑の無相身なり、若し一切の知解を毫釐も心頭にかかば、無事にあらす、舊時_レの人にはあらざるなり、釋迦如來曰、我於_二燃燈佛_一處_一、無_レ有_レ法_一得_二阿耨多羅三藐三菩提_一、是れは

(密教)顯
致密妙即宗
相これなり
(證道)博士證
道門博士門を
いふ自力門を
力門といふ
如し

(四事供養)一
に衣被、二に
飲食、三に臥
具、四に醫藥
この四事を以
て佛僧を供養
するをいふ

燃燈佛相見の一句子なり、一句了然超三百億なり、この無所得の光明參學すべし、今如來の末流として、剃髮染衣のともがら、燃燈にてらされて、過日送月といへども、燃燈佛とはいかにあるらんとも疑著せず、ゆるぎに參學の分なし、いたづらに出家の相をかりて、四事の供養をひさばる、實に遊民なり、若し否也といは、且く問ふ汝作麼生が是れ燃燈佛の相好なる、不得有語不得無語、速道速道、かなしいかな燃燈佛とは、過去の佛とのみ習學して亘古輝々今ことをしらす、況や汝が鼻孔裡、眼睛裡の說法涅槃なることをいかでか信得せんや、今一隊の下品の群聞ありて、しきりに生死をいとひ、涅槃を急に求るとして、實有有所得の憤志を起し、汝が我慢上に法欲を増加して求心死にいたるまでやむ時なし、無眼師これを信心ある善人と譽るゆゑに、此の我執有所得の却て精進修行の道人なりと自慢して、つひには餓鬼道を成就す、抑亦た佛家に常精進と參學し、熾然堅固の大定と單傳したるは、汝が邪定のごとく、修と證と二段に趣向して、知解を求ると云にはあらぬなり、

百丈和尚云、靈光獨耀、迥脫根塵、體露真常、不拘文字、心性無染、本自圓成、唯離妄緣、即如如佛、

この靈光は迥去久遠劫來より、盡未來際に至るまで、間斷なきこれを常精進と云、廻に根塵を脱して體露真常なる、是れを熾然常堅固と云、この靈光にまかせて安住不動なるを、只管打坐の三昧王三昧と云なり、しかあれば有所得と云にも深淺輕重あるべし、只執事相有相行を修し、向外求他、文字言句上に辨真偽、或は住相の布施を行し、積功累徳を邪解して、滅罪生善のために身心をくるしめて、是を精進とほこるのみを有所得と云ふにあらず、たとい筆硯を放下し、人事を斷じ、空谷に獨坐し、木食草衣長坐不臥すといへども、汝が心頭において、止動歸止、斷妄つくして、外か偏に眞理に住じ、生死涅槃を取捨し憎愛するは、都來是れ有所得なり、このゆるぎに永嘉大師云、棄有著空、病亦然、還如避溺而投火、捨妄想取眞

理_レ取捨_レ之心成_レ巧偽_一、學人不_レ了_レ用_レ修行_一、真成_レ認_レ賊_一將_レ爲_レ子_一、損_レ法財_一滅_レ功_レ德_一、莫_レ不_レ由_レ斯_一、心意識_一、しかあらば學人身心_一を以て光明藏裡に歸投して、佛光明に通身を脱落して、坐臥經行なるべきをや、是故に世尊の曰く、佛子住_レ此地_一、即是佛受用、常_レ在_レ於_レ其中_一、經行_レ若_レ坐臥_一、この金言を佛子たるもの片時も忘ることなかれ、此地とは光明藏なり、唯一佛乘なり、この佛受用を背覺合塵の一念によりて、忽ち畜生受用餓鬼受用に變作することなかれ、且く道へ燃燈佛及釋迦大師、乃至此の燈燈續焰七佛列祖の相好、さて涅槃しませす道場は、久遠なりとや參學する、常住不滅なりとや聞思する、寂光の寶城にましますとやいはん、佛、眞法身猶若_レ虛空_一とや了解する、若し恁_レ陟_レの分齊にて學得計校の窟宅を透脱せずば、何ぞ佛光明相承の師家といはんや、著師子皮の野干鳴なり、若し向_レ自己_一、眼睛裡_一參究する分なくば、假令剃髮染衣するといへども、可憐愍の衆生なり、千經萬論を解釋するも、算_レ計_レ隣家_一珍寶_一なり、海人知_レ貴_レ不_レ知_レ價_一なり、且道汝即今、

廁屎放尿、著衣喫飯、畢竟これ誰が受用ぞや、しかのみならず水色山光、暑往寒來、春花秋月、千變萬化、これ何の致す處ぞや、實に是れ容顏其奇妙、光明照十方なり、生死涅槃猶如_レ昨夢_一なり、有即は無、無即有なり、若し不如是は、常在靈山と説くも、假法なり戲論なり、不生不滅常寂光と聞くも、只だ言説のみ有てすべて實義なしといはん。

釋迦如來、一戒光明の金言に云く、計我著相者、此法不能_レ信_一、滅壽修證者、亦非_レ下種_一處_一、欲_レ長_レ菩提苗_一、光明照_レ世間_一、應_レ當_レ靜_レ觀_レ察_レ諸法_一、眞實相_一、不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不去_一、乃_レ於_レ學_レ於_レ無學_一、勿_レ生_レ分別_一想_一、しかわればこの光明照世間の金言を、徹骨徹髓に聞取すべし、三世諸佛の大用現前の妙身なり、頂戴奉行し、皆大歡喜せざらんや、しかあるに今時參學の人を見るに、痴暗の因地に處して、朝夕に磨磋して、而後に光明は見徹するならんと待ちくらす、或は復た熾然清淨の光明を紛飛雜念と習禪して、頻りに烟火を拂ひ盡して常寂光を見んとす、若しすべ

(二乘)聲聞乘
緣覺乘これな
り

(無間業)無間
地獄に墮つべ
き罪業をいふ

て起らざるを是と云ば木石土塊是ならんや、みなこれ火をさけて溺に入る下
品の聲聞なり、愚なるかな二乗の坐、および凡夫の趣向を執して無上の大道
を悟らんと要す、痴鈍邪行の是よりもすぎたるなし、是故に云く、二乘、精進、
無三道心、外道、聰明、無三智恵、又愚又癡又小駭、空拳指上、生三賢解、恁
麼の修心求心、計校卜度にさへられて、本具圓成の光明を埋没するのみなら
ず、如來の正法論を謗するなり、無間の業なり、又沙智愚蒙の族のみ、諸叢
林の主として我執有所得の衆盲を接引すること、漢土の隋唐宋より今に至る
まで如三稻麻竹葦、あはれまざらんや、悲まざらんや、間々其の窠窟を出た
る者も、見レ神ヲ見レ鬼ヲ偷心未死却^セ、或は一期の勇に諷りに印可をなし、亦
は一時、憤志起て長坐不臥し、心識困勞して萬事一片となる、動用纒に止て念
慮靜なる、虛虛靈靈として獨朗のごとくなるどころ、是即内外打成一片のと
ころ、自己本分の田地ならんと邪解して、此の見解を以て、無限の禪師に向
て呈^ス其^ノ見解ヲ師見^レ人^ヲ眼なし、故に來者の語に隨て挨拶し、冬瓜の印を許

(長連牀上)禪
堂の坐禪する
牀は長く連れ
るによりひく
らへり

容し、罷參の衲僧と自稱す、淺識少聞の道流は、此の毒に墮落する者あびて
かぞへがたし、誠に是れ末法といひながら、都て悲さことにあらずや、謹て
賢參同志の人に白す、一機一境をとることなく、見解聰明をたのむことなく、
長連牀上の學得をたづさへず、身心を以て上來の大光明藏中に放下して、
二度かへり見ず、悟を求めず、迷を拂はず、念の起るを嫌はず、また念を愛し
て相續せず、當軒大坐すべし、汝が念をつがざるに、念ひとりおこるものに
あらず、只一座の虚空の如く、一團の火のごとく、出息入息に打まかせて、
萬事にとりあはず、坐斷すべし、たとひ八萬四千の雜念起滅するも、當人と
りあはず、捨てはてぬれば、一念一念悉く般若の神通光明となるべし、たゞ
坐中のみにあらず、歩歩光明の運歩なり、一步一步分別するにあらず、十二
時中大死人のごとくなり、一切己見分別なし、しかあれども出息入息、聞性
觸性、無知無分別にて、身心一如の寂照光明なり、故に喚べば即ち應諾す、
是凡聖迷悟一如の光明なり、動用中にありても動用にもさへられず、林花草

葉、人畜大小、長短方圓、汝が心念作意の分別をからず、一時に現成す、是
 光明の動用にさへられざる現證なり、光明自照不勞心力なり、此光明は從本
 無所住、諸佛出世すれども出世せず、涅槃すれども涅槃せず、汝ちが生る時
 光明生せず、汝ちが死する時光明滅せず、佛に在ても増さず、衆生に在ても
 減せず、乃至迷ふ時もまよはず、悟る時もさとりせず、方處もなく、相名もな
 し、これ萬象森羅の全体なり、取_レ不_レ得、捨_レ不_レ得、不可得なり、不可得に
 して通身にかこなはる、上_レ至_レ有頂、下_レ至_レ阿鼻_ニまで、如_レ是圓明なり、神妙
 不思議の靈光なり、此_レ玄旨を信受すれば、他に向て不_レ用_レ問_ニ、眞偽_ニ、市中
 如_レ蓬_ニ阿爺_ニならん、向_ニ他_ニ善知識_ニ印可を願ひ、授記得米をこのむことな
 れ、何ぞ況や衣食住處色慾愛執の畜生の所行においてをや、此三昧は初めよ
 り諸佛果海の道場なり、故に單傳の佛坐佛行なり、既に佛子たるものは、唯
 佛座に安坐すべし、地獄坐、餓鬼坐、乃至畜生修羅人天坐、聲聞緣覺坐にか
 ならずしも坐すべからず、如_レ是に只管打坐して、光陰_ヲ莫_シ度_ニ、是を直心道

場、不思議解脱の光明藏三昧と云ふなり、此篇は門下入室の人にあらすば見
 せしむることなかれ、是自行化他において、邪僻の見あらざらしめじとの護
 法の一片心なり、

弘安元年戊寅八月二十八日

懷 葵 謹 記

光明藏三昧終

古謂因緣時節、寂然トシテ昭著、仍憶吾英祖、始テ說ク之者、因ナリ也、老師幸ニ得ル之者、緣ナリ也、待ツ今半千年者、時節也、所以レ鑲レ版ニ流ニ布ニ乎天下者、豈ニ非ニ寂然トシテ昭著スルニ哉、不肖ニ感激ノ之餘、謹テ跋スル昇ル語者、如是、

維時明和三年丙戌八月廿八日

豐後州永慶寺晚學玄梁謹書

夢の記

解題

此記は白雲慧曉禪師の著す所の法語なり師は讃州の人なるが十七歳の時叡山に上りて行泉僧都に従ひて薙髮受具し尋で泉涌寺に入て律を聽けり一日猛省して曰く株を守て免を待たば焉んぞ所得あらんと即ち棄て去て東福寺の聖一國師に依る爾來服侍すること八年にして粗く所契あり文永三年入宋して兩浙に歴遊し希萎曇に參じて大悟することを得たり既にして本國に歸るや世縁の紛擾を厭ふて痛く自ら韜晦せしが正應五年大亟相藤公師を起して東福寺に住せしむ永仁五年淡然として化す閻世七十坐夏五十四勅して佛照禪師と謚す

編者 識

夢之記

佛照禪師

草庵のどかなる夜、客來て宿せり、昔今の事申述る程に、客曰く、さても値ひ難き佛法にあへり、生死を恐るゝ心偏に無きにはあらねども、世の塵に交る習ひにて、朝夕にまざるゝ方のみ待る故に、何も思ひ分けたる事も無き限りある命残りすくなくなれり、遙なる山水を分ちて、此まで尋ね入る志只其事にあり、如何なる用心を以てか、今度生死をはなるべき、答曰、名を阿練若にかつて、既に數年を送れども、生死一大事何と思ひ分けたる事も侍らず、只夜に夢見侍るを以て、爲_二知識_一世間執著なんぞのわながちに深かきにあらぬばかり也、或經に、此無明は体あるにあらず、夢中の人の、時に無きにあらずれども、覺に至て所得なきが如しと説けり、人臥して見る夢を、是夢は實に有る物にては無けれども睡_{ねむり}の縁來りぬれば、多くの事を見る、國土あり

衆生の中、我あり人あり、故に背くことあれば墮_{おち}り、隨ふことあれば愛を生ず、善き事あれば悦び、惡き事あれば愁ふ、幻_{まほう}に少しも違ふ所なし、列子は六十年夢を見る、莊周に百年蝶に生るとみる、只一夜の程なれば、其多くの年月を送り迎ふ其間に、所作の事善惡の念何許_{いかに}ぞや、此等の夢を見る程は、實有の心地して、更に空と云ふ事を覺せず、覺て後に思へば、只床上に獨り居て、境界の見る所一も實有ることなし、喜の餘波も空しく、憂の殘も留めず、衆生の生花流轉の間も忽て此夢にことならず、と佛處々に説き玉へり、無明の縁によりて、六道四生の夢を見る、無明と云ふは、我心即佛なりと知らざる心也、是迷の一念により、法性本の宮を出で、妄想の貧_う里にめぐる、流轉の間は實ありと思へども、たず_{たず}に佛教にあひて、生死は夢と聞て信ずれば、妄想の夢速かに絶て、本覺の床に到るなり、今日まで夢のながらへつる事は、只實と思ふ心に引れて、佛の世に出で給ふ事は長夜衆生夢なりと知らしめんが爲め也、淺き機を誘ては、先づ我空の理を説く、是を小乗と云ふ

我空と云ふは、一切法は實に有る物也と云へども、我と云ふ物は無き物也と説く也、我身あると云ふ故にこそ、萬の過は發る習なれ、我空なりと知れば此智力を以て永く三界を出で、界外の土に生るゝ也、無き物と思へば、いみじければ、其法實有の失有るが故に、佛強ちに嫌ひ玉ふ也、深き機^{まが}の爲めには、我法二空を説く、是を大乘と謂ふ、我空は如先、法空は所見の夢也、一切法は空也、心より發る故に、實事無しと説く、此大乘の中に權實あれども、皆二空を以て地盤^{つばな}とするなり、されば一切皆夢としるが大乘の佛法にては有る也、此故に賤き草庵の中に年を経る間、夜々夢の中に多くの事を見る、耻もあり、恐もあり、樂もあり、愁もあり、或は人を送て別涙にむせぶとも見る、或は既に病を受けて死門に入るとも見る程は實と云ふ、故に悦も肝にらみて、なげきも骨に徹^{とほ}て、幻に替る事なれども、覺めて願れば更に跡かたもなし、生死本無なる事今こそ思ひしらぬべし、方寸の胸の中に如何なる因縁により、萬里の山河を見、多くの人を見つらん、衆生の一念の心の法

界に遍する事も、此道理にて思ひ知りぬべし、此見處の法は夢なれば、來所も覺める時何れへ去るぞと尋ぬれば去所もなし、正しく見る時は何くに住めるぞと思へば心中にもなし、亦外にも何くにかあらん、三世不可得の不思議の心も、是にてこそ心得られぬべし、衆生に悟を開かするを以てこそ佛ども申せ、夢程の善智識はなしと思ふて睡來らは、本覺の床の上、生死の哀縁を起すと視し、睡去れは始めて妙覺朗然の智慧を發して、生死の本無を悟ると思ひつけて明しくらす程に、幻も少しも夢中に替らねば、悦も歎も只夢ぞと愛すれば、無量の佛法にあひたると思ふて侍る也、客曰、夢も見る時は實と思へども、覺めぬれば空と云ふ事を知る、覺めて後跡なきにて知りぬ見る時も本より空と云ふ事を、幻に見るところの事も、其時は實にある心地すれども過ぎぬれば只夢に同じ、^{おぼろげ} 呢詞^{ねい}を交へし人も、息止りぬれば、夢の中のみる人に異ならず、紅顏翠黛^{すいだい}何處にかなる路頭^{みちかど}の土となりて、年々に春草のみ生たる、是れ別を告て後空にあらず、本より如幻如夢の法なればなり、只生

六
たる者のみ如此なるにあらす、宮も藥屋も終になし、されば春の花秋の紅葉も留らざる習なれば、夢にことならず、世間誰人が主なる、前人去て後人來る、と古人書き置たる事思ひ合せられて、哀あわれにこそ侍れ、子孫も世にあり、名も聞へ、官も高き人なんぞもこそ、さる人ありけりとも知られ侍れ、末もなく、身も味あじの類の、有るとだにも知られぬこそ多くは侍りぬ、されども左様の人も、身の味あじを思はで、爲レ此レ惜レ名ヲ爲レ之レ求レ利ヲ、さこそ世の執心も深かりけれ、たとひ名を後の世に留ても何かはせん、我等か前の世にもさこそ覺あきもあつらめども、一度世を隔てぬれば、聞て喜び愛することもなし、是あだなる名利の爲めに心を碎き、曠くわん却てつの間生死に沈しまん事は愚なる事の極み也、我身を夢の中の身としらざる程は、善を修するは人天の身を受け、悪を作れば三惡趣の身を受く、善悪は替れども生死の中の身とは未だ捨てず、若し我身は即ち夢の中の身也、見み覺知皆夢中の事業なりと知ぬれば、縦ひ一句の經を讀み、一佛の名を唱るも、佛因佛行となり、生死の中の身を受く

七
ること無き也、さて何とて夢も空物にて有るぞと云へば、共に心の所こころ顯なる故と佛所々に説き玉へり、我一念の心と思ふ物を能く尋見るべき也、抑も根塵相對して、一念の起る時にも、何れより來るぞと云ふ事なし、滅する時も何れへ去るぞと云ふ事なし、其の心の所住を尋ぬれば、身の中にもなし、身の外にもなし、内外両中の間に求むるに有る所なし、さても無き物にもあらず、是の心を以て見出す夢幻なるが故に共に、本無の法にて有る也、夢は一心の所見と云ふ事は、人ごとに皆知る處也、幻も同事也、惡念を發たせは心地獄じやく餓鬼の怖しき形となる、善念發れば是心人天の妙たなる形となる、只心より自ら造出して、自ら苦樂をうく、人の與ふる所に非ず、是故に佛、三界唯一心の外無三別法二と説き玉へり、是故に第一の敵也、此怨人を縛して修羅趣に至るども説く、一念の心は如來藏也とも明せり、善事も惡事も只心一つにて有る也、是故に法華經に、是心を一乘と説き、涅槃には、是心を佛性と明せり、惣て一切の諸經に是心一つを明かせり、唯以て一大事因縁と説く、只此事

也、是は常を見る身に侍る、故にケ様にも申す也、本より夢を見ざる人には、此詞も無_レ詮やらんと云へは客、笑て立ちぬ、先に夢を語りし客、重ねて来て云く、何事ぞ夢と云ふ事、仰で佛の教を信するのみにあらず、昔今の事を思ひつゞくるに、少しも替りたる事無ければ疑ひなし、久く習ひ來りける心のくせは、猶わらためにく、覺るにも、詞もかさなり、度もつもらばやと、思をうむる折りもやと思ふて、重ねて尋ね入りたるよしを云ひければ、生死一大事を實しく思ひ入らすば、幾度聞くとも其しるしなき様に侍れども、さすが又聞ざるには如かず、知りてこそ、一念も自ら驚く事も侍れば、常に善知識をも訪ひ、書置る跡をも披き見ば、次第に進む便りともなり侍るべき、先づ佛と云ひ、衆生と云ふは何なるぞと、能く心得べき也、毘盧舍那、性清淨、三界五趣、体皆同、由_レ妄念_ニ故_ニ沈_ニ生死_ニ、由_レ實智_ニ故_ニ證_ニ菩提_ニと説けり、此文の心は、佛も衆生も、本性は清淨にして、少しも替らぬ事なれども、妄念を起せば生死に沈む衆生となり、實智を起せば菩提を證する佛と

成ると説けり、妄念は如何なる念ぞと覺りたるに、人の迷へる故也、東を西と思ふが如し、起信論に説く、何の故としてもなければ、迷へる心の故に東を西と思ふ也、泉涌寺の聖、理性房と申す人の侍りしが、白地に京なる所へ出で立て、京より寺へ歸りけるに、清水の橋を渡りけるが、西へ向て行くと思ひけるを、さても朝は京へ出で、是寺へ歸れば東へこそ向ひたるに、西へ向ふとは何にとて思ふと、我心をわしみけれども、橋を渡りはつるまで、終に其念の替らざりけるとぞ人に語り侍りける、只生死妄念と申すは此程の事也、俄に東を西と思へば、すべて其由はなくて、只妄に思ひ成す計り也、此みだりなる一念の迷の故に、無始より以來我にあらざるを我と思ふて、生死の愛を見つゞくるなり、後にさて東へこそ向ひたるらん、何とて西とは思ふも、道理を以て我心をわやしむるは、佛敎に遇ふて、心源を知りて生死の妄念を思ひ知るが如し、道理を以て東と思へども、橋を渡る程は何にても猶西と覺るは、佛法の理を信するとも多生の薰習力によりて、妄念の暫く残る

が如し、さすがに理を以て思出したるによつて、妄念久しく留る事なきが如し、橋を渡りはて、本心に成りたるは、佛の正法に逢ひて、生死本より無き事を聞きぬれば、妄念の久しく留らざるが如し、客曰く、正しく生死の中の凡夫の妄念の發るやうは、如何に心得侍へき、答曰、先にも申し侍る様に、生死は夢中に見る所也、總て自性有る事無し、此の本より空しき夢の中に、我あり人あり、此に死し彼に生ずと思ふ程の妄なる念や侍るべき、先づ我身と心とは如何なる物ぞと心得て、妄念は思ひ知るべき也、此身は地水火風の四大を以て造られて、堅きは地也、濕うるはあるは水也、暖なるは火なり、動は風なり、此四大の中に我が身と云ふ物なし、魂一たひ去れば、焼けば灰となり、埋めは土となり、目前の我にあらざる事は知られぬべし、身は實に我にあらず、心を我と云んとすれば、經に、心は六塵を縁とする影と説けり、六塵とは色聲香味觸法也、此塵を境として起る也、起る物は何物ぞと云へば、只六塵の影と云ふは實には無き物也、譬へば玉に前の物の色の移るか如し、愚なる

者は、玉に暫に彼色ありと思ふべし、かゝる色は只前の色影にて、玉に色有る事なし、心も此の如し、只前の六塵の影にて、實に心とてはなき物なり、此等は人の詞にてとかく云ふを聞いて、さうて思はんには心得がたし、境にふれと起る念を見るに、少しも影にたがはざる物也、されば内外を求めて心と云ふ物を取らんとするに、三世十方に共に不可得也、此影を實に有る物と思ふ妄念に依て善き心を起さば、其心人天の体とあらはれ、惡き心を起さば三塗さんずの形となる、源を尋ぬれば、有にも非ず無にも非ず、六塵の影なり、實に現になき物と信すれば、善惡の生死絶へんことの程あるべからず、されば吞釣の魚は池中に不レ久、開深般若の人は不レ留ニ生死中ニと説けり、深般若と云ふは無生智慧也、只一切法は心より起るなり、心を尋ぬれば總じて自性なし、鏡の影、水の上の月に異ならず、何ぞ況んや此空き心より、生ずるに、其法争でか現に有物ならんや、深く信せば深般若を信じたる人也、何事も心の所作と云ふ事は疑ひなき也、世間に物を思ひなんぞし侍る人の、不淨

と思へは懸て身に崇出來て、顔はれなんとし侍るが、くるしからぬ事なんぞ
 人にいはれて、何とも思はねば別の事なく侍り、此等は唯心の理ならで、な
 りとか心得侍るべき、元曉も申す人、法を尋ねて、新羅國より唐土へ渡り給
 ひけるが、雨にあふて岩窟の内に留り給ひたり、浄き水の石屋の中より流出
 たりけるを見て香玉へり、水の味のよかりければ、ゆかしさに明けて見れば
 石屋の中に死人をおけり、是時夜吞たりし水を思出で、つき返し給ひたりけ
 るに、法には淨不淨はなかりけり、唯心の所作也とて、華嚴一宗の法門を此
 にて悟り給へり、今は訪ふべき所なしとて、是より新羅國へ歸り玉へり、細
 かに衆生に心得させんとて、佛も多くの經を説き置き玉へども、其詮は左程
 もなき事なる故、利根なる人は只一事にて萬の佛法を了する也、ケ様に心も
 共に空しき事を、凡夫知らずして、我と東を西と思ふがごとし、先づ此生に
 して思ふに、從中有父母の精氣を緣として、一生涯の計只此身の爲めに非す
 と云ふ事なし、譬へば一人の狂人あり、一の死骸をよそかた莊て、之が爲めに家

を作り、衣食を東西に求め、死骸に向てねむる者あらば悦び、うしる者おれ
 は大に嘆る、只此死骸一つの故に朝夕身をくるしめ、心を碎くが如し、是を
 見ては行き通る人何とか申すべき、是は本心を失ふて物に狂ふ人也、如何な
 る人の死骸やらんを取持ちて、我身の體に思ふて、之が爲めに心を悩ます事
 は、思に迷へる事やとこそ申さん、我等が生死流轉の有様すこしも替らず、
 骨は父に受け、肉は母に受くる故に、何れも我物にてなきを、何れよりか迷
 ひける心の誤にて、此死骸を取持ちて我と思ふ故に、朝夕作す所の事は此死
 骸の爲めに非すと云ふ事なし、戴星拂霜、身を苦しめ、奉公に假の名を求る
 人もあり、臉を越ぬ危を渡りて適なる國に利を求むる者もあり、名利は何事
 の爲ぞや、只此死骸一つの爲め也、生死界と申すは、此我を思ふ心なる故に
 此念の深淺に隨ふて善惡の生死處は定まるべき也、世の中の人を見侍るに、
 いやしき下女下男などは、只朝夕命つがん爲めに、春耕し秋をさむるとい
 なみに、身を勞し年月を送る計をのみして、色にうみ身を犯する志なんぞは

惣て無事にて侍る也、世に交りて身も事宜しき人のみ我を愛する心の深き事
 にて侍ればさころ冥より冥に趣き侍らば、餘ろの色香を樂めて、臭穢き身
 を饒て、人の心を誑かす事なしと思ひ解くはうとまじき事に侍るぞかし、世
 塵にうみぬる前には是を咎とも一念思入る折もなし、朝夕此事をのみ營み
 て、空しく短命を送る事は返すくも憂き事也、さても僅かなる身を持ちあ
 つかう事のやすくなふならば何かはせん、田ある者田を愁ふ、家ある者は
 家を愁ふ、無き者は無き愁ふ、有る者は有るに愁ふ、有るに付ても愁ひ、
 無きに付ても愁ふと説かれたる事、目前に思合されて哀にころ侍れ、是は人
 界に付きて申す計り也、有頂の雲の上より無間の炎底に至るまで、生を受くる
 者は皆只此我を思ふ心を以て其体としたる也、されば少しも是心の本と無き
 様をも聞得、一念の信を發さは、空花の三界は風の前の灯の如くならんは少
 しも疑あるべがす、先にも申しつる様に、身はさまざまなく父母の精氣なれば
 非我、心を帯ぬれば、何くにも現に有る物にてはなし、心は總て我にも

らざるを、東を西と思ひける妄念の故に、無始より以來生は替れども、我身
 と執するを以て、生死の凡夫とは成る也、是を由り妄念一故に沈み生死と説く
 也、此身心は共に自性なし、只夢中の思作ぞと信すると、由り實智一故に證善
 提と説く也、只様もなく生死は虛妄よりあり、菩提は實智より發る者也、
 虛妄と云ふは世間になきこと云ふ種のこと也、萬の物に自性とて定る者なし、
 凡夫は一偏に執し定めて分別を起す故に、堅く生死を作す也、佛有のまゝに
 無自性と照し玉ふ故に、實智慧とはいわゆる事也、物に自性無き事とは、先
 の夢の喩にて皆しられぬべし、されども猶物に喩へて委しく心得んとせば、其も
 安くしられぬべし、詞を出すに、イロハの文字をはなれたる事なき物ぞかし
 其にアナイトナシヤとつゝくるを聞いては喜び、アナニクヤと連ぬるとは嘆
 る、只同しイロハの文字なれば、詞に善悪はなれども、聞く人の思作より
 善惡のこへは出来る也、甘葛の汁は甘き物と定めんとすれば、病人の舌には
 苦き物なり、甘く思ふ人の前には、苦しと云ふはひが事也、苦と思ふ人の前

にて甘しと云ふも、僻事也、爰に知りぬ甘葛の汁は、甘きにも非ず、定ま
 る無自性上の甘もあり、苦もあるなり、西施が顔をば見る者、皆是歡喜すとい
 うも、魚鳥は是を見て、驚怖すといへり、此等を以て知りぬ、物には定ま
 れる善惡の性なし、只縁によることを、朝夕我心に向て、實に自性なかりけ
 りと云ふ、這は思合はずべき也、常に淺からぬ中も惡き事一つにて、心に違
 ふこと、待程なく敵のやうになる也、是は心に定まれる性わらばかゝる事は
 有るまじき也、心性定めなき故に、惡しき友にあひて惡を造れば地獄の猛火
 現前す、善友に近づき善を修ひれば花池寶閣眼に當る、惡人臨終に火車現前
 すれども、佛名を唱ふれば花の臺來迎するも、只物に定性なき故なり、客の
 曰、善惡實になき事ならば、惡を作るとも罪なく、善を作すとも福なかる
 べしと心得べきか、答曰、客の心得をば因果撥無はつむの者なりとて怖しき罪たる
 也、先にも申しつる様に、心無自性なる故に、善を修すれば善果を得、惡を
 造れば惡果をうる也、善惡の因果を乱さず、物に定まれる性なき事を心得べ

きにてこる侍るに、善惡性なければ因果あるへからすと云ふ事は大なるひが
 事也、たとへば夢の中に人を殺せば其の夢中に或國王ころせる者を罪すと見
 るが如し、夢は虚しき物なれども、空しき上にも因果は乱るゝ事なし、覺め
 て思へば、殺す者も殺さるゝ者も罪を行ふ、國王も實に有物にてはあらず、
 只夢の所見也、されは善惡とも實まことしく夢と信するならば、速に越こ因果不可
 證しん無上覺ごうかく、其時は罪福惣て主なき故に、五逆を造て佛果を證する事も有り
 ぬべし、若未な至らほきは、因果の道理を少しも不可破、凡夫ならん程は爭
 でか科なからん、されども罪を犯す心の下にも本無の所を信すれば、其罪を
 消す事疑ひなき也、ある經の中に、岸崩て魚殺すとも岸に罪なし、風吹て花
 を散して佛に供養すれども風に福なしと説けり、物に罪福なし、只心の分別よ
 り起る也、されば未な造ら罪つみ、夢なればなにかせんと觀じて、身をも心をも能々
 制すべし既に犯したらん罪をも夢の中のことなれば跡なき心のなす所也、罪
 を造りし時、一念を十方三世に求むるに總じて現に無き物也、若し一念實に虚

空の如くならば、如何にしてか未來果を引べきや能く觀じて、強あがちにおろれ
 をなすべからず、是を無生の懺悔と申せり、阿闍世王、父を殺して佛に詣し
 て懺悔せし時、佛言く、一切法は悉く定まれる相なし、當さに知るべし殺す
 も定相なし、何となれば是れ父只假りに衆生の五蘊におきて妄りに父の念を
 なす也、人の鏡を取り面を見るに愚人はまことの面と思へり、智者は悟て實
 にあらずとしる、此智慧の力にて僻おもひにありつる罪なれば、程なく本無
 の處に歸する也、是を滅罪とは申す也、罪を造らんとて、夢なればなにかは
 くるしからんと云ふは大なる非事なり、此等の間を能く心得へること也、客曰
 、隨三生死、流二歸一涅槃、源二、今の教にて明かに心得らる様に侍るが、世塵に交
 て間なき身には、此法門の詮を取りて、如何様に朝夕の觀念をば持し侍るべ
 き、此外の念誦誦經なども此觀念に便ある様にはいかに侍るべき、答曰、
 先に申す様に、只我心が生死とも涅槃ともいばるゝ物にて侍る、時に常に一
 念の發する處に向て見る侍に、近き事は侍らぬ也、險あやふは人の憎しと思ふ心

の俄に起りたらんと、やがて其念を相續して、にくかるべき故に案し、うら
 めしき折をさまざま思ひつゞけて、中を違ひ、心滿て侍るまでに至らんを、
 生死の流に隨ふとは申侍也、始の一念に此念は何れより發れるぞ、何處に
 住まるぞ、又誰か是念をば起すぞと尋ねし、此時先の憎しと思ふ念の次ぐ事
 はなき也、如何なる世のまざれの中にも、時々には念に心をかけば、生死
 は自ら絶つべき也、夜、株を見て謬て人と思ふて怖畏るほごに、立退て能く
 く見れば、本より人にては無き物を、僻目ひがめに見る故に、株と見つれば恐の
 心即休むが如し、一念の心は發る所もなく、げに物の有ると思ふ故に、念々
 相續して終に生死の大海とはなる也、此の念を立退て抑何物ぞと見れば、本
 よりげには無物なる故に、暫く願れば不生也と知りぬれば、其宿念の生死絶
 ゆる也、抑佛、此大乘無生の法門を一の阿字に皈入し給ふ、故に開けば多く
 の法門となれども、つゞじれば一阿字也、大日經の疏に、阿字は即本不生不可
 得空也、普攝す一切の佛法を、此空を以て加持力によるが故に、能く攝て一切

其に無始の妄惑深き故に、我をのみ信して佛語を信ぜず、故に悪者にて侍れば、何として正佛法の機にてあらんぞなんと思ふや、纒にわろからん我身を尋ね見よ、善悪ともに本空なる夢の中の人也、本空ならば佛と少しも替るべからず、何に依てか界き機と定むべき、先に申しつる法門とも必ず悪き念を捨よとは申し侍らぬ、只善悪の念起らば、此念の本無の所を信ぜよと勸むるばかり也、戒定慧ともにわたりて、内外深淨ならんころ、殊に希ふ事にて侍れども、代もすたり人もよわくなりて、何にも氣ぬることは叶ひかたぐ侍れば、只今度一念なりとも大柴の法門を信じて、正しく成佛の種子を植よと云ふ也、雜亂の念ある者を凡夫とは云ふ、故に凡夫ならんには、妄念の起らぬことなからんとは有るまじき事也、さればとて凡夫大乘の機たるまじきことは總じて無き也、薄地はくちの凡夫如來の秘藏を知ると説かれてこそ侍べれ、世間の人を見るに、佛法とてなべて思ひたる事は、念佛續經なんどの功に依りて、後生に淨土に生れんと思ふ計り也、一念もかゝる法を信せんと思ふ人は難し有也、

是にて知りぬ値ひ難く信じがたき法にて侍べり、信じがたきにて知りぬ信じぬれば不思議の益ありと云ふことを、一句を唱へて無量劫の罪を滅すと云てとは、佛語なれば、よも虚言にては侍べらじ、無量劫に積置く所の罪も、現に有る物ならば、時の間争でか消ゆる事はあるべき、本より空き故に是の理を悟り玉へば、佛の名を唱れば何とも知らねども滅する也、まして一念なりとも此理を信せんこと、何計いかばかりの功德ぞや、仰て信心を起すべき也、ク様に申しつるも亦夢の中の詞にて侍りけりと云へば、客かさけす様に失せぬ、又主人も其時失せぬ、あやしき柴の庵も松風ばかりに成りぬ、

法語

百度惡道に落つと云ふとも、法眼開けざらん知識に値ふことなかれ、能く此心を知りて修行すべし、本佛不言、經論無口、善知識を以て如來の本とす、佛道に値ふことの難さには非ず、善知識に逢ふことの難さなり、佛道の覺り難さには非ず、久しく修行することの難さなり、生死出で難さには非ず、志

法を成する也、阿字有_二色形_一、有_二聲義_一、或時は文字の色形に心を安し、或時は聲にて誦み、開ならん時義をも念ひつゞけは、無上の理に住せん程あるまじき事也、南無阿彌陀佛と唱ふるは、猶文字も多くしてまざるゝとも有りぬべし、口を開けば、自ら出息は阿の聲となる故に、いかなるまざれの中にも、此行程は易かるべき事に待べらん、百千の經論に説く所の法門も、皆此一字に攝る故に、一聲なれども、一切經をよむ功德と同じかるべし、亦先に申しつる法門どもは皆此字の義なる故に、何とも知らず誦る功德だにもおびたらしき事也、まして一念なりとも無生の理を信じて、此一字を持したらん功德は、無量劫を經ども説盡し難く見ゆ侍るなれば、最後臨終の時にも只口を開き、阿の息の上に念を置いて終を取るべし、其時はことどもさばるる故に、何にも思ひをめぐらすにも及ぶべからず、中に義を思はんとせんには障りともなりぬべし、只標もなく一の阿の字にて終らんには、無念自證にかなひぬへし、客曰、無我不生の理、佛法の大地なる事は、實にさう侍べらめ

、されども我心を見るに、我を執する心片時も忘るゝことなく、憂も喜も身に來る時は、速に覺ゆる事も侍らず、かやうの法門は智慧かしかかりし人の爲め也、末代惡世の凡夫は、惣じて思ひよるべきことにあらずと申す人の侍るも、我心に思ひ合すれば、實に理なる方も侍べるにや、答曰、根機まちくなる故に、一味の法なれども、様々に佛説を替へ玉へば、必ず一事を以て餘の道をふさぐべからず、此無我不生の法門は、佛法の源なる故に、無宿縁の人は一念も信することなし、多生の縁を結びたりし人何ぞと云ふ故はなれども、只此理を聞けば覺る也、一念も信心おこらずば、此信力によりて、無始の重罪を滅して、必ず佛果の種子を頼耶たいやの底に種しところ見へ侍べれ、されば大乘の根機には破戒造惡の者をも捨てず、只一念の信解を以て其穢と定むる也、其故は我法を現に有る物と思ふ前にて、我心の善惡の沙汰にも及ぶこと侍るべし、已に生死涅槃は昨日の夢と信すれば、此信力善惡を越ゆる凡情の前には、僅に善惡と定まる事、にわかにかはらざる也、

其に無始の妄黨深き故に、我そのみ信して佛語を信せず、故に悪者にて侍れば、何として正佛法の機にてあらんぞなんと思ふや、機にわろからん我身を尋ね見よ、善惡ともに本空なる夢の中の人也、本空ならば佛と少しも替るべからず、何に依てか卑き機と定むべき、先に申しつる法門とも必ず惡き念を捨よとは申し侍らぬ、只善惡の念起らば、此念の本無の所を信ぜよと勸むるばかり也、戒定慧ともにわたりて、内外深淨ならんころ、殊に希ふ事にて侍れども、代もすたり人もよわくなりて、何にも氣ぬることは叶ひかたたく侍れば、只今度一念なりとも大乘の法門を信じて、正しく成佛の種子を植よと云ふ也雜亂の念ある者を凡夫とは云ふ、故に凡夫ならんには、妄念の起らぬことなからんとは有るまじき事也、さればとて凡夫大乘の機たるまじきことは總じて無き也、薄地はくちの凡夫如來の秘藏を知ると説かれてこそ侍べれ、世間の人を見るに、佛法とてなべて思ひたる事は、念佛續經などの功に依りて、後生に淨土に生れんと思ふ計り也、一念もかゝる法を信せんと思ふ人は難し有也、

是にて知りぬ値ひ難く信じがたき法にて侍べり、信じがたき法にて知りぬ信じぬれば不思議の益ありと云ふことを、一句を唱へて無量劫の罪を滅すと云ふとは、佛語なれば、よも虚言にては侍べらじ、無量劫に積置く所の罪も、現に有る物ならば、時の間争でか消ゆる事はあるべき、本より空き故に是の理を悟り玉へば、佛の名を唱れば何とも知らぬども滅する也、まして一念なりとも此理を信せんこと、何計いかばかりの功德をや、仰て信心を起すべき也、ケ様に申しつるも亦夢の中の詞にて侍りけりと云へば、客かさけす様に失せぬ、又主人も其時失せぬ、あやしき柴の庵も松風ばかりに成りぬ、

法 語

百度惡道に落つと云ふとも、法眼開けざらん知識に値ふことなかれ、能く此心を知りて修行すべし、本佛不言、經論無口、善知識を以て如來の本とす、佛道に値ふことの難さには非ず、善知識に逢ふことの難さなり、佛道の覺り難さには非ず、久しく修行することの難さなり、生死出で難さには非ず、志

の難きなり、空中に手を放ち、空山に坐せよ、座に何物ありてか一塵に預らん、無上妙道は人に隨て、正に自己の脚跟の下に在て一点も欠げず、汝外に向て走り求めざれ、進む時は法の邊際を離却す、退けば法に背く、不進不退、氣ある死人の如く、思量の能く知る處にあらず、如何か手を下さん、木人の月に嘯き、石女琴を鳴すのみなり、我をして何れか説かしめん、妙は不傳に在り、山は是れ本の山水は是れ本の水、若人此に向て目を舉れば白水萬里を隔つ、言下に祖宗に合ふ者尙是れ鈍痴なり、只佛を超ゆ祖を越ゆて一塵も拂はん、猛火の底一塵も留めざるが如し

夢の記終

月菴法語

解題

月庵和尚、諱は宗光、嘉曆元年を以て濃州に生る幼齒にして峰翁を大圓寺に禮して弟子と爲る年方に志學にして祝髮進具す既にして古先元、夢想石、笠仙僊、等の諸名僧に參せしが將さに元國に遊ばんとして峰翁を歸省す翁曰く汝何ぞ一鞭を着けて蘊奥を盡さざる若し向上更に事あらば支那西天汝が去るに一任すと師遂に行を止む一日翁、師を喚ふ師唯諾す翁曰く是れ什麼ぞ師茫然として對ふるなし翁阿して曰く多年、香厨を費して個の飯袋子を養ひ得たりと師潜然として寮に歸て徹夜寝ねす黎明に至て師の頭、白に變ず以て其道に志すの心尋常にあらざりしを見るに足れり翁順世の後、孤峯明、大虫岑、等の諸大老に謁して禪の堂奥を究め悉く其印記を受けたり既にして去て紀勢の間、縁に隨ふて陸沈す又但の黒川に遊びて山水の幽遠なるを愛し錫を駐めて大明寺を開く州守左金吾源時照、外護となる又州の圓通、大同、攝の禪昌

を親建せり慶應元年三月候ち微疾を得、然れども酬對常の如くなりしが夜に入て遂に衆を辞して端坐長往す春秋六十四、法臘五十、勅して正續大祖禪師と諡す師常に印可を慎む嘗て謂へることあり一人を得ずして門庭荒蕪すとも卒に先師を屈辱すべからずと故に會中衆多かりしと雖も而も得法の者は甚だ妙かりき此法語の如きも師が苟もせざるの筆に成れるもの其後人を益するの大文字なるや亦贅するを須わざるなり

編者識

月菴和尚法語

示三宗如禪尼

大道廓然として、本より示すべき事もなく、又明むべき物もなし、只人一念自ら迷ふて、種々の業をつくり、六道に浮沈す、是故に佛祖世に出で、是れを救ひ玉へり、衆生の根機まちくなれば、教法は一旦かはれども、肝要は只直指のみなり、別に更に道理なし、利根上智の人は、頓に佛祖の位をこへて、一切の法に拘はらず、鈍機下劣の者は、聞けども信せず、見れども貫ばず、只目前の營ばかりにて、後世の事を知らず、たましく善知識のすゝめによりて、少しきも生死を恐るゝ心あれども、又有相の行に執着して、無上の道に向はず、たどひ坐禪工夫する人も、或は妄念妄境を厭ひ、或は無心無念に住し、又は有無に拘はらずと思ひ、又はもろくの見を離れたると思ふて

眞實の志を起さず、空しく光陰を送る、俄かに死に臨んで病苦いたくせむる時、前後茫々として平生の伎倆すべて用ぬえず、初めて驚き怖れて千萬後悔すれどもかなはず、古人是を渴に臨んで井をほるにたとへたり、夫れ人身受けがたし、佛法遇ひがたし、相構へてく大願力を起して、三寶にも深く祈誓し、自らも痛くはぢしめて、今生に早く明むべし、來世を期することなかれ、汝若し此理りを信じて大事をとびんと思はゞ、何とも知らざる處に急々に眼をつけて、知らざる處にも止まらず、又知る處にも向はず、直に見、直にさばめよ、更に路もなく心も及ばずと思ふて退屈することなかれ、教の外に覺りあることを信じて、行住坐臥しばらくもさしつかかず、急々に志をすゝめてよく用心せば、必ず女身を變ぜず當處に解脱して、生々世々大安樂なるべし、うたがふことなかれ、又一偈を示す、

汝 永直 指一 曲 說 如 是 只 要 門 開 莫
認 死 子 示 慈 雲 禪 尼

「當處」即坐と
 しよ同し

「瓦子」世尊の
 一代藏經は畢
 意門を飲くの
 瓦子なり

「報命」報身生
 命にて即ち報
 身の命終るを
 いふ

世間は無常也、一切住らず、たとへば夢幻泡影の有に似て實なきが如し、世人は此理りを知らずして、實に我れ有りと思ふて、諸の貪欲執心深く、名聞利養甚し、只今生の事ばかり思ふて、あけくれ妻子眷屬衣食財寶の營に心をつくすばかりにて、時々生死の到來し、念々に殺鬼の犯し責むることを知らず、病難忽ちに至て、報命終らんとする時、初めて驚き、后生たすからんことを思へども、すべて甲斐なし、只茫々として死するのみなり、是故に惡道にちて平生所作の業因來り報ひて、種々の苦をうけ、身をやぶり、心をくだきて、劫を歴、生を重ねれども浮ぶことかたし、實にあはれむべき者也、此理を知らずして、破戒無慚邪見放逸の者を人中の鬼畜と云ふ、是を恐れ是をなげきて、佛をあがめ、法を信じ、僧を供養し、諸の善事をなして、世間暫時の相に着せず、偏へに生々世々たすからんことを思ふ、是を殊に智ある人と云ふ也、然りと雖も只世間の善事を行するばかりにて、菩提心なきは、有相の痴福と成りて、輪廻の業をまぬかれず、内に菩提心を起して、外に善

行を重ね修する、是れ内外相應の功德也、ろもくいかんが菩提心を起すべ
きとならば、先づ世間の相は本より非相なりと信じて、見聞覺知に於て有と
思はず、無と思はず、生と思はず、滅と思はず、諸の道理をなし、料棟分別
を成すべからず、たとひ妄念暫時起るとも再びつがず、又かへりみることをな
かれ、如是ならば諸の事に於て執着住着あるべからず、是れ先づ菩提に入る
路なり、此に於て又茫々として何とも知らず、とりつく處なしと思ふてうた
がひをなし、退屈することなかれ、少しさもとりのつく處あるは、皆輪廻の業
也、なにも知らざる、即ち生死を出で、煩惱をはなる、處なり、只かく
の如く深く信じて、なにもはかりがたき處に直に眼をつけて、行住坐臥念
々をこたらず、志をすゝめてきはめて看よ、必ず覺る時節あるべし、是を菩
提心を起して現身に成佛する人と云ふ也、たとひ又今生にてささることおろ
しといふとも、此信力つよくんば、諸の悪業を轉して永劫人身を失せず、願
心を成就して、大安樂の地に至るべし、疑ふことなかれ、

示三宗三禪關二

大道方所なし、目前を離れず、心法形なし、物に即して即ち是也、一念不生
なれば脱体顯露す、疑心わづかに起れば是非紛然たり、是非紛然たれば六道
現前す、疑心休歇すれば生死永く離る、夫れ疑心起ることは信心よはきによ
る、信力つよき時は只一念也、一切一念なれば諸の事に於てへだつる思ひな
し、へだつる思ひなければ、目前の萬境、一切の善惡、更にいかなとあるこ
とを覺へず、只一片地のみなり、又何のうたがひかかこらんや、然りといへ
ども信力なをよはくして、疑心やゝ起らば、是をやめんとするなかれ、只疑
心の起る處について立かへり看よ、ろもこの疑心これなにぞと、かくのこ
く行住坐臥、一切作用の時、わするることなく、怠たることなく、急々に眼
をつけてよくくさはめて看よ、必ず忽然として一笑の時節あるべし、重ね
て一偈を示す、

生死去來 棚頭傀儡 一線斷時 落々磊々

示三宗清禪關

我心本來清淨なること、青天白日の一点のくもりなきが如し、森羅萬象、一切の有情無情は皆是れ此光の轉變也、すべて實體あることなし、是を悟るを佛と云ひ、是に迷ふを衆生と云ふ也、迷悟は妄心の分別なり、佛と衆生と更に別体なし、若し人かくの如く當下に開悟すれば、一念の工夫をからず、初心即正覺の佛なり、更に何の坐禪修行をか勞せん、見聞覺知、行住坐臥、一切時中、着々ちやくちやく活脱かつたつの三昧現成受用の處けんじやうじゆうなり、汝もし未だ悟らずんば、只かくのごとく直下に信受して、なにも知らざる處に向て、念々志をすゝめて我心の根源いかんときさほめみるべし、さほめくつていかんともせざる時、志をゆるくすることなかれ、いよく知らずんばいよくすゝむべし、たゞ又今生にて明ひることなしと云ふとも、此信力に依て來世定めて大解脫の處に到るべし、うたがふことなかれ、

示三存上人

（初心即正覺
初發心時成
正覺の體な
り）

道に向ふことは誠を存するにすぎたるはなし、誠を存する時は萬緣萬境皆即道にして、此外別に道なし、存せざる時は目にふれて道を得ず、やゝもすれば妄念をのぞいて道を明むべしと思へり、この故に是をとり非をすて、妄をいとひ眞をもとめて、日々夜々に心を苦しましむるばかりにて、悟ることなし、只今生むなしのみにあらず、千生萬劫ちやうまう悲趣ひきうに浮沈して、苦を受くることやまず、實にわけられむべき者也、しかも誠と云ふ言をば聞くと、實にまことの理をしる人まれなり、夫れ誠と云ふは二の心なきを云ふなり、二の心なしと云ふは、是は是にして是の道理なし、非は非にして非の道理なし、生は生にして生の道理なし、死は死にして死の道理なし、乃至一切の念其物に即して、物に即する道理なし、只直に見、直に聞て、更にふたゝび頭をめぐらざる、即ち汝が本來の面目、現成の時節也、是をしばらく二の心なしと云ふ也、萬法を混じて一にして二なしと云ふにはあらず、然りとはいへども此とどばをみて、道理を心得わきたるを至極とすべからず、實に誠を存する處に

かなふべし、誠を存する處にかなはんと思はゞ、只志をすゝむるにしくはなし、志親切なる時は、まことを存する心も忘れはてし、通身只是一片の生鉄の如し、こゝにいたりて又主住することなかれ、いよく志をたけくはげましてすゝむべし、志きはまりて忽然として轉する時、大地山河身に和して一時にひるがへる、初めてしるべし三世の諸佛歴代の祖師天下の老和尚一等に痛棒を喫する分あることを、且く道へ誠を存するか誠を存せざるか、老拙甘なつて塊を逐ふ狂狗となる、汝試に辨じて看よ、

示信女慶明

佛法と云ふは別の事にあらず、只我心也、我心をよくもてば即佛の心なり、我身をよくもてば即佛の法なり、我心をおしくもてば凡夫の心なり、我身をおしくふるまへば凡夫のわざなり、凡夫のわざと云ふは、目によき色を見て欲をおこし、耳によき聲を聞、鼻によき香をかぎ、舌によき味をなみ、身男女にふれてよき心をおこすことなり、是故に我にしたがへば愛執の心をふかく

し、我にうむけは怨敵の念のよし、此身のあだなる事は夢幻泡影のごとし、今日ありといへども明日までたのみがたし、たとひ百年のよはひをたもつとも、只昨日のゆめのごとし、かやうにあだなることを思ひしらす、いつまでも世に有るべき思をなして、妻子眷属よろづのすざわいののみわけくれ營むほかに、心もつかれ、身もくるしく、よろづにつけてひつかしき事たゆす、又富人はいよく財寶を持かさねんと思ふほかに、利錢寶買よろづのわざをなして、不斷にあきたらぬ思あり、貧者は我身一身をもたすけがたければ、妻子眷属までも扶持しがたくして、兎に角にあけくれ案ずれども案じ出したる事もなければ、ぬすみをもせばやと思へども、それは又命を失ふ事なれば、かろろしく思ふてせられず、乞食なども又一身の事ばかりにてもなければ、ろれも又かなはず、なにともかじもする方便なくして、あけくれなげさかなしむばかりなり、よきにつけても、あしきにつけても、人間のわざは苦は多く樂は少なし、今の苦みは即後の世の地獄餓鬼畜生修羅もろくの惡道の業

と成て、我身をやさことがずはひら、又はさうさく劔となるべし、すべてく
他人の仕出したるわざはひにはあらず、只我心づかひも、身のふるまひも、悪
によりてかゝる苦をうけて、生々世々悪道に浮き沈むなり、たとひ又人間に
生れて位たつとき人富者となり、あるひは天上に生れて萬のたのしみをうく
れども、是も實の道心なくして名利のために善根をなし、むくひなれば、一
巨のたのしみばかりにて、死すれば又悪道に落つ、是も始終たのしむべから
ず、是皆善悪のかはりはわれども、心をあしくもつに依て直に佛法を覺らず
、輪廻生死をまぬかれざるものなり、うもく心をよくもち身をよくふるま
ふと云ふはいかなる事ぞや、夫れ我心は我身未だ生れず父母の縁もなかりし
さきに、明々了々としてかくれず、くらまます、まよはず、さはりなきものな
り、上佛祖と同一く、下一切衆生乃至心なき草木までも同体にして、更に二も
なく三もなし、此心は天然にしてわたくしなきゆゑに、佛に於ても増すことな
く、凡夫にありても減することなし、諸の善悪に於てもへだてなく、僧俗に

ありてもことなるなし、かくのこどくすぐなることをばしらすして、佛をば
貴く思ひ、衆生をば賤く思ふによりて、我心のすぐなることをもわきまへず
、本より生死なきことをもしらす、朦々茫々としてあかしくらすのみなり、
是即生ながらくらき地獄にかちたるものなり、此くらきやみをはなれて、や
がて明かなる佛の心にならんと思はゞ、只一切善悪是非の思をうちすて、
我身のいまだ生れざりしさきの心はうもいかなるものぞと起居にわすれず、
念々さはめてみるべし、若又一切の事に逢へばむつかしく、まざらかざる、
思ひあらば、しづかなる處に坐して、先づ香をたき、佛を三度をがみ其の後
手をくみ足をくみて坐すべし、手をくむやうは、先づ右の手をあをのけて下
におきて、左の手をあをのけて上にかさねて、両方の大指をかしらをさしあ
はすべし、足は左の足を右の足の上にかさねべし、目は半ばかりあけて、口
をばふさぎて、齒をくひあはせて、舌をば上のあごにつけておくばをよく
くひつめて、せなかをすぐにたて、心をつよくもちて、さきに示したる如

く我もいまだ生れぬさきの心はいかなる物ぞ、と念々にうたがひて、さばめくくてみるべし、かやうに坐しても臥しても、萬の事を作す時もわすれず用心するぞ、工夫と云ふ、かくの如く坐禪工夫して、をこたひなきを、心も身もよく持ちふるまふ人と云ふなり、かやうにねんごころにさしつかはれぬは、必ず我心の源をささるべし、心の源をささるれば、本より佛もなく衆生もなく、我もなく人もなし、善悪是非一切のわづらはしき思ひ、夢のさびるが如く、何事もうちやぶれて、只我もなかりしさきの、天然のわたくしなき心ばかりあらはれて了々分明なり、此上において又萬の思の浮べども、すべてわづらひなし、たとへば鏡の上にもろくの影のうつるが如く、水の中に月の光りの明にみゆるが如し、是心にもあらず、是色にもあらず、是念にもあらず、是鏡にもあらず、畢竟して何にもあらず、是を真心とも云ひ、正念とも云ひ、佛境界とも云ひ、常住の法とも云ひ、本來面目とも云ひ、教外別傳とも云ふ、千生萬劫生滅するに似たりといへども、終に生滅にあづからず、

處にしがひて去來自在、一切さわりなし、是を眞實の極樂世界、安養の淨土、大寶の藏、無爲の都と云ふ也、かゝるありがたき事を信じて又うたがはず、さきに示す如く、坐禪工夫せば、たとひ今生にて悟ることなしと云ふとも、臨終の時正念に住してさるべし、更に惡道にあつべからず、すみやかに身をかへて貴人に生れて、をさなくより佛法修行して、やがてささる人となりて、一切の衆生をみちびき、人天の大導師となるべし、相構へて疑ふべからず、

示妙光禪人

先日十八首の高詠、意句絶妙にして、殊に心目を驚かす、仍て法語一篇説示せんことを承はる、山野老病相侵して、晨夕平臥し、身心昏蒙にして、只痴兀に任するのみなり、法曾て知らず、語亦會せず更に此何をか説き、又いかい示さんや、然りといへども只此れしらす、會せず、三世の諸佛も終にいかんともせず、歴代の祖師も氣をのみ、聲をのみ、尽大地の人更にいづれの處

に向てか摸索せん、這裏に到て汝如何か測度し、如何か參取せん、山僧即今
 恚慳に道ふ、平生の肝膽底をつくしてかたふけをはれり、汝還て會すや、若
 し又根思^{ちんご}廻回にして、警地^{けいぢ}なることあたはずんば、只此不知不會の處につい
 て、十二時中、行住坐臥、茶裏飯裏、笑裏語裏、一切の所作所爲の時、大勇猛の
 志をおこし、急々に眼をつけて、念々にこれなにぞとさばりみるべし、凡そ
 學道の人、此不知不會又このなにかさばり、何をかさとらんと思ふ人もあ
 り、或は不知不會と思ふてすゝみぬざる人もあり、或は是を空劫已前の事と
 思ひ、或は今時日用の心と思ひ、或は萬法の自性と思ひ、或は本來の面目と
 思ひ、或は即心即佛と思ひ、或は非心非佛と思ひ、或は不是心不是佛不是物
 と思ひ、或は山は是山、水は是水、柳は緑花は紅と思ひ、或は全体作用と思
 ひ、或は教外の玄機と思ひ、わづかに口をひらけばあやまり、念を動すれば
 ろむくと云ひ、或は人に一問せられて棒を行し喝を下し、近前^{しんぜん}又手し、袖を
 拂て去り、種々の伎倆^{ぎりやう}をなすものあり、かくの如く諸の異見邪解稱計すべか

らず、皆是れ天魔外道の心なり、多くはかくのごとくの邪路におちて正道を
 しらず、只今生一世のみにあらず、千生萬劫生死の海に浮沈して出ることあ
 たはず、是まことに憐愍すべき者なり、此只まことの志なきによりて命をす
 つるさばに至ることあたはず、ひとへに忘念忘想を以て佛法をわてがひはか
 るによりてなり、是故に鈍根蒙昧の者はいかに鞭策^{べんさく}すれども驚く心なし、或
 は智慧なきによりて、少しき思しりたる分別の事を至極と思ふて、更にすゝ
 む心なし、又利根聰明の者は實少なく虚多きによりて、しらぬ事をしれりと
 思ひ、明めぬ事を明めたりと思ふて、種々無盡の妄智をおこし、至らず及ば
 ぬ處までも料棟分別して、佛法世法にいかゞ事なく不審なしと思へり
 かゝる衆生は千佛出世すとも方便あるべからず、いかゞ濟度すべきや、是れ
 只最初志うすく、善知識にあはぬによりて、邪止を辨じわけず、我心ばかり
 を本とするによれり、若しかくの如き道理を思ひ、わきて^{たんでき}端的の處を信取せ
 ば、更に何の如何^{にやがにやが}若何をか論ぜん、路頭絶る處にかすさねて歩をすゝめ、信

力はまる時いよく志をはげまして、精神をつくし肝膽をしたで、さばりてみよ、必ず無心の中に忽然として身をひるがへす時節あるべし、此時始めてしらん山僧が不知不會と云ふ語は、汝が眼を瞶却する惡毒、汝が身を縛殺する細索なることを、然りと云へども不_レ、因_二樵子_一徑_二爭_一到_二葛公_一家_二之_一を思へ、

示_二在家女人_一

我心本來是佛なり、千生萬劫かつて迷へることなし、迷へることなければ、又悟るべき法もなし、すでに迷悟なければ、天真にして本と生死を離れたり生死を離れたるがゆゑに、來るも來る處なく、去るも去る處なく、住するも住する處なし、三世心不可得なるがゆゑに、一切の諸法皆同解脱せり、なんの無明の盡すべきかあり、なんの煩惱の斷すべきかあらん、善惡なきがゆゑに地獄天堂もなし、邪正なきがゆゑに佛界魔界もなし、心念生ずる處全く不生なり、心念滅する處全く不滅なり、是故に一切の萬法、有情無情畢竟空寂なり、か

くの如くの本來の法をしらずして、只目前の相に於いて、種々無盡の忘念をおこして、生死なきに生死を見、迷悟なきに迷悟をわかつて、生々世々輪廻の業た_レず、是故に法華經に、舍利弗當_レ知_レ鈍根小智_レ人_レ着_レ相_レ、橋慢_レ者_レ、不能_レ信_二是法_一といへり、是故に龍女の成佛は、始て佛となるにはあらず、只本來是佛なる理はりをならはせり、實に男女の相ありと思ふべからず、是を龍女變じて男子となると云へり、又本より迷悟なきがゆゑに、即南方無垢世界に往くと云へり、かくの如く身心本來清淨なることを直信せば、たとひ今生にて悟ることなしと云ふとも、此信力によりて盡未來際惡道におちず、成佛することうたがひあるべからず、

示_二慶中大師_一

諸佛出世、祖師西來、すべて別の事なし、只人々本有の自性を直指するのみなり、いかなるかこれ本有の自性とならば、見聞覺知、語默動靜、乃至一切の作用、一切の境界、全く是也、わづかに念をおこしてうけがはんとすれば

即ちへだゝる、是故に臨濟門に入れば便ち喝し、徳山門に入れば便ち棒す、
豈擬議思量の及ぶ處ならんや、汝只恁麼に看よ、此外更になにの事をか説
ん、

又示

佛祖一段の大因縁、天に蓋ひ、地に蓋ふて周徧せざる處なく、古にわたり今
にわたりて、斷絶の時なし、是れ有心無心の境界にあらず、豈思量分別の及
ぶ處ならんや、故に古來明眼の宗師、人の爲めにするに、機前に直截して擬
議を入れず、電轉し星飛ぶが如し、僧問云、雲門如何是佛。門云、乾屎橛。
又問、不起一念、還有過也。無。門云、須彌山。僧問云、綰州、狗子還有佛性
也。無。州云、無。亦云、有。又僧問、如何是祖師。西來意。云、庭前、栢樹子。
俱胝凡有、所問、只豎一指。魯。祖はつねに僧の來るを見て、面壁而坐、臨
濟は便ち喝し、徳山は便ち棒す、利根上智の人は、當下に身をひるがへして、
舊路に行く、手を那邊に撒して全機活卓々地、中下の方は、根機運鏡にして

かくの如くなることあははず、是故に古人かりに方便を設けて、しばらく坐
禪工夫をすゝむるもの也、然も坐禪工夫を作すと云へども、悟ることおろく
して、やゝもすれば十年二十年を歴る人もあり、又は一生の中に、ついに
なはずして、空く終る人もあり、是れ皆正信なく、實の志うすきによれり、
河山問の僧、世間甚麼物か最も苦なる、僧の云、地獄最も苦なり、山云、地獄
未_ニ是_レ苦_{ナラ}、袈裟の下に在て佛法を明らめず、人身を失ふ、是大なる苦とす
と云へり、先づ此意をよく思ひ分くべし、夫れ在家の人は無量の重罪を
作り、口業深くして、地獄餓鬼諸の惡道におつといへども、不思議なる佛法
の縁に遇ふて浮び出で、又人身を受ることも有るべし、出家の人の無道心な
るは、佛の衣鉢をぬすみ、僧比丘尼のすがたをまぬるばかりにて、徒に信せ
ず、おどろかず、善知識のすゝめに逢へども、おどろかず、おろれず、只己
れが情を本として、思ふやうにふるまひ、懶惰懈怠にして無慚放逸なれば、
今生一世のみにあらず、たとひ無量億劫をふるども、佛法のたねもなく縁も

なければ、道心のおこることをすべて有るべからず、永く人身を失ふて悪趣に沈みはてなんこと、是れ大なる苦に非ずや、佛も無縁の衆生を度し玉はねば、如何なる慈悲方便も叶ふべからず、まことに憐愍すべき者也、かくの如きの道理を思ひ知て、大誓願精進力をはげまして正信を發し、實の志をすゝめて、今生にて佛法を明めんと思ふべし、うもく如何なるか正信とならば、只一切の思量分別、諸の道理を離れたる處を佛法に入る路頭に先づ信すべし、たとひかやうに信すれども、又實の志なければ、是を悟ることかたし、實の志と云ふは、諸の道理なき時如何、是教外別傳の處と急に眼を着けてきはめ見るべし、かへすく少しもをこたらず、しばらくもおくことなく、行住坐臥、一切の處一切の時に於て、大なる愁歎のある人の如く、念々忘るべからず、古人是をたとへて、父母に一度に別るゝがごとく、頭を截れんとするが如く思ふべしと云へり、かくの如く親切に用心せば、工夫純熟して、必ず、悟る時節有るべし、此時始めて知るべし、金屑、眼中、翳、衣珠、法上、

塵、巨鑿猶不重、佛祖是レ何人、

示了仁居士

生死事大、無常迅速、百年の光陰一彈指の如し、此身のわたなることは風前の塵、草葉の露に同く、又は電影水泡の如し、出息入息を待たず今日明日を期し難し、這衰たとひ華榮富貴、意に任せて自在也と云へども、只昨舊の夢の如し、久く保つべからず、今生の樂は必ず後世の苦となる、一旦の樂にはこりて永劫の苦をうくべからず、たましくうけがたき人身を受け、遇ひがたき佛法に遇つて、道心をも起さず、佛法を悟らすんば、一度人身を失ふて、永く泥梨ないうりに沈みはてんこと、悲しまざるべけんや、故に古人云、光陰如箭、時不待人、此身不向今生度、更向何生一度、此身と云へり、若此身を度せんと思はば先づ生死の大事を明むべし、夫生死大事と云ふは、生ずれども來處を知らざる、是れ生大也、死すれども去處を知らざる、是れ死大也、故に生死事大と云へり此生死の落處を知らずんば、生々世々冥々たる暗裏あんりに迷

ひ、茫々たる苦海に沈みて、六道輪回の苦やむべからず、かやうの事を先づよく思ひ知て、大誓願をかこし、勇猛の志をすゝめて、生死の根源如何とさはめ見るべし、生死の根源と云ふは、只我日夜にみこる處の心念也、ろもく此心念甚麼處より起り、又いつれの處にか去る、と念々をこたらず、急々に眼を着けてさはめ見るべし、只坐禪の時のみにあらず、十二時中一切の事をなさん時も、かくの如くの志を忘せず、用心して見よ、工夫純熟せば必ず大悟の時節あるべし、此時始て知らん我此心念本より起る處もなく、去る處もなく、住する處もなさことを、生死亦復此の如し、生ずれども本と來處もなく死すれども實に去處もなし、現在亦所住なし、王世の心不可得にして蹤跡なし、かくの如く分明に悟得れば、我此身衆生にもあらず、佛にもあらず、生にも非ず、滅にも非ず、無始曠劫より盡未來際に至るまで、なんの相もなくなんの道理もなし、是を一片々了々の田地と云ふ、此無心の境界にかなひ得ば、一切の相をやぶらず、萬の道理をさらはず、縁に隨ひ物に應じて、無量

無邊の事を作用するなり、是を隨處爲レ、主、立處皆眞、我レ爲レ法王、於レ法自在と云へり、生死の中に入出して、終に生死をうけず、苦樂の境に相應して、又是苦樂の實なし、かくの如く大安樂大解脫の身と成るべきことをもしらす、只何ともなさことを思ひふるまひて、いたづらに月日を送り、空く此身を捨ること、實にあはれむべき者也、相構へてかやうの事をよく思ひ知て、我心の師と成て、我心を本とせず、時々我身を誠しめはづかしめて用心綿密なるべし、後悔を殘すことなかれ、記取せよ記取せよ、

示三宗眞居士

諸佛出世、祖師西來、曾て一法の人にあたるなし、只人人本有の自性を直指するのみなり、夫れ本有の自性と云ふは、教家に沙汰する處の理性の義にあらず、直に是れ教外の宗旨全体作用の處也、更に擬議思量の及ぶ處にあらず、是故に古人わづかに口を開ていかんと問へば即ち喝し、即ち棒し、或は推出し、或は踏倒す、徹骨の慈悲老婆心切也、何の恩力かこれに及ばんや、

「朕迹朕はカ
クレタルアト
迷アラソレタ
ルアトあり

上根利智の人は當下に身をひるがへして、朕跡を留めず、頭を天外にめぐらして、阿々と大笑するのみ、なんの禪道佛法、迷悟凡聖の見かわらんや、大千沙界、海中、瀍、萬象森羅、紅炉、雪、中下機はかくの如く直下に頓脱トウダツすることあたはず、是故に古人やひことをせず、枉げて方便をたれて、坐脱參學工夫用心をすゝむ、坐禪參學工夫用心又是れ別の道理なし、只直見直行する處也、初心の人には是をしらず、坐禪工夫の様を知識に參して、其教への如く用心して、得法悟道すべきやうに思ひなして、やゝもすれば死摸様をたづねていかなる公案にても我に示し玉へと云ふ、近代此風最もさかんなり、若しかくの如くにして佛法を明めんと思はし、大に捧をあげて月をうたんとするに似たり、何れの日いづれの時からちあてん、又空中に梯を布て天にのぼらんとするがごとし、いづれの劫にかのぼり得べきや、愚痴なる人の佛法に入て空く辛苦ばかりして、終に成まることなきはかくの如し、實にあはれむべき者也、汝先よくかやうの事を思ひわきて、骨に透り髓にとどる底の心切

の志をはげまし、大誓願をかこして、十二時中行住坐臥一切の事を作す處にかいて、念々にをこたらず、念々に眼をつけて直に見、直に進んで、第二念をかこさず、前後左右をかへりみず、思量分別諸の道理をなすことなかるべし、若しかくのごとくねんごろに用心せば、工夫純熟して、工夫の心自ら盡る時、必ず忽然として夢のさむるが如くにして、大に悟る時節あるべし、うたがふことなかれ、

答三信秀禪人

坐禪工夫をなす時、只昏散コンサンばかりにて、即心即佛にもなりせず、若し昏散もなき時を即心即佛とも、本分の處とも云べしや、別に得法とて開く時節あるべしやと承はる、夫れ昏散は本よりさらふべき事にもあらず、昏の時全体只是れ昏、散の時は全体只是れ散、一にあらず二にあらず、同なく又別なし即是を即心即佛とも、又現成本分の事とも、本來の面目とも、天眞の自性とも云ふなり、迷人は只此直体をしらず、やゝもすれば分別をかこして、昏散

をさらし、昏散なき處にむかはんとす、此心自ら己れが障礙をなすがゆゑに、古人是を昏散二病と云ふなり、若直心をさとりば更になんの病かあらん、一了一切了、一明一切明、心々不可得、念々大解脱、此外更生死去來の相を求むるに得ず、一切の諸法本來寂滅也、かへすく昏散なき處を、即心即佛、本分の處と思ふべからず、かくの如く思へば、二法となりて一心の道に迷ふ、若し此心を生ぜば、自ら邪魔の見解をなして、永く黒闇の地獄にあつべし、かろるべしく、又別に得法とてさとりをひらく時節あるべきかの不審、是れ迷倒の妄見、正信の道を知らざるによる、只一念解脱すれば、即ち本來迷悟なし、心を以て心と求むることなかれ、衆生顛倒して己れに迷ふて物を逐ふと云ふは是也、只すべからく昏散の二病を管せず、直に一切の分別を截斷して、二度念をつがす、たけく精彩をつけて、死に至るまでかくの如く工夫をなすべし、必ず佛祖の言教の外に透脱の一路を得べし、たとひ又今生にて悟ることおろくとも、かくの如く行せば、六道四生の苦を離れて、必ず清淨

大解脱の實所に至るべし、うたがふことなかれ、

答ニ在家人ニ

凡う坐禪工夫は、初めよりなにの道理をも心にかけずして、只佛法を明めんと思ふ志をいのちにして用心すべし、さばめ來りさばめ去り、佛法を明めんと思ふ心も、自らわすればて、只身はからだばかりの立はたらくが如くなる時、さとりんと思ふ心もなきに、たちまちに夢のさむるが如くなる時あるべし、此時有無生滅の諸の道理にかゝわらず、別に透脱の活路あり、初心の人にかやうの事をしらす、よのつねの心にかはりて、或は無と思ひ、或は空と思ふ見の浮ぶを、誠の覺りと思ふて、真正の善知識にもあはず、我胸中はや明かなりと思ふて、慢心をおこすゆゑに、却て邪魔と成りて、終には無間にかつる、かやうの惡見の者は無道心なる者よりも、はるかにをとり、其故に無道心なる者は、不思議の縁にあふて、初めより真正の善知識にすゝめられて、佛法に入る路をさしき事もあるべし、かくの如くの惡見の者は、我

辛苦してさとり出したる者なり、善知識に教へられたるにもあらず、又人より傳へたるにもあらず、是を教外別傳と思ふて、人の云ふことをも用ゐず、只我情を本とするによりて、惡道にかつるなり、古人これ善因なりと云へども却て惡果をまねくと云ふは是也、辛苦して正法をころあきらめざらしめ、結句地獄にかちんことかなし、つゝしまざるべけんや、先かやうの事をよくく思ひわきて、初めより道理をなす赤子の有とも無とも、世法とも佛法とも知らざるがごとく、なにともかとも心にめてがはずして、只道心ばかり眞實のさとりぞと思ふて、さとりて待つ心あるべからず、さやうに思はゞさとりを待つ心へだてられて、すみやかに悟ることあたはず、只身心をはなつてなりともならばなれ、又我心にたちかへりて、有と思ひ、無と思ひ、又何者が我主と思ふ、萬の道理をなす、十二中行住坐臥ねんころに用心せば、心々大願成就すへし、

示三宗通居士

「承當」了悟の
終なり

夫心迷へば佛即衆生となる、心悟れば衆生即佛となる、是故に佛と衆生と、全く別なし、只是迷へると悟れるとの見異なり、迷悟の見異なければ、心にもあらず、佛にもあらず、物にもあらず、一切の道理を離れて、通身一條の生鉄の如し、出生入死只是暫時縁にしたがふのみなり、去來なく蹤跡なく、所依なく、所住なし、鏡の像に對するが如く、谷のひゞきを受るに似たり、内に主宰なく、外に縁縁なし、地獄天堂心にまかせて遊戯し、苦樂逆順處にしたがひて自在なり、なんの生死のおろるべきかあり、なんの禪道のもとむべきかあらん、大千沙界は海中漚、一電の聖賢は電拂の如し、這裏に至て手を那邊千聖の外に撒し、歩を今時塵勞の中に廻して、道理なき處において道理を立し、是非なき中において是非を辨す、是れ世間迷倒の凡夫の實有の執見にあらず、只無心の處にかいて一切の事を成敗す、是を世間出世間能事畢る底の大丈夫の漢と云ふ、佛祖終に他の落處を知らず、魔外争でか渠が蹤跡をうかゞはん、汝若し恁麼に承當し去らば、曠劫の無明煩惱一念の中に悉く

消滅して、七通入達大解脱大安樂の人となるべし、うれ猶未だしからずんば
しばらく歩をしりぞけ、已につきて、我此心源いかんときはめみるべし、只
坐禪の時のみにわらず、十二時中行住坐臥、見聞覺知、着衣喫飯乃至一切の
事を作す處において、急々に眼をつけて、直に見、直にさはめよ、工夫純熟
せば、必ず大に透脱する時節あるべし、うたがふべからず、

示簡入禪人

四大元と主無し、五蘊本來空、たとひ父母の縁をかり、一旦生ずるに似たりと
云へども、實に生ずるものなし、又人間の縁つき、暫時滅するに似たりと云
へども、實に滅する物なし、是を水中の月、鏡裏の像にたとへたり、其相ある
に似たりといへども、只是光影のみなり、まことの主なし、是をさとする人は
生死をもかりせず、涅槃をも愛せず、煩惱をも断せず、菩提をも求めず、出
生入死遊戯自在、逆行須行妙用無碍、千生萬劫を歴ども終に轉變の理なし、
只是れ性にまかせ縁に随ふのみなり、迷倒の衆生はかくの如くの道理を知ら

ず只目の前の相にまよはされて色にふけり、聲に着し、香を愛し、味をこのみ
諸の相において執着の心ふかくして、願にはなるべしことわたはず、是を生死
のまよひといへり、たとひ又かやうの世間の相、諸の欲念におはるべし人も、
生死なきに實に生死ありと思ひ、諸相なきに諸相ありと思ふによりて、いよ
くまよひにまよひをかさねて、直下に心念やむことわたはず、是故に諸佛
祖師、もろもろの善知識出世して、教導して、直に見、直に聞き、直に行し
直に悟らしむ、上根の人は直にうけがつて、又かさねて生死の念をつがず、
一切疑心當下に即ちやむ、是を立地に成佛する底の人と云ふなり、中下の人
はかくの如くなることわたはず、やゝもすれば道理において執心たえず、是
故にしばらく念をとさめ、心をやめ、一切不思議にして坐禪工夫せよとをし
へて、此教へにしたがひて、又かさねてうたがはず、もろくの道理思量を絶
して、大死人の如く、なんの心もなくして、直に用心せば、本來の面目脱体现
成せん、かくの如く一念の信心堅固にして、第二念なくんば、只是れ今生の

みにわらず、生々世々惡道にかちす、大解脱大安樂の人となるべし、たゞひ
又命終の時にかなる病苦死苦つよくをかし、乃至無量の善惡の境界現すと
一念動せず、もろくの相を目にかけず、何とも思はずして終らば、即ち是
れ生死截斷の時節なり、うたがふことなかれ、

示道漸居士

我身本來實なし、只父母の縁によりて四大かりに合成するのみなり、四大と
云ふは、地水火風なり、地大と云ふは、髮毛、爪、齒、皮肉、筋骨、垢色な
り、水大と云ふは、唾涕、膿、血、津液、痰、涙、大小便利なり、火大と云
ふは煖氣なり、風大と云ふは動する相なり、此四大和合して、中に緣する氣
あるを慮知の心となづけたり、此四大分離する時、水は本の水にかへりて、
五体かはさてうるほひなし、火は本の火にかへりて、遍身ひへて煖なる氣な
し、風は本の風にかへりて全身すくみてはたらかず、然後或は燒き、或は埋
めば、本の土にかへる、緣氣の心は四大分離する時ともに散滅に歸す、まよ

へる凡夫は此四大かりに合するを實に生ずと思ひ、此四大本にかへるを實に
滅すと思へり、是故に生死なきに、生死を見、身心なきに身心ありと思ふて
我見偏執の心ふかし、是故に輪廻の業報たえず是をささる人は、四大の相は
空裏の花の如し、有に似たりといへども實なし、生死去來も亦假かくの如し
一切諸相は夢幻の如くなりて悟て、萬の事において執着の心なし、執着の心
なければ生死頓にたへて、輪廻永くやむ、先かやらの道理をよく思しり
て、坐禪工夫すべし、坐禪工夫の時又別の用心あるべからず、只なにもあて
がひはかる心なくして直に行すべし、此時とりつき處もなく、方所もなく、路
たへてすゝみがたしと思ふて、退屈することなかれ、若し方所あり、とりつ
く處あらば、此即ち生死の根本なり、もろくの道理をはなれて、なにとも
かともあてがひはかるべきことなき處、即ち生死をはなる、時節なり、かく
の如く直に信じて、生涯うたがはず、工夫用心せば、生死到來の時、必ず力
を得て、正念に安住して終るべし、是を思へ、

示豫州太守

即心是佛、外に向て佛を尋ねべからず、即心是法、別に更に何の法をか求めん、一句截流、高機寢削、上智の人は言下に即ちさとりて、一切の疑心頓にやむ、鈍根の者はかやうの事を聞くとも直に信ぜず、只難行苦行、久く功をつみて後に佛となるべしと思ふて、朝夕佛を念じ、經をよみ、焼香禮拜散花行道、或は布施持戒忍辱精進の行をなし、或は一向長坐不以觀念觀法す、愚痴の甚しき者は、食を斷じ、盥をたぢ、臂をたぢ、指をさり、無言裸形等の一切の苦行をなす、是只今生にて直にさとるべきことをば思ひもよらず、ひとへに後世成佛を希望するのみなり、かくの如く佛法を遠く思ひなす心あらば、たとひいかなる身命財をすつる苦行をなすと云ふとも、皆是有相執着の邪信なるによりて、終に正道を成すべからず、たとひ一旦果報力を得て、位たつとく、徳すぐれて、歸樂心にまかすと云ふとも、善力つさば、又かへりて惡道にかつべし、古人是を住相布施天福、猶如仰箭射虚空、

勢力盡、箭還墜、招得來生不如意、爭似無爲實相門、一超直入如来地と云へり、先づかやうの道理を思ひわきて、有相の佛を望むべからず、たとひ又即心是佛を信する人も、根機鈍なるによりて、直に透脱することあたはず、只外に佛を求むべからず、我心即佛なりと信するばかりなり、或は即心是佛と云ふは、只是別の道理なし、色を見、聲を聞き、乃至一切の事をなす処、只其まゝにして二たび念をつがざる即是也と思へり、かくの如くの人ば、只是推量の信にして、實にさとらざれば、只口に即心是佛と云ひ、心に即心是佛と観するばかりにて、底に透りて休歇する分なし、是故にやゝもすれば疑心おこりて、是ばかりにてはよもあらじ、此うへになをも様ぞあるらんと思へり、此思にさへられて本心をくらますことを知らず、或はまことの道心はなくして、なまじいに小智恵ありて利根なる人は、高禪の伎倆を好て、即心是佛と云ふ法門は、只是小兒の啼をやむる分劑なり、一向にまよへる在家等の人のためには、かやうの法門を以てすゝめみちびく方便もあるべし、

佛祖向上那邊の一着を以て是をみれば、淺くして淺し、是等の法門を悟りて至極と思ふてやむ人は、誠に佛祖の骨髓こつちゆうをしるべからずと思へり、是れ増上ぞうじやう優の心にて、實悟なければ、かくの如くの人には終に外道天魔眷屬となるべし、昔大梅和尚問馬祖大師、如何是佛、馬祖答曰即心即佛、大梅言下は大悟して疑心頓にやむ、獅子一滴乳逆散十斛乳、或時僧來て語て云く、近日馬大師法門別なり人に示すに多くは非心非佛と云、大梅答曰、此老漢人を惑亂して猶未だやまざる事ありさもあらばわれ非心非佛、我は只是即心即佛と、實悟の人はかくの如く脚實地をふみて、終に頭をめぐらさず又水滌問馬祖、如何是西來の々意、祖云、禮拜着せよ、水滌わづかに禮拜、祖乃當胸に蹈倒す、水滌忽然として大悟、起來撫掌、阿々大笑云、也大奇、也大奇、百千三昧無量妙義、只向二毫頭上二誠得根源去、行到水窮處、坐看雲起時と、それより後凡る所問あれば、只阿々と大笑するのみ也、かくの如く底をつくして打翻せば、何の佛法の勝劣、公案の淺深、這邊那邊、向上向下とか論せん、

上士、一決一切了、中下、多聞多不信と云へり、只是猛烈の志ある底の人はろこばくの功行を勞せば、一言一句の下に於て、直下に截斷して、又かさねて疑心なし、若又志よはく機鈍なる人、かくの如く頓脱することあははずんば、只念々志をすゝめて、時々にさしかかず、心とも佛ともなにもかともあてがひはからずして、只志を命とし、願を力とし、路なき處に向て歩をすゝめて看よ、必ずおぼへすしらざるうちに、十方虚空身に和して、一時に打破する時節あるべし、此時初めて知らん即心即佛非心非佛、乃至一千七百の公案及百千の法門皆是門をたゞく死子なりけることを、是故に骨を粉にし身をくださても未だ報ふるにたぬす、一句了然として百億をこぼたりと云へり、實に是佛祖の方便教導によらずんば、いづれの劫にか生死の苦思をまぬかれて、大解脱大安樂の田地に至るべき、此恩德何を以てか報じつくさん、針芥相投するたとへ、實にうたがひなし、かくの如く我身の大願成就して、一切滿足せりと思ふべからず、猶無緣衆生を度しつくして、同く佛道を成ぜ

しめんと思ふ大願を起して、在家出家一切の人をおはれみ、めぐみ、すくひ導く大慈悲心を起すべし、是れ眞の佛祖の弟子、末世再來の菩薩なるべし、努力努力、

示明貞道人

我此身心全体、本より迷はざる者也、是故に是を名けて佛と云ふ、夫れ佛と云ふは、相好いつくしくして、光明がやき、飛行自在、神通變化あるを云ふにはあらず、かやうの佛は只暫時愚痴なる凡夫のために、殊勝の相を現じて、信を生ぜしめて、眞實の道に入れんがための方便也、實の佛と云ふは、有相の形にあらず、諸の着心なくして、念々精進なる是也、又我此身もまこと相ありと思ふべからず、四縁かりに和合せり、四縁と云ふは、地水火風なり、此地水火風相あるには似たれども、實には相なし、夢幻泡影のごとし此四縁かりに合して人となれば、我にあらざる物を實に我なりと思ふて、我執深し、是故に我にしたがふ者をば愛しよるごび、我にうむく者をばにく

みろねむ、此心惡道の業となりて、生々世世輪廻の苦たぬす、是亦別の物にあらず、直に佛なりと云ふとも、愚痴なる人はすべて信せず、用ふべからず、是故に釋尊、韋提希夫人のために、西方極樂世界阿彌陀佛を信じて、念佛稱名し、觀想をこらさば、臨終の時必ず引接せられて、決定往生すべしと説けり、是を信じてひとへに他力をたのみ念佛せば、いかなる極重惡人も佛法の縁たぬす、後には必ず極樂往生して、十二大劫はちすのはらにはらまれて、其後觀音勢至等の菩薩の大乘の法を説くを聞て、初めて菩提心をおこすべしと云へり、我心即佛なることを信ぜざる人のために機をもちらさる方便にて、かやうに説くことは最も肝要なるべし、少しも靈性ある人は、十二大劫の後に初めて道心をおこすべきことを、遠々と待つべきにもあらず、只まづすぐに道心をおこして、頓に佛法をおさらむべし、かくのごとくならば、釋尊彌陀の教の本意にかなふべし、ろもく佛法を頓に明めんと思は、只一切おこる處の心念萬のふるまひは皆佛なり、かくの如く直に示せども、猶疑ありて

思ひへだつる心あらば、先づ一切の心念をやめて、何ともかとも知らざる處に向て、坐禪工夫すべし、心をしづめて坐禪すれば、なほともなき思ひひまなくおこり、さてはねむるばかりなり、念のおこるも、ねむりの來るも、皆是佛の心なり、すべて別の物にあらずと深く信じて、さらひいとも心あるべからず、こゝにおいて又何とも知らざれば、茫々やみくとしてとりつく處なく、すゝむべき路もなしと思ふて、退屈するとなかれ、若し少しもとりつく處あらば、生死のさづな也、何とも知ざる處即ち生死を出る路なりと深く信じて又うたがはず、夢のさむるか如くにして、一切の疑ひ忽ち止む時節あるべし、此時初めて我此身心何ともあらざりけることをさとりて大に笑ふべし、又たとひ今生にてかくの如く明むることおろくとも、此信力つよくば、業にひかされて惡道にかつべからず、又人身をうけてをさなくより佛法に入りて、すみやかにさとする人となるべし、うたがふことなかれ、

又示

我心本より佛なり、佛と云ふは迷はざる心を云ふなり、まよはざる處を悟りぬれば、一切の佛菩薩皆一心に具足して別の体なし、然りと云へども其徳によりて、しばらく名をつけかゝて、種々の名字かはれり、阿彌陀と云ふは天竺の語なり、唐土の言葉には無量壽と云ふ、無量壽と云ふはハカリナキイノチ也、ハカリナキイノチと云ふは、生するに似たりといへども全く生せず、死するに似たりといへども全く死せず、生死なき處即ち人々の自性を云ふ、是をアミタと云ふ藥師と云ふは、本より生死なき處を示すを、法のくすりを以て差別の病を治すと云ふ、是故に生死なき處をさとりぬれば、諸の病悉くのぞかるゝ、是故に藥となづく、實生佛と云ふは、萬法本より差別なし、一切の有情無情平等にして、更に去來前後の道理なきを云ふ也、釋迦と云ふは萬法本より不生不滅なり、是を諸法從本來、常自寂滅相と云へり、寂滅の相と云ふは、有にもあらず無にもあらず、善にもあらず惡にもあらず、生にもあらず死にもあらず、迷にもあらず悟にもあらず、諸の妙相道理をはなれた

り、この眞体をしめすを釋迦と云ふなり、是を四佛と云ふ、此外に眞言宗には大日如來を立せり、大日如來と云ふは、萬法の正体、一切の根本なり、たとへば大日輪の虚空に出る時、おまねく一切の境界をてらして其跡なきが如し、觀音と云ふは、慈悲を体として、音聲を用とす、勢至と云ふは正理にかなふて、其力をほごこすと云ふ、文殊と云ふは大智と云ふ、大智と云ふは、諸の料棟分別をはなれたる無智の智と云ふ、普賢と云ふは、一切の萬行をすゝめて、僧となり俗となり、男となり女となり、親となり子となり、主となり従者となり、よろづの人をたすくるふるまひをなすと普賢と云ふ、地藏と云ふは、人々具足、各々圓成せる心地と云ふなり、心地より一切の諸法を生ず、たとへば大地の萬物を出生するが如し、虚空藏と云ふは、我心も身も外の境界も皆實の体なし、なごし虚空のごとし、虚空の如くなる所より一切の諸法化現す、是故に虚空藏と云へり、かやうの佛菩薩皆一心の徳也、迷へば是を知ずして凡夫と思へり、悟れば別の佛なりとこととしる、ゆめく外に佛

ありと思ふべからず、又別の佛をたのむべからず、只一心正なれば念々に佛菩薩現前するなり、然りと云へどもかやうの法門は、しばらく愚痴にして迷へる人のために、名をつけ理をととて眞實の處を悟らしめんがための方便門なり、眞實の處に至ては佛もなく菩薩もなく、心もなく法もなく、迷もなく悟もなく、もろくの約束をはなれたり、此處を直に信して坐禪工夫せば、火のもゆる中に雪のたまたまらざるがごとし、いかなる道理なりと云ふとも懐にかくべからず、たとひ思ひつけたる習氣おことと云ふとも、直に截てすて、二度つぐことなかれ、三世の諸佛菩薩、歴代の祖師、出世利生の本意如此、疑ふことなかれ、

示ニ在家人ニ

唯此一段の大因縁、天にささたち地にささたち、古に過ぎ今に越ゆ、凡聖の中の境界にわらず思、量分別も及ぶべからず、是を名けて不思議の法と云ふ此法人々に具足すれども、自ら悟らざるによりて、日々に用めてしらす、盲人

の終日に大道を行て自ら見ざるが如し、自ら見ざるゆゑに是を信ぜず、又貴
 びず、歩々に悪處に赴くことをおぼへず、只今生一世の身命をたすげんと思
 ふばかりにて、種々無盡のわざをなして、日々夜々に悪業を増長するのみな
 り、今生一世の事はたとひ百年の齡をたもつとも、暫時の夢の中の樂なり、
 久くあるべからず、古人云く、人遠慮なければ必ず近憂ありと云へり、只暫
 時の妻子眷屬の愛執、わづかの五欲快樂にほだされて、一生空くすまで、永
 劫惡道におちんことおはれむべき者也、在家の人はいかにもかしてしといへ
 ども、かやうの事を思ひしらす、まして修行用心坐禪工夫して、今生にて一
 大事をさとらんと思ふ人、百千人の中に一人も又まれなり、佛力業力にかた
 ざれば、たとひ佛菩薩の慈悲方便深くとも、我造れるつみの惡業重からん人
 をば、すべてくたすべからず、只自らすゝみはげますんば、争でか生死
 を截斷せつだんすべき、うもくいかなる方便を以て生死を截斷せんとならは、先づ
 大願力大信力をおこして、十二時中萬緣萬境一切の事をなす處につよとい

かなる物が主人となりてかやうのわざをなすとききはめみよ、たとへば百萬
 の軍陣の中へ只獨りかけ入りて、直に大将の首を取て出んと思ふが如く、た
 けく志をはげまして、直にすゝんで用心せば、必ず無量億劫の生死の朝敵を
 ほろぼして、天地にささだつ底の我本來清淨圓滿大覺の法王急に現前して、
 世間出世間の事を成就し、大自在三昧を得て、生々世々大安樂なるべし、う
 たがふべからず

示病者

我此身心本來生死をはなれたり、生死をはなれたるがゆゑに更に又一切の道
 理なし、たとひ一旦父母の縁によりて地水火風かりに合するに似たれども、
 不生の生なれば實に生ありと思ふべからず、又時節到來して四大分離するに
 似たれども、不死の死なれば實に死すると思ふべからず、只生死去來是非善
 惡一切の萬法夢幻の如し、是故に金剛經に云く、一切有爲法、如夢泡影、

如_レ露亦如_レ電、應_レ作_二如是_一、觀_二之_一、と云へり、只かくのごとく理_二を信じて疑ふべからず、たとひ病苦死苦ありと云ふとも、かく此正信をまもりて一念を動ぜず、病にまかせ苦痛にまかせて、何ともわてがひはかることなくして終るべし、ゆめ、今主にて佛法を明めざれば、後世何とやならんすらんとうたがひおろるべからず、只何とも思はぬ心即佛法なり、信ぜざれば輪廻の業となる、己に信すれば即ち生死截斷の處なり、うたがうことなかれ、

示_二在家人_一

一切の道理に己を存する時おこれり、己をわすれば更に何の道理かあらん、只是物にまかせ縁にしたがふのみなり、是凡にあらず聖にわらず、又是もなく又非もなし、天真自在の受用何の善惡をか知らばん、是故に智者は物にまかせ己にまかせず、愚人は己にまかせ物にまかせず、又逆行順行大もはかることなしと云へり、若し這箇の道理を信ぜば、見聞覺知蹤跡_二をといめず、去來生滅畢竟不可得なり、信心うすきによりて人に惑せられ、境に轉せられて、

主と成り得ることあたはず、やゝもすれば無量の分別をおこす、實に是愚人迷倒の妄見なり、持論するにたへず、すべからず身命ををします、たけく精彩_二をつくべし、忽然として、一笑せば天廻り地轉せん、疑ふことなかれ、

答_二宰相中將殿_一

問、紛飛の念おこる處にいかんが工夫をなすべき、答、夫れ紛飛の念と云ふは、おこる物もおこすものもなし、只眼病者の空裏の花を見るが如し此花は眼よりもいせず、空裏よりも生ぜず、只眼に病あるによりて、妄りに空花の相を見るなり、紛飛の念もまたかくの如し、是故に是を妄見と云ひ、又は妄想と云ふ、眼病なければ妄見なし、分別なければ妄想おこらず、只一切迷倒の見は、妄心の分別により、妄心おこらざれば、一切の心境皆正眞の大道也、於_レ此_二山下に徹し去らば、許多般_二なし、若し又未だ然らずんば只紛飛の處について直下には是を窺め見よ、必ず透脱の時節あるべし、

月庵和尚法語終

澤菴和尚法語

解題

この法語は澤菴宗彭禪師が天地、人身に就きて禪要を説示せられしものなり
澤菴禪師のことは第四篇の不動智神妙録の解題にもつたれば就て見るべし

編者 識

澤菴和尚法語

天地之部

天地の間に三ツの理といふ物あり、この理感じうごいて氣といふ物に變じ候、變ずるといふは、松に風が來りて聲のする如くなり、縦たてば水と波とのごとし、水うごけば波となり、氣一度うごきて、一度はしづまりて候、其靜まるを陰と申す也、靜まりて又動うごき候を陽と申す也、この陰陽が五つにわかつて、木、火、土、金、水の五つとなり、此五つが和合して人となる、鳥獸草木萬の物と成り、是をおしこめて萬物と申す也、一理、一氣、陰陽、五行、萬物とわかち、又萬物が有通あひたしには無き物なれば、人も死し草木も枯候へば、變じてなくなり、もとの五行にかへり、五つは陰陽にかへり、ぬんやうは一氣にかへり、一氣又一理にさはまり候、さはまりて又はじまり候へば、いつをかざんともいつをはじめとも申しがたき子細にて候、是はまづ天地の間の事にて候、人身

に是をつめて作り出したる身のうちにて候、蟻ほどの小なる虫とかもへども、ひろき天地のつもりにすこしもかはらず候、まして人間牛馬などのたぐひ皆天地をつめて作りたる物にて候へば、合あて天地にすこしもちがひなく候、九つ入子いりこの鉢をまはさずとて、外の大きな鉢がまはれば、内の小さな鉢もみなついてまはるごとく、人と天地と一つに廻り候へども、人は人の心もあきに成り、空そらくもれば人の氣もくもり、空晴れば人の氣もはるゝなり、
理 天地の間に一つの理と申すもの候、此理と申すは、かたちなくして空なるもの也、空なるゆゑに目に見ゆ候、魚の目に水見へず、人の目に空見へずと申す事の候、水がまんくと、たゞへてあり、其の中に魚がおよまはれ、うをの目に水が見ゆ候、しかれ共其水が變じて其うをと成り鱗、肉、骨、腹わた、尾ひれ、皆水にて作り出して、水の中に居れども、水を見ざる也

、人も空にてつくり出して、空の中に居ても、空は目に見ぬものにて候、空なれば目に見えず、みぬればひとへになら物ともふ人あり、おろかなる事也、たとへば風はかたちなき空なれども、無きものとはいはれず候、あるものなれば來りて松の木末をならし候、是れかたちなくとも有るしるじ也、この理と申すものは、かたちなれども、明々として有る物と、心法を悟る人は是を見る、心の眼とて心にまなこ有り、心のまなこにて見るを眼と申す也、觀念から見る事にて候、人は皆眼二つあり、さとりぬればまなこ三つ有り、心に一つのまなこなくては、見がたき所は見出されず候、鶏に三足ありと申すこの候、なせになれば、二つのあしにて立て居るものならば、死したる鶏もたつてをるべけれども、死したには鳥は立てぬらざる也、身の内に今一つのおしなくてはたつ事ならず候程に、鶏に三足ありと申候、二つの眼はひまれ子も、物見る事にて候、いろかたちもなき物を見るは、心のまなこといふものなくては見られざる也、心のまなこをひらくがせんなる事に候、玉子

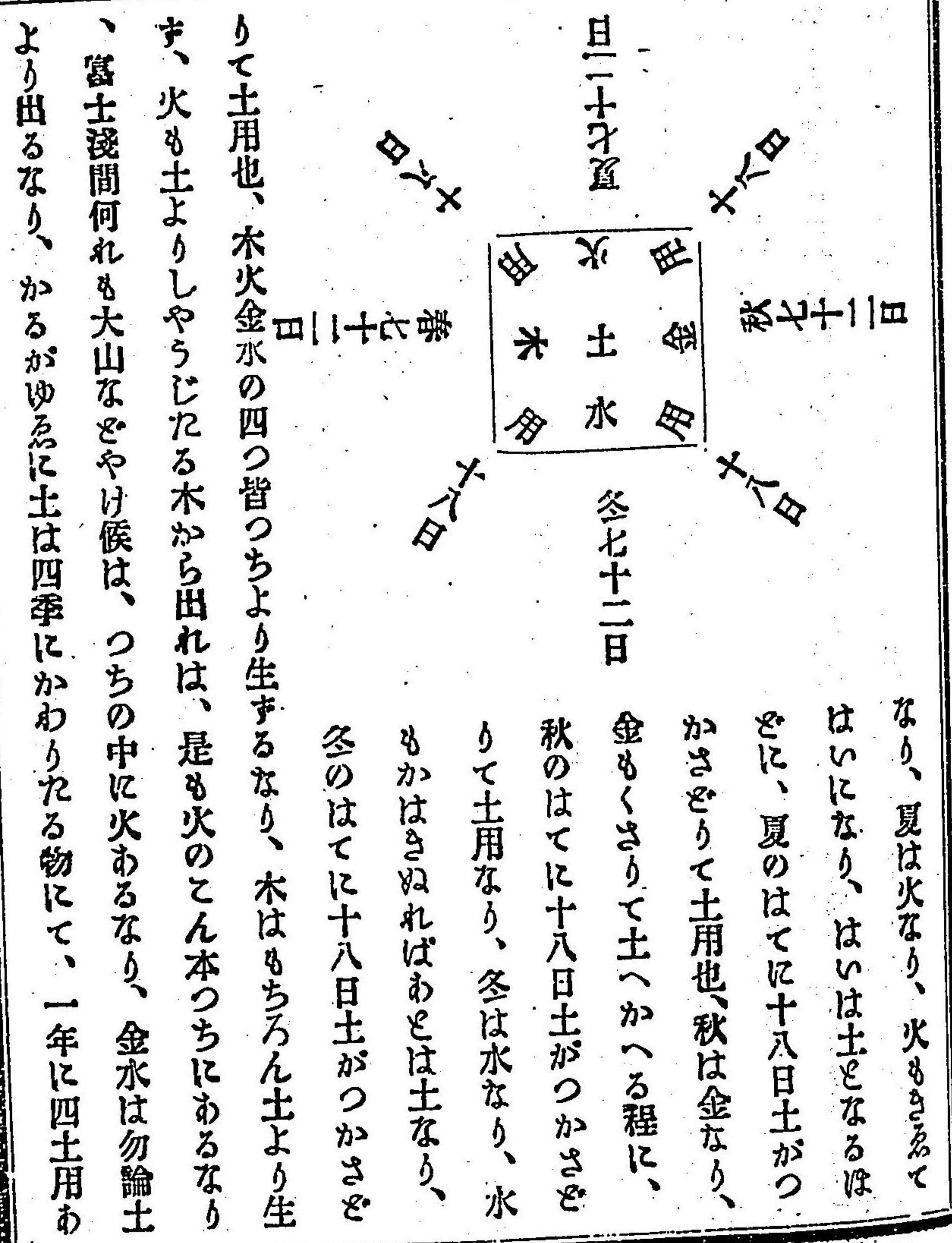
に毛ありと申候、いまだあらはれぬ所に道理がうなはうてあるゆゑに、顯るべき時にあはれ出る也、いまだ顯れざるべきを見るは、心のまなこ也、又かやうの理をよくとく人はあれども、それは七つ八つに成る子が、あはれなるうたひをうたひ、能^{のり}をして、見聞人はなれども、我なく事もしらざるたぐひ也、口にとき、心に知りたる人は、萬づにちがひ候、そのしるし其身に見る候、かくされぬ事にて候、其身のおこなひ口とかはり候、口に道をとき、身に行なくば、道しりたるにてはなく候、道にかなふ事は古今成りがたき事にて候、

氣 右にかきつけ候一つの理と申す物がうごいて氣となり候、この氣もまたかたちなし、理と同様なる事ながら、まへの理と申すは、縦へは水のなみなきときのごとく也、大海に水の満々とたゞへたるやう也、又この氣は大なみ小なりのたつて、うみのおもていろがはしく成たるがごとく也、氣はかたちなれども、れさくとして有るしるには、氣がうごけば風が吹く也、人の

つよくはしりて気がうごは息がつよく成ることくなり、人の息は氣のうご
せい也、かたちなければ何もなしと思ふはあるか也、春は氣のうごはじめ
なるゆゑに、風は専ら春ふくものなり、春風刀のごとしと申す句もある也、
しかれば理は天地の間にのびて、みちくして、のほりも下もせず、ちりもあ
つまりもせず、此氣はうごくにより上り下り、あつまりちり、さまく變
する物也、雨をふらし、風をおどろかし、火をおとし、水を生じ、かみなり
いかづち、色くのごとをなすは、只一氣のなすところ也、この氣のいたら
ぬ所もなし、火のうち、水のうご、金石土尾とこのうらへもとをる也、粟一粒の
うちにもいり、大盤石の内へもとをり候、貝一つのうちにもみち、桶壺のう
ちにもみちくして有るなり、其しるしには桶の内のごとに、をさのりにて
つけて、是を水のうへにふせて、まつすへに水の内へおしこむに、桶の内へ
水いらすして火がさゝぎる也、是はおけのうちにも氣が一ぱいみちてあるゆ
ゑにうちがふさがりて、水のいるべきところなし、おけのうちにはなにもな

く空なれども、氣のある證據なり、すこし成りとも桶がゆがみかたぶきて、
あくかたあれば、あきたるかたより氣がいつるによりて、水は氣と入りかは
りて、桶のうちへ水が入るほごに、火がさゆる也、是氣の物にみちてみづを
もいれざるしるし也、ちやわん大目にてするもあなじ事也、かゝるあささわ
らはべのあうびごとのやうなる事に、大道のしるべとなる事おほし、
陰 右にかき附候一氣うごひてしづまる時を陰と申す也、
陽 右にある陰の又うごき出る時を陽と申す也一たびうごき、一たびはしづ
まりて、うごくを陽とし、靜なるをぬんとして、ぬんやうくとたがひにう
ごきしづまり候、陰陽と申すも二つの名はありて、只一氣にて候、水とみ
ごのこゝろにて候、一理一氣、陰陽五行ごの次第仕り候
五行 木火土金水の五つ也、是を五行と申す也、右の陰陽を五つにわりたる
ものにて候、木と火とは陽にて候、木をば春にとり、火をば夏にとり候、春
は陽氣がうごきはじめ候、陽は火にて候、木のうちに火をふくみて、なつに

いたりてはなはだあつき時を火と定め候、夏の火は木よりしやうするゆゑ
 に、春を木とさため候、金水是ぬんにあて候、心は、まづ春のやうさはうご
 いてのぼる物也、火のせいはいのぼり物也、はるから夏のをはりに至るまで、
 やうさはまりて、はや氣が秋は下へくだるなり、花も春は木するにさきの
 ぼれども、さはまれば根にかへる也、月日も天のなりばへのぼれば、はや西
 へ下るなり、川にすむうをまで春なつは河上へむかふて居る、秋冬は河下へ
 むかふなり、天地と付てまはる物なり、夏のやう火漸々秋になりて下る時を
 金にとるなり、金はおもき物なり、おもきものは下るなり、陽はかるき物な
 るによりてのぼれり、陽のぼるほどのぼりて老すれば、おもくなりてはや
 下るなり、人の年よりて身のおもく成くらぬなり、故に秋を金にとるなり、
 萬木さばみおちて根にかへり、氣しづむとさきを冬といひ、水に取る、水下り
 てひさし所にたまる物なれば、一年のうごにて、是を水に取るなり、春は木
 也、木も朽はつれば土と成程に、はるのはてに十八日土かつかさどりて土用



なり、夏は火なり、火もさあて
 はいになり、はいは土となるほ
 きに、夏のはてに十八日土がつ
 かさどりて土用也、秋は金なり、
 金もくさりて土へかへる程に、
 秋のはてに十八日土がつかさど
 りて土用なり、冬は水なり、水
 もかさはぬればあては土なり、
 冬のはてに十八日土がつかさど

るなり、十八日づゝ四つにて合て七十二日、又木火金水何れも七十二日づゝにて、合て三百六十日、一年の内をこの五行につかさざり候、

萬物 萬物と申すは何れもこもり候、人も鳥獸草木虫けらに至るまで、皆此うちにてめて、かすくゝの物は一氣よりはじまり、わかれて陰陽と成り、五行の木火土金水は和合して萬の物となり候、一るいあひつぐとてうの一るいくがわひついで、人はひとのるい、馬牛はむまうしのたぐひ、むしけらは虫けら、鳥けだものはうのるい、あひつひで生ずれども、此めんやう五行にはづれたる事なく候、是をもとゝしてばんぶつある事にて候、變通有て萬古さわまらず

右は天地の間にて理、氣、陰陽、五行、萬物、始終を書付る、

人身之部

性 人の身に一つの性と申す物の候、此せいと申すはなにぞといへば、天地の間にて一つの理といふものありと、口にかき付候ひし、其理人の身にうけて

は性といひかへたる物にて候、草の名も所によりてかわりけり、難波の芦は伊勢の濱荻にて候、しかれば此性は色もなく、かたちもなく、空にして目に見えぬ物にて候、みるゑとて、ひとへになき物にてはなく候、かたちなきゆゑに空と申候、縦は風はかたちなく目に見えぬとて、なき物といはれず候、吹來れば松のこすゑをひかかし候、此性も目に見へず、形もなければども、人はこのせいとうごけば、こゑをいたし、物をいひ、立居よろづのなす所、おし動き、はたらさする事、此せいよりなす也、このせいは人にかざらず、鳥獸むしけらまでおなじく請てかはらぬ物なり、ゆびのさき、爪のはしまで、此せい行わたりて有る物なり、すこしなりともこのせいのなき所は、身がなくてたゝぬ也、この身の主人なり、天にあつては理といひ、人にありてはせいといふなり

心 右にかき付候せいと申すをたとへて申さば、かゞみのごとくにて候、鏡に梅の花をさゝぐればむめがうつり、竹をさゝぐれば竹がうつる、かくのごとく

せいに何なりともむかへば、むかふものがうつりて、すなはち心となるなり、むかふ物に此せいがうごくを心と申候、天地の間にて理と申す其理のうごくを氣といひ、人の身にありてせいと申候、其せいのうごくを心と申なり、然れば天にありては氣といひ、人に有ては心といふと、まづ心得らるべく候、是によりて易を天地の心と申すなり、易とはなにぞと申せば、天の一氣が陽とかはり、おんどかはり候を、易と名付申候、易はかはるとよみ申候、しかれば易と申すは一氣の異名にて候、其易を天地の心と申す時は、氣が天地の心にて候、さあれば人の心を天地にありては氣と申候、人にありては則心と申候、天地にては理のうごくを氣と申し、人の身にてはせいのうごくを心と申なり、理とせいと所によりて名かはり、氣と心とは難波の声、いせのはまをぎにて候、あらしとくはしきと本来のかはりあるべし、あらくいへば氣を心ともいひてたがふべからず、こまかにいふときはかくべつなり、

氣 人の身に氣と申す物心の外に在り、是をなにぞといへば、まづ根本の元

氣と申すもの候、へろのしたにありて、おして見れば、つくひにをとり候、氣のみなもとこれなり、この氣のあふぐ事、ふいがうの風のごとくなり、この氣のあふぐに、身の血がなみの立つごとく、一すづ、先へはこびめぐり候、是を脈と申すなり、此元氣がたねてうごかねば、則ち血こつてとゞまり、みやくたへて人死するなり、是によつて人の死するを氣をうしなふと申す也、この氣はひまれ候時、へろのをと申す物候、此へろのをより母の氣を子につたへ候、其氣をへろのしたにうけとめてをき候、是が夜晝あふぎて血をめぐらし、この身いきて居申すなり、この元氣つくれば命たね候、この氣が身のうちをあまねくめぐり候、此氣が心のをせて右へなりとも左へなりともゆくなり、この氣がうごきてつよすぐれば、こゝろがこの氣にひきつられて、物をしうこなひ、手にもちたる物をうちおとし、足にふむ物をふみはづし、つまづきころびなぞするなり、心が氣にしたがへばあしく、氣が心にしたがへばよし、縦たてば氣はあく人なり、心はせん人なり、善人があく人にひかるれ

ばわしく、あく人かぜん人にひかるかばよし、この氣をよきはせにする事、
 よろづの道によるしきなり、此びんさうごひて、血めぐり、氣と血とたゞし
 ければせし存す、せし存すれば心たゞしく、しかれば心はせしよりいせ、せ
 いはけつさの間より出で、血氣にのりて居る物なれば、氣といふ、せし
 ぶ、心といふ、さまじく有れどもそのみなもとは一つとしるし
 識 識を申すはまつはじめの一念よ、あかき物なりとも、しろき物なりとも
 ちやくと見て赤いよ白いよと見付たる時のはじめの一ねんを識と申すなり、
 識はしるとよみ申候、ちやくと見て赤き白きとつたばかりなり、いまだ分
 別の出ぬとさなり、耳にきくも、鼻にかぐも、舌にあじはふるも、身にふる
 へも同じ心もちなり、まつしよの一ねんなり、是よりはじまりていろ
 くの事おこるなり、此識の次に
 意と申すは、右に申す識に、はや分別の出来たを意と申すなり、はじめち
 やくと赤き物を見て、あかきとばかり見たは、はじめ一ねん識なり、しばらく

く見る内に、分別がしやうじて、この赤き物は躑躅つづむか柘榴の花か、いやつゝ
 じの花じやとわさまへしる心を意と申候、見るよりおこりたも、聞よりおま
 たりたも、いづれも同じ事にて候、此意の心は當座くくに付て出来、心にてわが
 身にそなはりたる本心をなやましけがすものなり、此意の心にひかれて、我
 本心をけがしうこなふ物なり、此意の心をわが本心と心得違はゞ、盗人をと
 らへて我子となしたるごとくなり、わが本しんがこの意にひさうこなはれぬ
 やうにする事肝要也、この意は色にそみ香にめづる心なり、
 情 是も心とよみ、なさけともよみ申す也、此情の字は、時にあたり月花に
 ひかひて、すぎにし事を思ひいで、うごくをなさけと申す也、よろこびかな
 しみ、時うつり事さうて、よここびかなしみ、ともにあともなくなれども、こ
 の身に八識と申との候、此第八識にのこりといまりて、月花にひかふとき、
 ひかしうの人のしる事をいはれしは、身の一期はわすれがたきなどいふも
 事が、我身にかくうごも出る也、此うごく心を性を申す也、物にたごつて

は、根本のびんきは根也、膺の下にあり、性は竹なり、心は枝葉なり、げんきのりて居るなり、識は風が來たりてはのうごくなり、意は葉かうごひて聲の生する也、ろのうゑもかせおさまればやむなり、しかれども又時としてろよくとうゑのするは情の心也、本末始終何れとも一物也、
 性よりおこり心に二つの差別ある事、水のうごひて浪となるがごとく、せいうごひて心となるに、心が二つになるなり、せいより生する心がせいのごとくなれば、聖人の心なり、しかるをせいにらむひて血氣にしたがふへに此、心わく人の心となる也、縦は正路正直なり親のうみたる子が、親にはにすしてとなりなるぬす人なる心に似るがごとし、心は性の子なり、せいはずくなるもの也、すぐなり性にはにすして、まかりわたくしなる血氣にしたがふ也、性のすぐなといふは、ゆびを一つあぐれば一つとみるなり、五つあぐれば五つと見るなり。しかればせいには正直なり、しかるを血直にしたがひて氣一つを二つなりとかすめ、よき人をあしきといひなぞするは、皆血氣の

わたくしなり、せいにしたがふて性のごとく、よきをよきとし、悪きをあしきとするは定規をあて、物をさるごどくなり、性が定規也、血氣にしたがふはぢやうごなしにものをさるごどく也、血氣にまかする程に直なる事は無也、
 機 此機大事の物なり、まづ機といふはたとへ物也、機は樞機とて家の戸にあはるツル、といふ物なり、家よりツル、をわけてはかへ人が出るに、よき所へゆくもあしき所へ行も、このツル、を明るところにある也、こゝからわかれて二道になるちまたなり、わが心は善にもうつり悪にもうつる物なり、善へやらんも悪へやらんも氣次第なり、この氣が心をよき所へやらんとあしき所へやらんとまゝ也、この氣がゆるせばあしき所へ心がゆるくなり、此氣がまわりかためてあく所くやらねば善にゆるくなり、此ゆるるに氣を機にたとへて、氣を機といふなり、心のせんしよあく所へ行く戸口なり此戸より、奥にては心はせんにもあくにもつかぬなり、戸口の氣にて善心悪心がさだまるなり、縦へばちいふ子が井のはたにをるを、はしり出て井へつきはめんか、引のけんか、二つの

ぜんわく心がぜんにつくかあくに付くかのさだまる所を機といふなり、クル
 ・といふものは、戸のうちにあり、外から見ぬ物なり、人の氣もうちにわれ
 ども、善惡の心か外へあらはるゝ物なり、この氣をよく見付るか入る事也、
 鈍なるものはこの機をば見ざる也、さりながら犬さへ人の機をよく見る也、
 犬をおろろしがる機あればうのまゝかぞす也、なにとなき人をばしらぬふり
 にてとをすなり、又打つか逐ふかすべき機があれば、やがて見てたちのくな
 り、人として機を見ざるは愚なり、又つといたりたる人の機は、微機とていか
 にもかすかして、一切人に見られぬなり、名人のくらる也、天下にもよくをさ
 まらん機みだれん氣がある也、此機はぜんわく治乱の機なり、廣く天下の人
 のうへにて見るべし、さりながら天下の機は一人の機なり、一人の機か天下
 にあらはるなり、しかる間一人の心は千萬人の心といふ、先言なり、まこと
 に天下をしろしめす心、はやからぬなり、よき時は一人の心が天下にあらは
 れ、あしき時は一人の心天下にあらはるべし、かたしかたし、やすきはかす

ならぬ身なり、

心 機善此機大事也、ぜんへゆかんも愛にあるなり、心か外へ出て善をなさ
 んもあくをなさんもこの機にあり、此機にぜんもあくも、をさまらんもみだ
 れんも、兵法のかちもまけも、身をたてんも身をはたさんも、手をわけ手を
 ひらき、太刀をあげ身をひらき、とびあがりはしりかゝり、さまぐのはたら
 きも、此機より出て外にはたらく物なり、大機大用とはこの事也、かやうの
 だんくをさはめずしては、機を忘れきつて、何事も我ものになる位、又至
 極の所なり、是を機をわするゝと申す也、忘るゝ機とよむなり、今こゝもど
 の田にむれいる鴈白鳥などが、人がろばをとをれども、たゝんとおもふ事を
 わすれてぬるなり、これらを忘機と申すなり、人におろるゝ機をわすれたる
 なり、

神 神の字を伸なりと注をいたし候、のびたるを神と申す也、のぶるとは身
 のうちにのびひろがり、手足のゆび爪のはしまでいたらぬ所もなく、いたり

のびてあるを神と云ふ也、この神はさてなにもものぞと、ふかく工夫して見よと見とゞけて、おもひさだむる事なければ、言葉にとゞ、紙にかき付候を、見申分にては我ものになり申さず候、縦へはあさまものをあさまと言葉にとゞ、紙にかき付て、あさま道理がどくとしられず候、直にあさま物を口にいゝ、時は、どかすしてあさまをしるがどとくに、工夫から知る事にて候、うれによりて禪宗に不立文字と申して、文字をたてず、教外別傳とて、をしへの外、傳の外、別の外、傳へと申候、水を繪にかきてもひやゝかならず、火を繪にかきてもあつからず、水はかやうなるもの、火はかやうなるものと、知るばかりは知れども、余一だんのびやかなる、あたゝかなるといふ火は、直に火水にふれざればしれぬごとく、神ぞ心ぞと申すわけも、おほかたかやうにかき付け申候へは、しれ申候へども、とくとしれ申さぬ所あるべく候、うれば面談にすべく候、神とは此事よとさとり候はねば、會得なりがたきものにて候先づ人の身に元氣と申すものゝ候と、右にくはしくかき付申候、このげんさ

うごき申ゆるに、つく息が口へ出申候、つく息ばかりにて引息なければ、人死するなり、又引息ばかりにてもつく息なければ死する也、このげんさかつくゝ引息ともに出しゝるゝなり、うの氣に血がめぐり候、氣血の二つを家として、此神この身にあつて、この身の主人なり、あるひは性、或は心とて、うのわかちすこしづゝかはり有りといへども、みなもと一にて候、あさまたとへなれども、道にあらざる事天下に一つもなし、理は同じ、たとへば黒き砂糖より白き砂糖が出候、白きたうより氷が出候、たとへば黒きは氣血、しろきは性なり、氷は神なり、又金銀銅鐵の四種のかね、こんはんはたゞ一しゆなり、うゝひ出し、吹ぬきて、其極上なるもの黄金なり、うの次は銀、其つぎはわかゞね、うのつぎは鐵なり、銀銅の内にもよく吹けば黄金あり、鉄のうちにも銀あり、かねの數くおほけれども、みな一しゆの物なり、根本をたゞせば土也、ばんぶつ一理と申して、さまゝのかたちあらわれ候へども、陰陽の外へ出です、この神はわうごんのごとく也、この神内にたつて外

に色くの妙をなす也、

佛 同躰異名也 躰は同じ事也

人この身の内に神有り、愚痴の人は此神を情識にてくらまし、物毎の理に闇くして、物ごとにとゞまり、屈してのびず、生きて居る時、物ごとくに心がとまりて、闇ければ死して猶くらし、是を鬼といふ、明君聖王其外道に明なる人の果給ひたるを神と申候、神は伸なりとて、のびひろがりて一所にとまらず、水の大海にのびひろがり、とけ通して、さわりなきとて候、又鬼はくつなりとて、愚痴たましひはくゞまり、物にとゞまりて、本神にかへらずして、物によりつくなり、是は鬼道と申す也、又鬼より人へかへる也、神にさせざる也、明君せいわう道明なる人の魂をば、まつりいはひて明神と申す也、いさてましませば、めいくんせいわうとあふぎ、はて給へば明神と申す也、内にあると外にあるとのかわりにて候、うちにて外にて神はおなじとにて候、五尺の身のうちにて神明なり、天地を宮として、天地にありて

もひろがらず、五しやくの身のうちにてもせばからず、目にいるむしの躰にも神はまします、うれとてもせばからず、宮室殿を高くひろくしても、一尺二尺にしてもおなじ、しかればよく得道したる人は一間の家をもせばしとおもはず、二十間にすまわても、すみあまます、是神の大小にかへらざるがとし、心がひろければ家のちいさをさらはず、心ひろければ家をも心の内へいる也、家に心をいる人ばせばさをくるしむ也、

神は正直の首にやどると申候は、余所よりかならず神のやうがうありてやどり給ふにあらず、我心正直にして明なる時は、わが心すなはち神にて候、是を正直の首にやどると申すなり、かみはすぐにしてすみたるもの也、人の心はくねりにごり候、正直ならねば神はありながらかくれ申候間、かみくらくとも、正しきなる時は、心のみづすみ候、此時正しきのかうべにやどると申す候に候、にごりたる水にも月のかげはさせども、月かげはあらはれぬとおなじ事に候、又空の雲霧もにごりにて候、雲霧があれば月はありながらく

らく候、此たどへのごとく心がにむりかへば、かみがくらくなり、よろづの
 わしざくらく候なり、神も佛もさどれば我也、道の明なる人は生ながらほと
 けなり、明君せいわうは生ながら神にて候間、死しましくても神なり、い
 きて道に闇く、死してもくらさゆゑに、愚人の魂をは鬼と申す也、神に二つ
 ある事、一には明君せいわうの、いさては道あきらかにして國ををさめ、民
 をやすく、天下のもの、父母とおもひたてまつり、死し給ひたるをかみにあ
 がめ申候、是は明神靈神也、ことに官位高き御神なるべし、一に邪神と申す
 べきは、いさて人にうらみふかく、いさをとりつよく、あくしんなさある人
 うの神のびすして物によりつき、人に取つき、つかれたる人は男女によらず
 物に狂ひ、人をかくなやまし、わざわひおほきによりて、このいかりをやめ
 んどて、かみにいはひ官位などを與へられて、是に満足していかりをやめ給
 ふ事など有り、これらは邪神にて候、酒の酔狂人などをたらし候ごどくにて
 候、明君聖王なごのうへにはかやうなるひけうなどは、いさても死してもな

く候間、まとの御神にはかやうの事もなく候、又神はさやうにもなく候へど
 も、わがきから申しなして、かみにふろくをうけ申すとも御座候、ひとへに
 又人のいひなしとばかり心得たるもあしく候、北野の神、時平の大臣のさん
 げんによりて、あら人がみとなり、さまくわれ給ひしゆゑに、天神とあが
 め給ひてより、いかりをやめられ候、是等も邪神たるべく候、道ある人など
 がかやうに人にうらみふかくあくしんをかかし、其あだを厚うせんなどい
 ふ心は小人にて候、さりながら邪を正にひるがへされらへば、かみは本にか
 へり申候間、明神にても天神にても候、うのどさのいかりも、かならず菅家
 のいかりにてなくして、時の氣のへんたるへく候を、神も申しなすどさはう
 れになり申候、又まことのかみのいかりにてもこれあるべく候、松山のかみ
 のいかりとけたまはずして、あれたまひしに、西行法師まうで、
 うにしへの玉のうてなのうちとても

なからむのちは何にかはせむ

とよみしかば、うのゝちわれ給はぬとなり、いかにも何ぞによりてとびぬれば、あどは氷のとけたる如くに候、其いかりがにどりくねりにて候間、かみはかくれ給ひて、明神にてはなく邪神あくしんにて候、いかりほとけ候へばまどのかみあらはれ候、住吉の明神の詔宣に、我にさどくなし、ぶじをもつてさどくとす、これら眞に奇特なり、なに事ぞ一くせあらば奇特にてはなしさどくなく何事もなく、無事なるがさどくなり、人もまとの道にいたりたる人はなにの奇特もなく、いかにもぶじなものなり、神變げに奇特ありさうなるさしよくなる人は、さまでしかるべき人にはあらず、かみには奇特あるものになし、さつたる事さへわれさどくなしと住吉は詔宣し給ふなり、われと大わくじをくわたて、悪行身にあまり、なんぞ身にかゝる時、かみをたのみて其どがをちんじ、首をさる刀ををらし、命をたすけ給ふやうなるさどくはなさと世、うここに我に奇特なしとたくせんしたふなり、唯正路正直なるものを守らんと神はのべ、正しき正路にて道にかなひ、心明なれば、わが身則ち

明神なり、わが身明神なれば、わが身を守り給ふほごに、神を外にたのますとも、あしき事は有るまじさゆゑに、正直のものを守らんと世、正直正路にさへあらば、かみの守り給ふ道理なり、北野の神詠に、
こゝろだにまことのみにかなひなば

いのらすともかみやまもらむ

と、此うたのさどくなり、しかれば神をあがめ、さうしつでんをたつといふ事も、いらぬものとやぶるへし、神を神とし、佛をほとけとする事は、其道理ある事也、わが悪事をしてうのどがをちんじ給はずば、いらぬものとおもふは無理也、かみほとけへわがむる筋ありて、わがむるものなり、れんく御合点まいるべく候、よろづの事すみやかに會得ならぬもの也、
正直 と云ふ事、人の物をかくしとらず、偽りいはぬばかりを正直とは申さぬ也、正はどつこにも物の一ぱいありて、いたらぬ所もなさを止と申す也、偏と申すは、一方にありて一方には物のなく、片ゆきのしたるを偏と申候、

然れば正と申すは九まがりの貝に入ても水はいたらん所もなく至る者也、其
ごとくに心か片ゆきせずして、ひいさ偏執と云事もなく、心にわたくしわれ
ば私の所へ心かはや片ゆきするほどに、心の身一ぱいにのびひろがりて有る
を正と申す也、直とは右へもかたよらず、左へよらず、少しなりともゆがみ
たる所あれば、かたはらへよるほどに、糸を引たるごとくなる心を直と申す
也、正はよこ、直は豎を申したることばにて候、豎にも横にも片ゆきのなき
心を正直と申す也、直も正も豎とよこのかはりにて、かたゆかぬといふ事に
て候、心がかくのごとく候へば、則ち此心がかみに候間、神は正直のかうべ
にやどり給ふと申すにて候、この心が生てかくのごとくなれば、生ながら神
にて候、死して後にも神を社壇宮の内へいはひこめて尊み申す也、今東照權
現とわがめ申すごとくに候也

澤菴和尚法語終

三身四智或問抄

解題

此書は享和年中の人の手に成れるが如くなれば未だろの何人なりや審にせず
されども三身四智のこと及び禪者の心得べきことなど最と親切にものしたる
ものなれば収めて本篇に入るゝことゝはなしぬ

編者 識

三身四智或問抄

或人問ふ、三身四智と云ふは本來具足するか、後得智の境界が、一時に證得するか、次第を以て修行するか、

答ふ、本と是れ人々具足すと云へども、仮りに妄執の無体なることを明らめざれば、受用自在なることあたはず、夫れ學者參究底を盡して、本來性順に現前すれば、一時に其理体を證得して、一成一切成、階級を経ずして正覺の境界たれども、根機下劣宿障しよくしやう深重の者多き故、若し假りに次第を設けて、淺深を見て修行せしめざれば、一切智、自在智、究竟大菩提を得ることを得せぬなり、何をか一成一切成と云ふ、識神乍ち消散して、本來性現前すれば圓光普遍にして盡法界に充つ、是を清淨法身とし、又は大圓鏡智とす、即ち究竟無餘の三昧と證する故、一切成と云ふなり、是れ第八阿賴耶識の轉變なり、

此中に於て六塵の諸法、見聞覺知等、俗諦の假名有れども、本來性の常分なりと證得して、法身の受用を知るを圓滿報身とし、又は平等性智とす、即ち第七末那識の轉變なり、其自受用の邊を法身の作用と判するなり、是の如き智照能く法理を辨へ、差別の相を知る、是を妙觀察智とす、其他受用の邊を勝應身と云ふ、即ち第六意識の轉變なり、又其他受用に於て見色聞聲、動靜運爲、咳唾掉臂がいだたひまでも皆能く本來性離念の作用なるを、劣應身唯化身とし、又は成所作智とす、即ち前五識の轉變なり、此の如く三身四智全く是他より得るに非ず、暫時も欠少の時有る事なく、吾人相唱和し來るなり、然れども幻妄即空の義を究めず、見道明了ならざる時は、本智觀照の力、微弱なる故、次第を假て修行せざれば、妄習にくらまされて受用自在ならず、遂には法身を全ふして五道に流轉する様なる淺間敷事も有るなり、縦ひ左程には無くても、住果の人となつては何の證もなき事なり、譬へば世の商人の元金を守て賣買をせざるが如し、百年を経ても富貴自在を得ると云ふこと無きの

みに非ず、剩さへ金持貞まことをして慢氣魔に付かれ、大きな禍ひを引起し、種々勞役して終には元金を失ひ、平々の凡下に劣りたる賤者にもなるか如し
問、何をか次第を假りて修行すと云ふ、

答、譬へは商人の賣買に心を盡して、十金を放つて百金を得、百金を放つて千金を得、乃至无量の財寶を聚めて衆人を賑し、心自在なるが如し、金の性は偽物なるにも非ず、本金の性に相違なけれども、但し少分にては用ひるに不足なり、修行人一旦見性したる性は眞實ならざるに非ざれども、觀照の力、微弱にては、業障を轉する事能はず、差別の智自在ならざれば、衆生の機に應ずるも利益を施すと能はず、徒らに見執を増すばかりなり、此の罪業に依りて、無間獄にも墮すべきなり、故に假りに次第を用ひて修するを肝要の事と知るへし、

問、如何んか次第する、

答、若し夫れ眞箇達磨門下宿植徳本の人ならば、前後際斷、無理會の地を正

直の入路なりと知て、大寂定を修し本來性に達す、是を根本の修行と云ふ、本來性とは離念の當体にして、中道實相の義なり、法身とも云ひ、應本とも名づく、先此理に入て次第に智見を全ふするを、理は頓に悟り、事は漸々除く、次第に依て盡す、悟に乗して併せて消すと云へり、是れ上根上智願修の次第なり、初心より功作に渡らず、會不會の沙汰をはなれて只心自在なるを驗とす、十に入九まで中下根なるものなれば、見性と云もさだかならず、次第まぢく逆修するなり、皆彷彿たる縁より修行を起して、眞修無功用の境界に入るなり、

問、中下根逆修の次第とは、如何様の義ぞ、

答、先一通りに是を云はゞ、眼耳鼻舌身の五用に於て流れをかへし、二六時中は何なに麼と推究めて、心行所滅して只空一行なりと見て、事の差別を嫌ひ、深く理を執す、故るに身をあつかうこと甚だ不自由なり、是尋牛より中を見らるまでの位なり、若し此位までにて捨て修行せざれば、我慢の基ひをこしら

へたるに同じ、然れども宗師の呵責を受けて、所得の空を放下して、更に精
彩を着けて怠らされは、一切の縁起形ち有るもかたじけなく、皆是れ夢幻空華な
れば、元來無生なりと観して、真空の力らを用ひて、些々安堵の思ひを作す、
是正しく分段の生死を出づと云ふへし、意根清淨にして法塵に惑はずと云へ
ども是れざりにして修行せされば、撥無因果にして、我は是れ聖人、他は是
凡夫として、法執甚だ重し、是牛を得るより牛に騎るの位なり、然るに宗師
の指南を離れず、古人難逢の話頭に參して、四弘の誓願に策うち、念々に非
を知て、百尺竿頭更に進むの一步を修鍊すれば、法執稍輕ふして一切の諸法に
於て幻化の沙汰をするに及はず、却て勝妙不思議の三昧を獲得すべきの心地
し、進修を楽しみ、長遠不退の志を帯びて、師教の恩淺からざること思惟す
るなり、然れども障縁有て志を果すこと能はざる人多し、是を住果の人と云
ひ、又は頂墮の人とも云ふへし、法界平等自他不二の境界なれば、所作皆穩
當なりと云へども、大用現前するの力乏しき故、格外の人を接すること能

(七六前五の
諸識一七六の
第七第六の二
識をいふ前五
は眼耳鼻舌身
の五識をいふ)

はず、實に惜むべきの人なり、是牛を忘れ人を存するの位なり、人を存する
とは、平等の法理に住する勝妙しやうめうの境界を云ふなり、此時宿因深き人は、自ら
金剛心を起し、時々精彩を着け、任運に變易して眞修をなし、本來性離念
の体にかなふなり、或は善縁に依ては、格外の宗師の激勵きざりを蒙りて、頓に解
脱するも有り、是れ正しく變易の生死を出離する人なり、此位に到るを人牛
俱に忘れて迹方も無く、生死自在、舊きに依て水を見、山を見、千差萬別の
事を見て、夫々の根機に應じて、出離解脱の路を教ゆる善智識と云ふべきな
り、此最后より初心の事を思へば、誠に逆なる次第にころ有りけれ、七六前五
の諸識を轉識と云ふて、第八の種子識より展轉次第して現行したる状なれば
第八は体なり、六七前五は其作用なり、作用を推して其体を究むれば、識の
体第八の外なし、又其第八の体を推し究むるに、種子といふも現前の作業よ
り、いつともなくせ着け置きたる物の外なし、かくの如く現行種子一點の違
ひ無き分明の處を識と名けたるものなり、識字に記持の義有りてシルスと訓

す、此現行せざる幽秘の時を種子とも心王とも本とも体とも二先づ定めて、次第を假りに立てたるものなり、畢竟は本と云ひ末と云ひ種子と云ひ現行と云ふも皆虚妄なり、是を情には有り理には無しとも云ひたるものなり、然れは如來の眞實と明かせるは理の無きことなり、虚妄と説き玉へるは情の有の事なり、此虚妄の有を實なりと分明に記持するを、識と名くるの外に其義無きことなり、是れ全く不覺の過ちに依るなり、若し底を盡して非を知りたれば、順逆本末皆假りに立てたる事にて、迹方も無くなりたる故、此發明の處を假りに鏡に喩へて大圓鏡智と名く、是を白淨識とも無垢識とも如來識とも云へるものなり、即ち第八識の体を、生滅と不生滅と和合して、一に非ず異に非ずと説ける上の不生滅の義を假りに第九と立て、識の故名を存し、如來の体を顯はすなり、虚妄の生滅は元來無体なるものなる故、不生滅の義の中には和合の汰沙すへきに非ず、生滅は不覺の虚妄に依て有りと見るものなれば、不生滅と和合して、起てありと説きたるものなり、生滅は虚妄の故

に滅の義あり、滅するものは元來和合せるものなる故なり、不生滅に和合の義無きことは元來眞實なる故なり、法身と云ひ、本來性と云ふも、唯此譯けに依りての事なり、其不生滅を證したるを大圓鏡智と名けたるもの故、大圓鏡智を第八識の轉變なりと云ひ、第七を轉して平等性智と立て、第六を妙觀察智、前五を成所作智と立つるも、義に依て轉したる名なり、法身を體と立て、化身を用と立て、體の外に用無く、用の外に體なく、體用不二にして平等なる義を明めたる處を報身と名く、修因に報ひたる果報の身と云ふことなり、是を性の盡を全く修に顯はすと云ふなり、此報身自受用の邊を法身の作用とし、他受用の邊を化身の體とする義有り、是を勝應身とて化身の尊勝たる智分を顯はすなり、其作用千變萬化なる上を劣應身とて最鈍根を接する隨情智に名づけたるものなり、第八識の轉して智となりたるを法身と名け、第七識の轉して智となりたるを報身と名け、第六識の轉して智となりたるを勝應身と名け、前五識の轉して智となりたるを劣應身と名づくといへども、此等

の三身四智、願修を用ひて修すれば、唯是本來性なるわりの不思議を成辨するのみなり、一既に無し、なんの三四と云ふことかこれ有らんや、若又逆修ならねば、根機に相應せざる人の前には、化身を究めて報身有ることを知り、報身を究めて法身有ることを知る、若し更に法身を究めされば、法身邊在の人と云ふものなり、故に更に法身を究めて本來性の不思議境界に契ふなり、是を向上の人、向上の行履など云ふなり、六祖大師の本來無一物と云ふは、此時節の事なり、前五識を究め、第六識を究めて、空界を見たる處に於て法身を證したり無一物を得たりと思へるは大なる錯りなり、是は只法身の偏傍にして真理の一分のみなり、譬へば三日の月の如し、圓滿なりと見ゆては居れども、おぼろぐのさわり除かざるなり、此時空界を自性なりと執する見解重きか故、七八二識の微細の生滅へは目がとゞかすして、菩薩根性の人如幻空に住し、二乗根性の人如寂寂に沈む、若し只空を見て煩惱を斷するに意なく、因果を發無するの根性なるは、分別空に墮する故、斷見外道と云ふに

なるなり、中に於て如幻空の人菩薩の願を捨てざれば、進んで差別の言教を疑ひ、究め來り究め去り、日夜に退倦無く金剛定を修鍊し、無理會の處に於て力を着くべけれども、若し眞疑現前せず着力微劣なるは、唯事理一致を見る程の事にて、法執未だ斷ぜざるに依て、實法を認ることを免れざる故、變易の生死に居て生死なることを知らず、澄々湛々として不搖なる處を歸極なりと決定して、罷休する人となる、是れ外寂に内搖けども、揺くと云ふことを覺せず、楞嚴經には湛入合湛識の邊際なりと明かして、識と云ふものは是程位のものじやと行づめの様子を知らしめんとなされて、佛智を以て照顧して御示し有りたるものなり、行者金剛定の無間に入りて、佛智に契ふて本來性の三昧から科瀆して見れば、従前修位の中に事理一致平等性なりと思ひしも、猶是功勳に滯り、法執を忘れざれば、無明初起の動相に於て是一致なり、平等なりと見て、世間未曾有の思ひを作し、境界を決定せしなり、此位に至て微細なる變易生死の上なれば、佛智に契ふを除きては照顧することなる

事にあらず、初起の動相とて動くには非ず、動くべき種子が具つて有るを云ふ、是を第八識の中に業相と云ふ、作業すべき相と云ふ事なり、一致なり平等なり、性常現前すと思ひ入りたるが前の業相の働きて出たる處なり、此一念の上に見相が有る、是を第八識の中に轉相と云ふ、纔に未曾有なりと思ひ入りたる處に於て、能所の分ちが轉起したるなり、其能所轉起したる當位に殊勝の境界を決定する、是を第八識の中に理相と云ふ、唯是れ纔の一念上の事なれば、來由を尋ぬるに其處を見ること成り難し、故に第八識の中に三細と立てたる流注を業相轉相現相と名づけたるなり、若し眞實諸眼明らかなる宗師の指南が、自分の宿因厚くして大勇猛の精進心を起させる力に依りて、不取不捨無理會の處に策勵を加へて、時節到來一念非を知て、佛智に契ふた時、始めて従前の修動皆是れ夢中の作なりと知て、本來性の不思議三昧に遊戯するなり、此時三身も四智も、一成一切成、鵝毛程も相欺くと云ふ事は有るまじきなり、此れ程に心を盡して親切に參究したらば、古人難透の因縁

諸説の處も、一看して便ち了達すること必定なり、廣學多聞ならずとも、佛心宗を續くに堪へたる有刀の大人と云ふべきなり、穴賢々々、又或人云、三身四智の説、學力をからず、修行の次第に依りて、精々道理を究むと云へども、三身三徳等の字義意味、因位果徳の名分に於ては、何の次第と云ふ事をも知らず、願くはこれを聞ん

答云、某とても敎家の釋義に於ては、委く渡り合ふ事能はず、只道理を推して考へ辨ふる分をあらしく演説すべし、恐くは敎者其杜撰なることを笑はんか、夫先の法身とは法を可_レ軌_ルに名く、身を聚集之義とす、諸佛本來性に軌_ルる理の聚集せるを法身とす、聚集と云ふは極成してぬきさしならぬ所を云ふたるものなり、性のうなわりの全分の顯れたる増減無き處を法身と云ふたるものなり、然れば性即ち法法即ち性なるゆる自性身と云ふも法身の事なり、報身とは智の極成したる處に名づけたるものなり、法性の理に違はず、開覺明了に至るを修因として、其境界を得たる處を智とも報とも名づけたるもの

なり、これに自受用他受用の分けを付くる事あり、自受用は法性の理に契ふて明了に作用する三昧に名づけたるものなり、他受用は理の明かに作用せるに就て夫々の應現差別萬端なる上に名づけ云ふたるものなり、即ち應身の中に勝應身と名づけたる處、此他受用身の事なり、應身とは色身の上を云ふなり、是れ法性の理と、理の如く開覺明了したる智と、一点の違ひ無く、全く不二の處に於て無縁の大悲を起し、凡聖同体の底に通徹して、主伴無尽、隨類變化、諸の利樂を作す虚幻の功德の假りに妙用有る上を名づけたるものなり、此れに勝劣を分くる事あり、勝應身は大乗根性の人の爲めに本來圓成の理を悟らしむる方便を作す上に名づけたるなり、劣應身は一切の諸法に執縛せられて、愚かなる小乘根性の人の爲めに種々方便して、漸くに理性の少分を知らしむる示現の上へを名づけ云へるなり、

問、三身の説は畧々其趣きを得たり、三徳三道なき云へる名目、未だ何等の事と云ふを知らず、更に乞ふ其説を作せ、

答曰、三徳と云へる名目一切に通ずと云へども、今は且く佛に就て是を明かさん、佛身の三徳とは、法身の徳を斷徳と云ふて、苦の此身を觀照して、五蘊本來空なりと達得し、一切の煩惱を斷する當体に名づけたるものなり、次に報身の徳を智徳と云ふて、惑ひに依て混煩惱亂する、此意根を觀照して惑ひ、元來無体不實なりと了達したる當体に名づけたるものなり、又次に應身の徳を因徳と云ふて、身口に於て作る處の諸業を觀照して、此結業元來虚妄より起りて實の体性無しと云ふに契ふて、自在無碍の作用衆生を救護し、解脱を得せしむる事、父母の子を養育するか如くなる當体を名づけ云ふたるものなり、凡夫位に在る時は惑業苦の三道と云ひしが、佛位に至りては智斷恩の三徳となるなり、苦の身に於て惑ふ事なれども、惑に依りて業を作り、苦の身を受るに就て呼ぶ時は惑を先きにし苦を後にするなり、又次第を云へば、苦の此身無ければ惑ふ事も無きに依て徳となる上では、斷徳を先づ稱するなり、然りと云へども智の覺明に非れば此身の上の煩惱を斷する事あたはず、衆生

を利益する自在なる作用も起らざるに依て、智斷恩の三徳と呼ぶなり、されども煩惱を斷ぜざれば覺明圓まことかならざる故、因に隨ふて此身に起る煩惱を先づ斷すべきと見る時、斷徳を先きに稱するなり、華嚴經には恩徳を第一と立て有り、是は衆生濟度の大願を起して、自己の煩惱を斷じ、智の覺明を圓かにする次第を用ひたるものなり、法身般若解脫を涅槃の三徳と云ふものは、内證の上にて徳を稱したるものなり、又智斷恩を佛の三徳と云ふは明の化用の上にて徳を稱したるなり、さて其佛の徳と云ふは、何れも常樂我淨を具足なされた處を名づけ云へるものなり、常とは即ち遷らば變せず起滅を離れたるを云ふ、樂とは即ち安穩寂定の義を取り、我とは即ち自在無碍の謂ひとなすなり、淨は即ち垢をはなれて更らにけがる、と云ふことなき義なり、

問、三觀に依りて三徳を成ずると云事も有りや、

答曰、法爾として此義有るへし、夫れ從レ假入レ空は、行人に於ては初觀なれども、通達無碍なる義に於ては、智分の体性なるに就て、果上に般若の徳と

なり報身と名くるなり、智最も初めに居るへきこと考へ知るべき事なり、從空出レ假は、萬法差別の種類を觀照して、非理を行じ作さず群機に應じてあやまたざる故、父子の恩分に契ふて、果上に解脫の徳となり、應身と名くるなり、中道觀は空假の二諦一なるにも非ず異なるにも非ず、言語道斷へ心行處ほろびて、心佛衆生及國土平等無二にして、待對を見ざるに於ては、混煩惱亂の沙汰すべき處と云ふも無ければ、斷じ切た邊際を盡して本來性顯然たる處に就て、果上に法身の徳となり、自性身とも究竟身とも本法身とも名づけたるなり、

又問、根本の無明は、金剛險定後得の無間に斷すと、祖宗門下此地位有りや又金剛險定後得等の名義如何、

答、何れ佛法中の修行なれば、皆此の趣向無くてはなるまじきなり、別して今宗に單刀直入と云ふ指南は、最初より種々對治の方便を假らず、最上根の人に授くる法なり、此の指南に依りて修行する人は、初心より金剛定を習ふ

なり、今金剛論とは、所謂る題文未だ云ならん、喩金剛と云ふ意なるべし、
 金剛とは鵝の毛でついた程のすさまじくなく、無理會の處に於て大疑團を凝ら
 し打成一片に相續する大寂定の確乎として抜くべからざる端的を金剛に喩へ
 たる定を金剛定と名づけたるならん、初心に佛の所離を離るゝとは、根本無明
 を斷せんと取てかゝつて金剛定を習ふを云ふなり、又後得の無間とは、無功
 用の時節を云ふ、所謂後得は無所得に至るを所得とするなり、法執を忘れ切
 て自在無碍、純一實相なるを無間の時節と名づけたるものなり、修行の手覺
 無ければ云ふても移りがたきなり、祖宗門下では名目を立てざれども、實
 には我も知らず其所を現に修習して居るなり、前に述ぶる如く次第を用ひて
 云ふと云へども、皆自性に法とりて修行を起す故、何に邊の義も假り事なり、
 眞實を用ひて論すれば、因と云ひ果と云ふをも離れ、次第前後の沙汰總べて
 あづかる事なきなり能く辨へ知りて修行の迹に滞り、實法定法を認めて
 人を窠窟に引入れ死守せしむる事なかれ、返すくも修行者故身捨命、離念

の處を自己に試みて、白汗を流すを第一の事と知るべし、述ぶる處の關名目
 は皆自己自然得の性分なり、多智多解執深きは却て你が妄想となる、唯你が
 問ふに任せて觀道を謬らせまじと、假りに此答を置くと云ふのみ、蛇の呑む
 水は毒となり、牛の呑む水は乳となる、我か罪科とは云ふべからざらんか、

三身四智辨終

夜船閑話

解題

此書は白隠和尚が白河の白幽子に就きて聞かれたる内観の秘訣を説かれたるものにて禪病を救ふに効益あるものなり白隠和尚のことは第一篇遠羅天釜の解題にもおのしたれば此には略す

編者 誠

序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞へし、遠く草書を裁して吾が
鶴林近侍の左右に寄せて云く、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とか
や云へる草稿あり、書中多く氣を鍊り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、
専ら長生久視の秘訣を聚む、謂ゆる神仙鍊丹の至要なりと、是故に世の好事
の君子是をかもふ事荒旱の雲霓の如し、偶々雲水の徒侶竊かに傳寫し來るわ
るも、秘重し珍蔵して人をして見せしめず、天瓢ひなしく櫃にかさめて匿し
たるが如し、願くは是を梓に^{のちま}辯がふして以て其渴を慰せん、聞く老師常に人
を利するを以て老後を樂しみ玉ふと、若し夫人に利あらば、師豈に是を吝し
み玉はんやと、二虎を含み來て師に呈す、師微笑として笑ふ、此にかいて、
諸子舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の腹中に穿らるゝ者中葉に過たり、諸子即ち訂
正傳寫して、既に五十來紙を見る、即ち封裏して以て京師に寄せんとす、予
が馬齒一日も諸子に長たるを以て、其端由を書せん事を責む、予も亦辭せず

して出す、云く、師鶴林に住する事大凡四十年、鉢囊を掛けしより以來、雲
水參玄の布納子纒かに門闥に跨れば、師の毒涎を甘なひ、痛棒を^う滋しとして
辭し去る事を忘るゝ者或は十年或は二十年、鶴林の下の塵と成る事も亦總に
顧みつる底あり、盡く是叢林の頭角四方の精英なり、各々西東五六里が間に
分れて、舊舍廢宅老院破廟借て以て菴居の處として清苦す、朝艱暮辛、盡餒
夜凍、口に投する者は菜葉麥藁、耳に觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は
噴拳痛棒、見る者額^{あつ}攢め、聞者肌汗す、鬼神もまた涙を浮べつべく、魔外も
また拳を合せつべし、其の初め來る時は宋玉河晏が美貞有て肌膚光澤凝れる
膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫賈島か形容枯槁顔色憔悴するが
如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し、參玄驅命を顧ざる底の勇猛の上士にあ
らざるよりんば、何の樂しみ有てか片時も湊泊する事を得んや、是故に往々
に參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、
疝癰塊痛難治の重病を發せんとす、是を憐み是を愁て師不豫の色有る者連日

乍ち忍俊不禁にして雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて是に授るに内觀の秘訣を以てす、乃ち云く、若し是參禪辨道の工士、心火逆上し、身心勞疲し五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是を治せんと欲せば、縦ひ華陀扁倉だへんそうと云へども頓く救ひ得る事能はじ、我に仙人還舟の秘訣あり、あなたが輩たぐひから試みには是を修せよ、奇功を見る事雲霧を披ひらいて皎日を見るか如けん、若し此秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし、其未だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て、長かく兩脚を展べ、強よく蹈みろろへ、一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此觀を成すべし、我此の氣海丹田腰脚足心總には我が本來の面目、面目何の鼻孔かある、我が此の氣海丹田總には我が本分の家卿、家郷何の消息かある、我が此の氣海丹田總には是れ我か唯心の淨土、淨土何の壯嚴かある、我が此の氣海丹田總には是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか説くと打返へし、常に斯くの如く妄想すべし、妄想の功果つらば、一身の元

氣のつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓊然じゅうねんたる事いまだ篠打ちせざる鞠の如けん、恁麼に單々に妄想し捨て去て、五日七日乃至二三日を經たらむに、従前の五積六聚氣虛勞役等の諸症底を拂て平癒せずんば老僧が頭を切り持ち去れ、此にかいて諸子歡喜作禮して密々に精修す、各々悉く不思議の奇功を見る、功の遲速は進修の精庵に依るといへども、大半皆全快す、各々内觀の奇功を讚歎して休まず、師の曰く、あなたが輩心病全快を得て以て足れりとする事なかれ、轉々治せば轉々參ぜよ、轉々悟らば轉々進め、老僧初め參學の時、難治の重病を發して其憂苦諸子に十倍せり、雖退維谷まる、尋常に心ひろかに思惟すらく、生きて此憂愁に沈まんよりは、如かじ早く死して此草囊を捨んにはと、何の幸ぞや此の内觀の秘訣をつたへて全快を得る事今の諸子の如し、至人の云く、此は是神仙長生不死の神術なり、中下は世壽三百歳なるべし、其餘は計り定むべからず、予則ち歡喜に堪へず、精修怠らざる者大凡三年、心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事覺ふ、此にかいて重ね

て心に竊かに謂へらく、縦ひ此眞悟を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯は一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ、老狸の舊窠に睡るが如し、終に壞滅に歸せん、何が故ぞ今既に獨りも葛洪鐵樹張華費張が輩を見ず、如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生せざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと、此において眞正參玄の上士兩參輩を得て、内觀と參禪と共に合せ並らべ貯へて、且つ耕へし且つ戰ふ者蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩を増し得て、今既に二百衆に近かし、其中間方來の衲子勞屈疲倦の族ら、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密かに此内觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉々悟れは轉々進ましむ、馬年今歳古稀に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず、眼耳次第に分明にして、動もすれば懸懸を忘る、毎月兩度の法施終に怠倦せず、諸に佗方に應じて三百五百の海衆を聚會して、或は五句七句を經に録に雲水の所

望に隨て胡說亂道する者大凡五六十會に及ふと云へども、終に一日も罷講齋を鎖さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時に遙かに勝されり、是皆彼の内觀の奇功に依る事を覺ふ、住菴の諸子各々悲泣作禮して云く、吾が師大慈大悲願くは内觀の大畧を書せよ、書して留めて後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ、師即ち領す、立處に草稿成る、稿中何の説く處ぞ、曰く大凡生を養ひ長壽を保つの要は形を鍊るにしかず、形を鍊るの要は神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり、神凝る則は氣聚る、々々る則は即ち眞丹成る、丹成る則は形固し、形固さ則は神全し、神全さ則は壽がし、是仙人九轉還丹の秘訣に契へり、須らく知るべし丹は果して外物に非ざる事を、千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ、住菴の諸子此心要を勤めてはげみ進んで怠らすんば、禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず、禪門向上の事に到て年來疑團あらむ人には、大いに手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ、何が故ぞ、月高して城影盡く、

惟時寶曆丁丑孟正廿五冥

窮乏菴主飢凍炷香稽首題

夜船閑話

白隱禪師

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を激起し、精鍊刻苦する者既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す、従前多少の疑惑根に和して氷融し、曠劫生死の業根底に徹して漚滅す、自ら謂らく、道は人を去る事寔に遠からず、古人二三十年是何の捏怪ぞと、怡悅蹈舞を忘るゝ者數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊總に脱洒ならず、自ら謂らく、猛く精彩を着け、重ねて一回捨命し去んど、越て牙關を咬定し、雙眼睛を睜開し、寢食ともに廢せんとす、既にして未だ期月に亘らざるに、心火逆上し肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し、肝膽常に怯弱にして、舉措恐怖多し、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る、兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帶ぶ、此において遍く明師

に投じ、廣く名醫を探ると云へども、百藥す功なし、或人曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり、世人是を名けて、白幽先生と云ふ、靈壽三四甲子を閱みし、人居三四里程を隔つ、人を見る事を好まず、行く則は必ず走て避く、人其賢愚を辨する事なし、里人専ら稱して仙人とす、聞く故の丈山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す、人あり禮を盡して咨叩する則は、稀れに微言を吐く、退いて是を考るに大いに人に利ありと、此にかいて寶永第七庚寅孟正中浣纈かに行纏を着け、濃東を發し、黒谷を越ゆ、直ちに白川の邑に到り、包を茶店にかゝりして幽が巖栖の處を尋ね、黒人遙かに一枝の溪水を指す、即ち波の水聲に隨て遙かに山溪に入る、正に行く事里ばかりにして乍ち流水を踏斷す、樵徑もまたなし、時に一老夫あり、遙かに雲煙の間を指す、黃白にして方寸餘なる者あり、山氣に隨て或は顯はれ、或は隱る、是幽が洞口に垂下する所の蘆簾なりと、予即ち裳を褰げて上る、巖巖を踏み、藜藿を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露袷衣を壓す、辛汗を滴て、苦苔を流し

て、漸く彼の蘆簾の處に到れば、風致清絕實に物表に丁々たる事を覺ふ、心魂震ひかろれ、肌膚戰栗す、且らく巖根に倚て數息する者數百、少焉つて衣を振ひ襟を正しく畏す、鞠躬して籬子の中を望めば、朦朧として幽か目を収めて端坐するを見る、蒼髮座膝に到り、朱顏麗ふして棗の如し、大布の袍を掛けて輦草の席に坐せり、窟中纔かに方五六笏にして全く資生の具無し、机上只中庸と老子と金剛般若とを置く、予則ち禮を盡して苦ろに病因を告げ、且つ救ひを請ふ、少焉幽、眼を開いて熟々視て徐々として告げて曰く、我は是山中半死の陳人、榼栗を拾て食ひ、麋鹿に伴つて睡る、此外更に何をか知らんや、自ら愧づ遠く上人の來望を勞する事を、予即ち轉々咨叩して休まず、時に幽恰如として予が手を提らへて、精しく五内を窺ひ、九候を察す、爪甲長さこと半寸、慘々乎として額を拵めてつげて云く、己ぬる哉觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す、實に醫治し難き者は公の禪病なり、若し鍼灸藥の三つの物を恃んで、而して後に是を救はむと欲せば、扁倉力をつくし、華陀

額を擡ひるも奇功を見る事能はじ、公今既に觀理の爲に破らる、勤めて内觀
 の功を積まずんば終に起つ事能はじ、是波の起倒は必らず地に依るの謂なり
 、予が曰く、願くは内觀の要秘を聞かん、學びがてらに是を修せん、幽肅々如
 どして容をあらため、從容として告て曰く、嗚呼公の如きは問ふ事を好むの
 士なり、我が昔し聞ける處を以て徹しく公に告んか、是養生の秘訣にして人
 の知る事稀れなり、忘らすんば必ず奇功を見ん、久視もまた期しつへし、夫れ大
 道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生る、先天の元氣中間に默運して、五
 臟列り、經脈行はる、衛氣營血互に昇降循環する者晝夜に大凡五十度、肺金
 は牝藏にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして膈下に沈づむ、心は火太陽にして
 上部に位いし、腎水は大陰にして下部を占ひ、五藏に七神あり脾胃各々二神を
 藏くす、呼は心肺より出て、吸は腎肝に入る、一呼に脈の行く事三寸一吸に脈
 の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり、脈一身を巡行する事五十次、
 火は輕浮にしてつねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む、若し人察

(勿斗)銅にて
 作りたる鑪に
 して大さ一斗
 を入るへし蓋
 は之にて食を
 炊きて夜は之を
 撃ちて夜行す
 古の軍略なり

せず、觀照或は節を失し、志念或は度に過る則は、心火熾衝して、肺金焦燥す、
 金母苦るしむ則は水子衰減す、母子互に疲傷して五位困倦し、六屬凌奪す、四
 大增損して各々百一の病を生ず、百藥功を立する事能はず、衆醫總に手を束か
 ねて終に告る處なきに到る、蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は常
 に心を下に專にし暗君庸主は常に心を上に恣にす、上に恣にする則は九卿權
 に誇り、百僚寵を待んで、曾て民間の窮困を顧る事無し、野に菜色多く、國に
 餓莩多し、賢良潛み竄れ、臣民傾り恨む、諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、
 終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに到る、心を下に專らにする則は、
 九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘る、事無し、農に餘ま
 んの粟あり、婦に餘まんの布有て、群賢來り屬し諸侯恐れ服して、民肥々國強
 く金に違するの蒸民なし、境ひを侵すの敵國なし、國刃斗の聲を聞く事なく
 、民戈戟の名を知らず、人身もまた然り、至人は常に心氣をして下に充たし
 む、心氣下に充つる則は七凶内に勤く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず

營衛充ち、心神健かなり、口ち氣に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛癢を受けず、庸流は常に心氣をして上に恣にする、上に恣にする則は左寸の火、右寸の金を尅して、五官縮まり疲れ、六親苦るしみ恨む、是故に漆園曰く、真人の息は是を息するに踵を以てし、衆人の息は是を息するに喉を以てす、許俊が云く、蓋し氣下焦に在る則は、其息遠く、氣上焦に有る則は其息促まる、上陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下する則は一陽また復す、若人始陽初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是が信とすべし、大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要せよ、夫經脈の十二は支の十二に配し、月の十二に應し、時の十二に合す、六爻變化再周して一歳を全ふするが如し、五陰上に居し、一陽下を占む、是を地雷復と云ふ冬至の候なり、真人の息は是を息するに踵を以てするの謂か、三陽下に位ひし、三陰上に居す、是を地天泰と云ふ、孟正の候なり、萬物發生の氣を含んで百卉春化の澤を受く、至人元氣にして下に充たしむるの

象、人は是を得る則は營衛充實し、氣力勇壯なり、五陰下に居し一陽上に止まると、是と山地剝と云ふ、九月の候なり、天是を得る時は林苑色を失し、百卉荒落す、是衆人の息は是を息するに喉を以てするの象、人は是を得る則は形容枯稿し、齒牙搖々落す、所以に延壽書に云く、六陽共に盡く、則是全陰の人死し易し、須らく知るべし元氣をして常に下に充しむ、是生を養ふ樞要なる事を、昔し吳契初め石真先生に見ゆ、齋戒して鍊丹の術を問ふ、先生の云く、我に元玄眞丹の神秘あり、上々の器にあらざるよりんば得て傳ふべからず、古しへ黃成子是を以て黃帝に傳ふ、帝三七齋戒して是を受く、夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし、蓋し五無漏の法あり、你的六欲を去け、五官各々其職を忘る、則は、混然たる本源の眞氣彷彿として目前に充す、是彼の大白道人の謂ゆる我が天を以て事する所の天に合する者なり、孟軻氏の謂る浩然の氣、是をひさひで臍輪氣海丹田の間に藏めて、歲月を重ねて、是を守て守一にして去り、是を養て無適にし去て、一朝乍ち丹髓を凝結する則は内

外中間八絃四維、總に是れ一枚の大還丹、此時に當て初て自己即ち是れ天地に先つて生ぜず、虚空に後れて死させる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん、是を眞正丹龍功成る底の時節とす、豈に風に御し霞に跨がり地を締め水を踏む等の鎖未たる幻事を以て快とする者ならんや、大洋を攪ひて酥酪とし、厚土を變じて黄金とす、前賢曰く丹は丹田なり、液は肺液なり、肺液を以て丹田に還へす、是故に金液還丹と云ふ、予が曰く、謹んで命を聞いつ、且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん、恐るゝ處は李士才が謂ゆる清降に偏なる者にあらすや、心を一處に制せば、氣血或ひは滯碍する事なからむか、幽微々として笑て云く、然らず、李氏云はすや、火の性は炎上なり、宜しく是を下らすしべし、水の性は下れるに就く、宜しく是をして上らしむべし、水上り火下る、是を名けて交と云ふ、交る則は既濟とす、交らざる則は未濟とす、交は生の象、不交は死の象なり、李家が謂ゆる清降に偏なりとは丹溪を學ぶ者の弊を救はむとなり、古人云く、相火上り易きは身

中の苦るしむ所、水を補ふは火を制する所以なり、蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して壽を主さざり、相火は下に處して動をつかさどる、君火是一心の主なり、相火は宰輔たり、蓋し相火に兩般あり、謂ゆる腎と肝となり、肝は雷に比し、腎は龍に比す、是故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば必ず迅發の雷なけん、但し雷をして澤中に蔵れしめば、必ず飛騰の龍なけん、海か澤か、水にあらすと云ふ事なし、是相火上り易きを制するの語にあらすや、又曰く心勞煩する則は虚して心熱す、心虚する則は是を補するに心を下して以て腎に交ゆ、是を補と云ふ、既濟の道なり、公先に心火逆上して此重病を發す、若し心を降下せずんば縦ひ三界の秘密を行し盡したり共起す事得じ、且つ又我が形模道家者流に類するを以て、大いに釋に異なる者とするか、是禪なり、佗日打發せば大ひに笑つべきの事有らむ、夫觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者を邪觀とす、向さに公多觀を以て此重症を見る、今是を救ふに無觀を以てす、また可ならずや、公若し心炎意火を收めて丹田及び足心

の間にあかば、胸膈自然に清涼にして、二點の計較思想なく、一滴の誠妄情波なけん、是其觀清淨觀なり、云ふ事なかれ、しばらく禪を抛下せんや、佛の言はく、心を足心にをさめて能く百一の病を治すと、阿含に酥を用るの法あり、心の勞疲を救ふ事尤妙なり、天台の摩訶止觀に病因を論する事甚だ盡せり、治法を説く事亦甚だ精密なり、十二種の息あり、よく衆病を治す、臍輪を縁して豆子を見るの法あり、其大意心火を降下して丹田及び足心に収るを以て至要とす、但病を治するのみにあらず、大いに禪觀を助す、蓋し繫縁諦眞の二止あり、諦眞は實相の圓觀、繫縁は心氣を臍輪氣海丹田の間に収め守るを以て第一とす、行者是を用るに大いに利あり、古しへ永平の開祖師大宋に入て、如淨を天童に拜す、師一日密室に入て益を請ふ、淨曰く、元子坐禪の時さ心を左の掌の上におくべしと、是即ち頭師の謂ゆる繫縁止の大畧なり、頭師初め此の繫縁内觀の秘訣を教へて、其家兄鎮慎が重病を萬死の中に助け救ひ玉ふ事は、精しくは小止觀の中に説けり、又曰雲和尚曰く、我つねに

心をして腔子の中に充たしむ、徒を匡し衆を領し、賢を接し機に應じ、及び小參普説七縱八横の間にあいて、是を用ひてつくる事なし、老來殊に利益多き事を覺ふと、寔に貴ふべし、是蓋し素問そもんにみゆる、恬澹虛無なれば眞氣是にしたがふ、精神内に守らば病何れより來らむと云ふ語に本づき玉ふ者ならむか、且つ夫れ内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛髮、一毫髪ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す、是生を養ふ至要なる事を知るべし、彭祖が曰く、和神導氣の法當に深く密室を鎖ざし、牀を案し、席を煖め、枕の高かさ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の中に閉ざし鴻毛を以て鼻上につけて動かさる事三百息を経て、耳聞處なく、目見る處なく、斯の如くなる則は、寒暑も侵かず事能はず、蜂蠶も毒する事能はず、壽三百六十歳、是眞人に近かしと、又蘇内翰が曰く、己に飢ゑて方に食し、未だ飽すして先止む、散步逍遙して務めて腹をし空からしめ、腹の空なる時に當て即ち靜室に入ら、端坐默然して出入の息

を數へる、一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百より數へ
 放ち去て千に到て、此身兀然として此心寂然たる事虚空と等し、斯如くな
 る事久ふして一息かのづから止まる、出でず入らざる時此息は萬四千の毛
 の中より雲蒸し霧起るが如し、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅す
 る事を明悟せん、譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん、此時人に尋ね
 て路頭を指す事を用ひず、只要す尋常言語を省畧して爾ちの元氣を長養せん
 とを、是故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心
 氣を養ふ者は常に黙すと、予が曰く、酥を用るの法得て開ひつべしや、幽が
 曰く、行者定中四大調和せず、身心ともに勞疲する事を覺せば、心を起して
 應さに想を成すべし、譬へば色香清淨の饅頭鴨卵の大いさの如くなる者、頂
 上に頓在せんに、其氣味微妙にして遍く頭顱の間をうるはし、浸々として潤
 下し來て、両肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃脊梁臂骨次第に活注し將ち
 去る、此時に當て胸中の五積六聚疝癰塊痛心に隨て降下する事水の下につく

が如く、歴々として聲あり、遍身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至て即ち
 止む、行者再び應さに此觀を成すべし、彼の浸々として潤下する所の餘流積
 もり堪へて暖め薰す事、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是を煎湯し
 て浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪以下を漬け薰すが如し、此觀をなすとき
 、唯心所現の故に鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄かに妙好の饅頭を受く
 身心調適なる事、二三十歳の時には遙かに勝れり、此時に當て積聚を消融し
 、腸胃を調和し、覺るを肌膚光澤を生ず、若其勤めて怠らすんば、何れの病
 か治せざらむ、何れの徳かつかさらむ、何れの仙か成せざる、何れの道か成
 せざる、其功驗の遲速は行人の進修の精庵に依るらくのみ、走始め卯戌の時
 、多病にして公の思ひに十倍しき、衆醫總に顧みざるに到る、百端を窮むと
 らへども救ふべきの術なし、此において上下の神祇に祈て、天仙の冥助を請
 ひ願ふ、何の幸ひぞや計らずも此の饅頭の妙術を傳受することと、歡喜に堪へ
 ず、綿々として精修す、未だ期月ならざるに衆病大半消除す、爾來身心輕

安なる事を感じゆるのみ、凝々兀々月の大小を記せず、年の潤餘を知らず、世
 念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるが如し、馬年今歲何十
 歳なる事もまた知らず、中に端由有て若丹の山中に、潜遁する者大凡三十歳
 、世人都て知る事なし、其中間を顧るに恰も黄梁半熟の一夢の如し、今此山
 中無人の處に向て此枯稿の一具骨を捨て大布の單衣纜かに二三片を掛け、嚴
 冬の寒威綿を折くの夜々といへども、枯腸を凍損するにいたらず、山粒すで
 に斷るて、穀氣を受けざる事動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の
 覺るも無き事は、皆此觀の力ならずや、我今既に公に告るに一生用ひ盡さざ
 る底の秘訣を以てす、此外更に何をか云んや、と云て目を収めて默坐す、予
 も亦た涙を含んで禮辭す、徐々として洞口を下れば、木末纜かに殘陽を掛く
 、時に展辭の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで畏づく回顧
 すれば、遙かに幽が巖窟を離れ、自ら送り來るを見る、即ち曰く人迹不到の
 山路西東分ち難し、恐くば歸客を惱さん、老夫しばらく飯程を導んど云て、

大駒履を着け、庚鳩杖をひき、巖窟を踏み、嶮岨を陟る事、飄々として坦途
 を行くが如く、談笑して先驅す、山路遙かに里許を下て、彼溪水の處に到て
 即ち曰く、此の流水に墮ひ下らば必ず白川の邑に到らむ、と云て慘然として
 別る、且らく柴立して幽が回歩を目送するに、其老歩の勇壯なる事飄然として
 世を遁れて羽化して登仙する人の如し、且つ羨み且敬す、自ら恨む世を終る
 まで此等の人に隨逐する事能はざる事を、徐々として歸り來て時々彼の内
 觀を潜修するに、纒かに三年に充たざるに從前の衆病藥餌を用ひず、鍼灸を
 假らず、任運に除遣す、特り病を治するのみにあらず、從前手脚を挟む事得
 ず、齒牙を下す事得ず、類底の難信難透難解難人底の一着子、根に透り底に徹し
 て透得過して大歡喜を得る者大凡六七回、其餘の小悟怡悅蹈舞を忘るゝ者數
 をしらす、妙喜の謂ゆる大悟十八度、小悟數を知らずと、初て知る寔に我を
 欺かざる事を、古へ二三編の襪を着くと云へとも、足心常に氷雪の底に浸す
 が如くなる者今既に三冬、嚴寒の日と云へとも襪せず爐せず、馬齒既に古稀

を越へたりといへども、指すべき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘勵ならんか、云ふ事なけれ鶴林牛死の殘喘多少無義荒唐の妄談を記取して以て佗の上流を誑惑すと、是れ宿とに靈骨有て一祖に既に成する底の俊流の爲めに設くるにあらす、癡鈍予が如く、勞病予に類ひする底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補あらんか、只怒る別人の手を拍して大笑せん事を、何か故ぞ、馬枯糞を咬んで午枕に喧びすし、

夜船閑話終

施行歌

白隱禪師

今生富貴する人は、前世に蒔く種がある、今生ほどこしせぬ人は、未來はきはめて貧なるぞ、利口で富貴がなるならば、鈍なる人はみなひんか、利口で貧乏するを見よ、この世は前世の種次第、未來はこの世のたね次第、ふうき大小ある事は、蒔たね大小あるゆゑぞ、この世はわづかの物なれば、よい種あらんでまきたまへ、たねを惜みてうゑざれば、穀物とりたる例なし、田畑に麥稈むぎのこまかすして、麥ひね取たるためしなし、むきひね一升まきかけば、五升や一斗はみのるぞや、しかればすこしの施しも、果報は倍ばいくあるものを、況やほどこしおほければ、くははうも多しと計はかりしれ、うれゆゑお釋迦も觀音も、施しせよとすゝめたり、さすれば乞食こじき非人まで、救ふところを發すべし、かのかく富貴で持たから、有れば有ほをたらぬもの、おほくの寶たからをゆづる

施行歌

ども、持子が持ねば持ぬもの、少も出畑ゆづらねど、持子はあつばれ持ものぞ、我子の繁昌祈るなら、人を倒さず施行せよ、人をたをしてもつたから、我子にゆづりて怨となる、ひとの恨のかゝるもの、ゆづる我子が沈みさる、升や秤や算盤や、筆の非道をし給ふな、常く商ひするひと、あまり非道な利をとると、死んで三途に入る事を、其身は三途に落入て、屋敷は草木が生蕃る、非道は子孫の害となる、親の悪事が身に酬ふ、世間に敷く有物ぞ、一門繁昌する事は、親が悪事をせぬゆゑぞ、若又親にはなれなば、ますます重恩思ひしれ、子を慈しむ親ぞ、荒い風をも厭ひしぞ、うれは親に思はれて、親を思はぬわろかさよ、かやに不孝な人々は、鳶や烏に劣りたり、娘むす子をしつけるに、惜むたからはなきものぞ、親の後生の爲ならば、其金出して施行せよ、飢死ぬ人を助けなば、是に勝れる善事なし、たどひ萬貫長者でも、死んで身につく物はなし、亦も子供もせに金も、捨て冥途の旅立ぞ、冥途の旅立する時は、耳もさこぬ目も見えず、行衛しらずに門をいで、

をやみぢに入ることぞ、其時後悔かぎりなし、兎角命のあるかぎり、菩提の種をうゑたまへ、命は脆きものなれば、露の命と名づけたり、今宵頭痛が仕初めて、九死一生なるもあり、強い自慢をする人も、暮に頓死をするもあり、けふは他人を葬禮し、明日は我身の葬禮ぞ、然らば頼みなき娑婆に、金銀蓄へなにする、富貴幸ひ有人は、貧者に施しせらるべし、貧者に施しせぬ人は、富貴でくらすかひもなし、狗でも口はずぐるぞや、飢人貧者を助くべし、慈悲善根は其儘に、家繁榮の御祈禱ぞ、慈悲善根をする人は、神や佛にまもられて、天魔外道はより付ず、然れば祈禱になるまいか、よくく了簡せらるべし、恵施しならぬとは、餘りどうよく目にあまる、飢死ぬ貧者を見ぬ振に、暮すころは鬼神か、慈悲善根のなき人は、子孫はんじやう長からじ、實は餘りはなきものぞ、施行で借錢し初めよ、うれころ眞の信心よ、上たる人をはじめとし、頭立たるひとくは、われもくと共に、厚く施行に身を入れよ、貧者の命救ふなら、廣大無邊の善事也、平生貧者に救はれ、身につ

く果報有まいか、人の喰物すつるのを、好んで拾ふてくふ者は、前世に蒔種
たらぬゆゑ、是非なく袖乞する事ぞ、かゝる有様見ながらも、おのゝく仁心
起らぬか、とにもかくにも人として、信心なければ人でなし、此節信心かこ
らねば、全牛馬にことならず、

施行 歌終

安心ほこりたゝき記

白隠 禪師

歸命頂禮御釋迦如來、やれく皆さん聞ても訓なひ、おらが親仁を何國の御
人も、悉多太子がしらぬが佛か、若ひ時から商ひ好にて、親の譲りの家も位
もすほんど打すて、十九の年から山へはいりて、迦闍羅阿羅々の二人の仙人
、師匠と頼みて菜摘水汲薪を樵てな、奉公勤めて元手をこしらへ、三十年目
に初て店出し、華嚴と名づけし結構な代呂もの、賣てみれば、交珠と普賢
の二人は買たが、あまり高くて其余の御客は、盲か聲か見向もせぬから、是
ではいかぬと分別仕替て、阿含と名づけし安もの賣かけ、口上ひねれば店さ
させはしく、御客が来るやら得意が附やら、そこで追々代呂物仕入て、商ひ
手廣に方等般若に、法華涅槃と御客の機を見て、夫々あてがふ商ひ上手に、
須達と名をいふとゑらい金持、滅法にほれこみ、祇園精舎と名を呼屋敷を、

御釋迦にわたがひ店出しさしたら、早速其名が諸方へひろまり、とてつも
なひ程雨ひ繁昌、天上天下に一人の親仁だ巻ても訓なひ、其時妙法秘密の精
薬、法華の一法盛んに流行て、御若ひ幼様竜女と申が、これを買請とつくり
吞込、成佛したらば我等の娘とはせぬらひ違ひだ、又々其時阿闍世と申た無
敵の王様、提婆達多と心を合して、御釋迦の店をば仕舞てのけよと、己が母
者人韋提希夫人を、牢屋へおしこみ、御釋迦の代呂物買さぬ了簡、うこで夫
人は不樂園淨と此世を厭ふて、智恵も元手もござらぬけれども、五障三従か
さなる大病、なとも薬があるなら下され御頼申と、遙に向ふて御願なされば
、御釋迦は承知で五三の桐だよ、此様な客が大かたあらふと、四十余年の長
の月日を、御藏へ納めて仕込でいたが、さらば是から賣かけましようよと、
阿難目連二人の手代を、左右に召連王宮さしてな出現なされて、韋提希夫人
に彌陀の本願他方の稱名、五劫兆載思惟の薬味を、ひとつに合した六字の丸
薬、一向専念産前産後にさし合ござらぬ、智恵も元手もさつぱりいらぬい、

口にまかせて唱るばかりだ、心想羸劣未得天眼、智恵が虚弱で元手のたらな
い、御脈も見ぬいた五障の重病、まして難治の極重悪病これらの性には、是
より外には用ゆる薬は、さつぱりないぞと、御勸なされた夫人は元より、五
百の侍女まで、無始より以來さとりし罪業、煩惱疑惑の癩氣の持病に、三世
の諸醫師もお世を投たり、其場で現益阿耨多羅、汗が流れて即日平癒、
なんと皆さん六字の丸薬用てみなさい、元手のいらぬが肝心要めだ、あんま
り無造作で祖父婆々だましの店代呂物かどちつくり疑ひ、何ぞ利口な物は
ないかと智識に問たら、直指人心見性成佛、御釋迦が則ち莞爾と笑へば、迦
葉が莞爾と笑ふた請賣、是が本法一嗣相傳、實の眼を開いて看れば、御釋迦
も我等も是は何物、本来面目無一物とは、こりやまたとるらい堀だし物だと
、坐禪を始めてやりかけましたが、膝がふりくぶりつきますやら、眠りが来
るやら、背をさやされ大きな御目玉、愛がなんでも心抱所と、さばつてみた
れば、三年むかしに隣りへかしたる黒豆三合糠一升、思ひ出して妄念山く

安心ほこりた、き記

これも我等が性にあはねい、商賈がよふと眞言秘密を、その様な物だと尋
て見たれば、阿字本不生で自身の胸にも阿字が備り、羅字は元より差別とわ
かれて、五智も五大も金胎南部も、此胸一つで父母の腹から生れた所が、直
に佛の位でござんすと聞と其儘、オンアホキヤなどとやりかけたれども、元手
も持ずに自力の商賈、阿字なものにてさつはりしれねい、ろこで圓頓妙法蓮
華即心成佛、扱も無上の妙劑なれども、我等が根機に及びもなひゆゑ、題目
ばかりの功能看板、讀でみたれと元手がないから代呂物買れず、四十余年の
未顯眞實、何の事だと求めて見たれば、六字の名號は法華經の畧にて、藥王
品には妙典八軸吞込時には、西方極樂阿彌陀の淨土へ生れて行ぞと、説て
はわれども、何も勘定だ廻りくって遠道せうより、路銀のいらぬ南無阿彌
陀佛を願ふが近道、なんと皆さんろふではなひかへ、鼠衣を二食でくらして
戒行持つは、始末勘定利口な算用、しかし我等は蚤も虱も、とらずにやわか
ねへ、手をは出して盗はせねども、心に欲くて目かけに持ちたし、嫌もなけ

れば子種がなくなる、虚も少しはつかねばならぬし、酒も呑ねば婚禮振舞、
萬事の附合せ間が渡れぬ、何と是では五戒が持てぬ外の商賈仕様かと思へば
、根機と元手がなくては出来ぬい、とふでも親父の教へに歸りて、元手のい
らねへ六字の商賈、我等が根機にてつさり合ます、然し元手が澤山あるなら
、自力の商ひなされて御覽じ、細ひ元手じや一向いけなひ、棒でも折たら逐
地も去地も茶の木畑で、御迷ひなさるぞ、昔し咄しを聞ても見なさい、諸宗
の祖師蓮、智恵も元手も澤山あれども、六字の藥を御捨はなされぬ、まして
我等は、智恵も元手も根機もないから、自力の躰他力の御船に、乗より外に
は分別御座らぬ、凡夫が其儘佛に成とは、石や瓦が不思議に變じて黄金と成
のだ、夫が嘘なら御寺の坊様に尋ねて御覽じ、何と皆さん嬉しひこんだぞ、
儒道や神道や心學なんぞの外商賈から、あさない敵で、いろくさまく悪
口いへども、我等が親父の仕にせの商ひ、格段違ふてとらひもんだよ、根
元本家は天竺横町、夫から唐土日本へ店出し、八宗九宗と弘めた代呂物、い

やだといふたら、うころにや居られぬ、恐れ多いが上々様でも、御用ひなさ
る、六字の丸樂、朝夕忘れず用ひて御覽じ、四海靜かに現當繁榮子孫長久、
今世の祈禱も來世の利益も、是に過たる藥はないぞへ、虚はつかぬへ是皆御
釋迦の味噌では御座らぬ、本法の事だよホ、オヒホウく

安心ほこりた、き終

教訓雀囀説

白隱禪師

來々やれ來、うれ來、又も御座らぬ、際々ござらぬ、歸命頂禮、皆様聞ねへ
、人々御所持の、心といふやつは、是ぞと申して慥かと致して、手足も眼鼻
も御座らぬ乍らも、扱々自由な、わろめで御座ると、云にはれぬ事とは申
せど、千歳百歳此世に暮すと、思ふて御座るが、虚々する中、頼がておみや
れ、無常の使が、迎ひに御座ると、節季師走が、俄に來た様に、狼狽回つて
、忙がしうだよ、錢金持ねば、人では御座らぬ、杯ど、心得誤まり、欲
徳斗りを、天窓の先から、踵の裏まで、ちつとも忘れず、偶々得難き、人間
世界に、來ころ幸ひ、其上數多の、尊聖の、尊とみ給ひし、五倫や五常の
、大きな道筋、餘さず漏さず、説演給ふて、置れし事なりや、尊ひ事だよ、
往昔々々、未しも此世の、出來ない先から、今年今日まで、算へも及ばぬ、

年月経れど少とも増すに、ちつとも減すに、神や佛は、愈々尊とく、威光も彌まし、思へば思へば、さうでもさやつめは、親玉株だよ、若やれ皆様聞ねへ、神や佛の、ちよちよる寵愛し給ふ、正真正路の、結構な悟りを、一寸となりとも、ろつとなりとも、求むる心が、出来れば幸はひ、相應に斷んで、出精めされよ、おみさん方の、おしやますことには、悪事と申して、外では有まひ、人を殺さず、火付や盗みは、元より爲まひし、何の因果で、死に地獄の、青鬼赤鬼斑鬼のと根も無き虚言、聞耳塞いで、白木の凡夫が、無事は貴人と、御飯の三盃、喰べるに任して、鸚鵡か狸々の、言辭様だが、委細の様子は、夢にも知ねへ、縦ひ知ても、行ひ悪けりや、何にもならねへ、薬りを吞ざる、病人輩には、扁鵲者婆等も匙投捨つ、天窓を抓たる様なのだよ、夫故佛けも、縁無衆生は、濟度は出来ねへ、阿闍提だの、何のかのどて口説て置れた、阿闍提とは、さうした人だよ、どの様な人だよ、問る、此方が、阿闍提のき、ばん是等の大事は、十代傳はる、黄金の釜より、秘藏な

事だに、頼く心得、おうでの、こうでの、すしたもじった、杯どと、理屈でやつても、大事に望んで、何にも成まひ、大事と申て、外では御座らぬ、冥途の方から、使ひが來時、理屈で行なら、さうともこうとも、謂てなみやれ、其場に望んで、四も五も謂さぬ、時刻が移ると、閻魔の目玉の、庇がらん出、杯どぬかして、引立行をや、皆様苦迫こんだよ、現世が此様なら、未來は大方、ろくでは有まひ、必ず由斷をめさるな、魚の中でも、鯉と謂やつは、利巧なやつめで、ありありよいやな、さ、こいさと瀧津瀬登つて、龍ども成げな、狐ねも稻荷の鳥居を、ひよくらひよと飛越、神にも成げな、鳩めはぐうぐう、愚癡なる乍らも、三枝の禮をば、見事勤める、雀はちうちう、忠義の一道、鶴はくく、あはんばの孝行、夜晝啼をも、耳にも留めず、明ても暮ても、口から年貢の出なひを幸はひ、手前勝手と、謂事ばかりが、人では御座らぬ、魚や鳥にも劣ると謂れちや、一分立まひ、本に誠に、一分立すは、元へ歸りて、孝貞忠信、行なひ、めされて、人とお成りやれ、本に